第９章　埴輪樹立からみた地域性と階層性

はじめに

人物埴輪は、数ある形象埴輪の中でも古くから注目、紹介されてきた。現在もなお多くの人々によって、研究が進められてきている。研究の方向性は、主として人物埴輪を含む形象埴輪列の意味するものに、重きが置かれてきたと言えよう。ここで数ある諸説について論及する余裕もないが、水野正好の「埴輪芸能論」が批判も含め、今なお大きな論点となっていることは間違いない。しかし、古墳に立て並べてあった形象埴輪群の意味が、地域、墳形、規模などにかかわらず、すべて同じであったのかどうかという点が、筆者の素朴な疑問として常に存在している。それは、古墳時代の祭祀が地域ごとに異なっていた可能性はないのかということにも繋がり、延いては古墳時代の地域の独立性にも関わってくると考える。本章では形象埴輪（人物埴輪）を取り上げ、形象埴輪の意義についての基礎的作業を行うものである。

１．分析の視点と方法

古墳の形、大きさなどには被葬者の階層性が表されていることは、先学の諸研究によって明らかにされているところである。また、被葬者の傍らに埋納される副葬品にも当然差異があったことだろう。それでは、古墳時代前期から後期まで連綿と存在する埴輪には、その階層性が表れるものなのであろうか。この問題は、古墳時代における葬送儀礼を考える上でも極めて重要な点である。また、その具体的な儀礼の要素を復元するためにも必要不可欠な課題であり、かつ首長（被葬者）とはどのような存在なのかを考察する上でも極めて重要な点と考える。すでに円筒埴輪による大きさの違いについては、増田逸朗によって埼玉県行田市埼玉古墳群を中心に実践されたところである（増田 1987)。それでは、形象埴輪（特に人物埴輪）には古墳ごとにその階層性が表されるものなのであろうか。

このような視点に基づき、本章では人物埴輪の数量的分析をもとにして検討を加えたい。なお、資料的制約のため、検討する人物埴輪は関東地方（福島県を含む）に的を絞って６世紀代を中心に考察したい。

古墳における形象埴輪を語る場合、極めて基本的なことであるが、埴輪が古墳のどの位

置から出土し、どのような種類が存在し、個体数（内訳）はどのようになるのかという点が重要な問題である。しかし、形象埴輪を出土する古墳のすべてが、墳形・規模・出土位置などの判明しているものばかりではなく、墳形・規模・出土位置などが分かっていても、形象埴輪の内容がすべて判明しているわけではない。さらに形象埴輪は多くの場合破片として出土し、全体像の窺い知れるものは少ない。そこで、以下の検討を行うものとする。

1) 人物埴輪の個体数の検討

2) 人物埴輪の器高の検討

1 の検討には、出土埴輪が破片となっていて全体像を復元できない場合にも、どの破片が幾つ存在するかを確認し、破片同士の同一個体性を積極的に認定することによって、ある程度の個体数は確認できる。2 の検討には、出土状態が良好で完形に復元できた人物埴輪の器高を検討する。この場合、双脚の立像と半身像とに分割して検討を行う。

なお、古墳の年代は主として円筒埴輪の編年(川西宏幸の編年)を基礎とした(川西 1978)。また、須恵器に関しては田辺昭三の編年を便宜的に使用することとする（田辺 1981)。検討する古墳の内訳は、前方後円墳 35 基、帆立貝形古墳 13 基、円墳 39 基である（表 1)。

2．人物埴輪の数と高さの検討

2-1　人物埴輪の個体数の検討

まず、基本数を確認しておく。個体数の検討で用いる墳形と規模および埴輪の数が確定できた古墳の内訳は、前方後円墳 31 基、帆立貝形古墳 12 基（突出遺構 1 基)、円墳 30 基である。

前方後円墳（表 2）では、千葉県山武郡横芝光町殿塚古墳（26）が抜きんでていることがわかる。また、同姫塚古墳（25）では墳丘規模の割に 40 体以上の人物埴輪が出土しており、後述する同地域の山武市経僧塚古墳（69）が、径 45mの円墳にして 32 体もの人物埴輪を出土していることからすると、これらの古墳の人物埴輪数の多さとは、千葉県山武郡域における地域性としてとらえることができよう。表 1 から導き出せることは、古墳の規模がある一定の大きさ以上になると、人物埴輪の数が増加しているという事実である。墳丘長 50m級の前方後円墳の良好な資料が不足しているが、ほぼ墳丘長 50m程度がその境界線と考えられる。人物埴輪の個体数が 15 体を超えるものとそうでないものに分けることができよう。さらに、墳丘長 60m以下の古墳では、墳丘長 20m級のものと 30・40m

を超えるもので、やや個体数の推移が認められよう。さらに、20～40m級の個体数推移を延長していくと、墳丘長67mの埼玉県行田市埼玉瓦塚古墳（12）が26体、墳丘長88mの茨城県小美玉市舟塚古墳(2)が30体、墳丘長102mの群馬県高崎市保渡田八幡塚古墳(16)が37体と、ほぼ直線上に並んでいることが分かる。つまり前方後円墳の場合、墳丘長20～30m級の古墳が5体前後であるのを起点とし、40m級の古墳が12～14体、さらに前述の3例の古墳がそれぞれ典型となり、墳丘規模による人物埴輪の数に差異が存在するのである。これらのことから、墳丘長60mを超える前方後円墳で人物埴輪の個体数が極端に少ないもの、例えば62mの埼玉県東松山市おくま山古墳（9）では盾持ち人埴輪が4体出土しているが、これなどは発掘部分や破片資料の問題でさらに個体数が増加するものと考えられる。

帆立貝形古墳（表3）は、合計13基と資料数が少ないが、墳丘長18mから46mまで、ほぼ5～10体の間に固まっていることが分かる。つまり、帆立貝形古墳に関しては墳丘規模の大小があまりないかわりに、人物埴輪の数においてもあまり差異が存在しないといえるだろう。

しかし、群馬県高崎市保渡田Ⅶ遺跡（35）は、他と比較にならないほど人物埴輪の出土数が多い。報告者の若狭徹は当初、同保渡田二子山古墳に伴う突出遺構としてとらえていたが（若狭1990)、辰巳和弘（辰巳1992）や橋本博文（橋本1992）は帆立貝形古墳の削られたものとしてとらえている。その後、若狭は二子山古墳や周辺地の発掘調査の成果により、別区ではなく帆立貝形古墳として認識するようになった（若狭2010)。表中の規模は帆立貝形古墳の後円部が内側に削られたとした場合の復元長を元にしたが、同遺跡の性格に深く関わることであるので、やや長くなるが詳しくみていくことにする。

仮に帆立貝形古墳が削られたものであったとするならば、他の帆立貝形古墳における形象埴輪の樹立位置からすると、くびれ部から前方部にかけて並んでいたということになる。確かに保渡田Ⅶ遺跡の場合、形象埴輪の出土状態は両くびれ部と「後円部」が削られた部分（ＴＳ－Ｎ区）である。しかし、先に前方後円墳における人物埴輪の数を述べたように、40mの前方後円墳としても類例が存在しない。まさに隣にある同保渡田八幡塚古墳中堤Ａ区（16）において出土した人物埴輪と同規模の樹立数となり、墳丘長100m級の前方後円墳と40m級の帆立貝形古墳が、墳丘規模に倍以上の差異が存在しながら、人物埴輪に関しては数からいえば同規模となってしまうことになる（ただし、同遺跡の場合盾持ち人が16体と極めて多いことが特筆されるが、仮に盾持ち人の数を差し引いたとしても人物埴輪の

数は21体であり、いずれにしても他の古墳とは掛け離れた存在といえる)。さらに、前述したように、千葉県山武郡域に関しては、他地域の墳丘規模と形象埴輪の数の相関関係ではとらえられない独自性が存在するが、北関東を見渡してみても墳丘長40mの帆立貝形古墳・前方後円墳でこれほど多くの形象埴輪を出土したものは皆無である。また、保渡田Ⅶ遺跡よりも墳丘規模の大きい埼玉県熊谷市女塚1号墳(34)が、確認できるだけで7個体しか人物埴輪を出土していないのは奇妙である。女塚1号墳は周溝を全掘したわけではないが、墳裾はある程度発掘しており、ことに形象埴輪が多数出土した前方部に関してはほぼ全掘しており、多少数の増加はあっても10体前後であろう。以上の点から、保渡田Ⅶ遺跡の「突出遺構」は帆立貝形古墳の削られたものではなく、保渡田二子山古墳に伴う「別区」ととらえた方が、より蓋然性が高いのではないか。人物埴輪の数の多さ、種類の多さに対しても、そのように解釈した方が説明はつくと考えられる。

円墳(表4)は、合計30基を検討対象としたが、一見して千葉県山武市経僧塚古墳(69)が抜きんでていることが分かる。同古墳は墳丘規模が45mで二重堀をもつ、円墳としても破格のものである。さらに同古墳は山武郡域に所在しており、殿塚・姫塚古墳を筆頭に、墳丘規模のわりに形象埴輪を多数出土する前方後円墳がいくつも築かれる地域である。このことから、経僧塚古墳が形象埴輪を多数樹立させていることも理解できよう。経僧塚古墳はひとまず考慮の外に置くとして、他の29基の古墳を検討してみると、総数10体までの間で一つの纏まりが認められるとともに、それに外れるものとが存在する。総数10体を超えるものをみると、墳丘規模が25mを超える古墳に限定できる。この中で径25mの千葉県成田市竜角寺101号墳(70)は、19体の人物埴輪を出土しているが二重堀をもっており、この堀の直径は45mに達するものである。さらに、茨城県つくば市下横場塚原34号墳(46)は現状では径26mの円墳と推定されているが、この数値は墳丘変形後の現状であり、今後墳丘確認調査を行えば墳丘規模などの変更される可能性がある。また、径36mの群馬県太田市オクマン山古墳(67)は不明な点が多く、個体数の増加も在り得る。

これらのことを総合すると、円墳の場合10体以下のものは径25mまでの間で纏まりをもっており、抜きんでるものは存在しないが、10体を超えるものとなると墳丘規模も大きくなるという傾向が大まかにいえよう。

2-2 人物埴輪の高さの検討

まず基本数を確認しておく。高さの検討で用いる墳形と規模および人物埴輪の高さが確

定できた古墳の内訳は、前方後円墳22基、帆立貝形古墳7基、円墳21基、突出遺構1基である。なお、胡座や倚座、弾琴などの座っている人物埴輪に関しては、高さの比較から除外した。

半身像の人物埴輪（表5）では、高さが100cmを超えるものとそうでないものとに分けられる。100cmを超えるものには、径45mの円墳である千葉県山武市経僧塚古墳（81）、墳丘長58mの前方後円墳である千葉県山武郡横芝光町姫塚古墳（27）、墳丘長97mの前方後円墳である群馬県高崎市観音山古墳があげられる。このうち、姫塚古墳は表中では98cmの馬子のみであるが、女子埴輪に復元すると100cmを超えるものが存在する。これらの古墳からいえることは、経僧塚古墳は前述の通り円墳としても規模・形状とも抜きんでる存在であり、姫塚古墳は中規模前方後円墳であるが個体数は抜きんでるもの、観音山古墳は100m級の大前方後円墳である。つまり、墳丘規模の大きな古墳は半身像の人物埴輪も大きいという傾向が伺える。

その他の古墳の状況は、径7mの円墳である群馬県高崎市下條2号墳から墳丘長68mの前方後円墳である千葉県香取市城山1号墳まで墳形と規模の関係というより、一つの古墳の中で大きさにバリエーションが存在することが分かる。しかし、そのバリエーションも人物埴輪の大きさが飛び抜けて大きくなるものは存在せず、同一古墳の中で纏まりを持っていることも事実である。

双脚の人物埴輪（表6）では、半身像の検討結果に比べ墳形・規模と人物埴輪の高さに明確な相関関係が存在するようである。すなわち、径20mの円墳である神奈川県厚木市登山1号墳（85）では85・95cmであり、径42mの円墳である埼玉県行田市酒巻14号墳（65）では94・103・116cm、墳丘長45mの前方後円墳である千葉県市原市山倉1号墳（21）では114・119・122cm、墳丘長88mの前方後円墳である茨城県小美玉市舟塚古墳（2）では115・120・127・139cmというように高さに一定の傾向が認められる。人物埴輪の数の検討で数の多さが指摘できた千葉県姫塚古墳（27）は、高さでも他の古墳とは異なった傾向が認められる。

以上のように、人物埴輪の高さについても墳形・規模との相関関係が認められ、特に双脚の人物埴輪にはそれが如実に表れていることが分かる。

3．まとめと結論

以上の検討で、人物埴輪は古墳ごとの墳丘形態・規模にかなり左右されて樹立数、そして高さまでも一定の階層性が存在していたことが判明した。また、地域的に数・高さに偏りがあることも判明した。ことに数の差異は、古墳における埴輪について考える際、その具体的な様相を知る手掛かりとなる。つまり冒頭に述べた通り、埴輪が表しているものが何なのか、またその表しているものがはたして画一的であったのかどうか、この点に関して筆者の考えるところを述べ、結論としたい。

人物埴輪を中心とする形象埴輪群をめぐる解釈としては、おおむね以下のような諸説が存在する。

1、葬列……後藤守一、滝口宏、市毛勲（殯を含む）

2、殯……和歌森太郎、増田精一、若松良一、橋本博文

3、殯宮儀礼……森田克行

4、首長権(霊)継承儀礼……水野正好、橋本博文、須藤宏

5、1・2・4の存在……小畑三秋

6、披葬者の顕彰碑的性格のもの……杉山晋作、和田萃

7、供養・墓前祭祀……高橋克壽、車崎正彦、梅沢重昭

8、他界における王権祭儀……辰巳和弘

9、集落・居館での祭祀→墓前祭祀→生前の儀礼……坂靖

10、神宴儀礼……小林行雄、森田悌、日高慎

11、殉死の代用から来世生活……増田美子

12、死後の世界における近習……塚田良道

これらの諸説のなかで、5や6、9の他はどちらかというと形象埴輪のバリエーションを排除した説であるといえよう。すなわち形象埴輪の表している祭祀は10mにも満たない円墳から100mを超えるような前方後円墳まで、一律に同じものであるということを出発点としているのである。

しかし、今回の検討によって、墳丘形態・規模によって人物埴輪に階層差が存在することが判明し、また地域性の存在も判明した。このことは、一つの解釈を当てはめることに疑問を投げ掛ける結果といえるかもしれない。古墳時代の祭祀は関東地方の人物埴輪を例にとってみても、かなりのバリエーションが存在していた可能性もあり、これが全国各地

となればなおさらであろう。人物埴輪をめぐる解釈として、文献史学の岡田精司は「ことに、考古学者の間では、大嘗祭を古墳祭祀や人物埴輪と結びつけて論じる傾向がある。古代の葬制と神祇祭祀は別個のものであったし、古代首長の儀礼は地域ごとに個性に富んだ儀礼がおこなわれていた可能性が大きい（岡田 1983：p.27)」と述べている。聞くべき意見である。

つまり、埴輪祭祀をすべて、葬送儀礼のうちの一場面と解釈するのではなく、墳丘形態・規模などに表れた被葬者の立場や地域性によって、それぞれが異なった場面を表していると解釈したほうがよいのかもしれない。そうなると杉山晋作の「古墳の被葬者の生前の活動のうちもっとも記念すべき業績を場面として残す顕彰碑的意図（杉山 1986：p.15)」によって形象埴輪が立て並べられたとする説は魅力的である。

しかし、巨大古墳から小規模古墳まで、形象埴輪に表されている場面という意味では共通点も見出せよう①。いずれにせよ、いままでの形象埴輪（人物埴輪）論に欠けていたもの、すなわち人物埴輪の細かな分析と形象埴輪群像としての具体的な個々の動作の意味（場面）を突き詰めていった上で、総体として形象埴輪の表している意義を考える必要があろう。次章において、埴輪の意義について問題点や筆者の考え方を述べてみたい

おわりに

以上人物埴輪を題材にとり、古墳における使われ方の違いを数量によって検討してきた。墳丘における樹立位置や、他の形象埴輪との関係などには一切触れることができなかった。本来ならば密接に関わる他の形象埴輪を含め、論を進めていく必要があろう。第 10 章および第 11 章において、その一端を述べていくことにする。

註

① 終章にて、改めて形象埴輪に表された場面について考究したい。

表1 検討古墳一覧

古　　墳　　名	規　模	時　　期	男	武人	盾持	女	不明	合　　計	その他の形象埴輪
：前方後円墳									
1．茨城県石岡市丸山４号墳	35	Ｖ新TK43	1	2		4		7	馬
2．　〃　小美玉市舟塚古墳	88	Ｖ中	7	7	4	1	1	20(30?)	馬、騎馬?、家、舟?
3．　〃　東海村舟塚１号墳	32	Ｖ新TK43	3			1	2	6	家、蓋
4．　〃　常陸大宮市騎山４号墳	21	Ｖ新	2	2		1		5	鹿
5．　〃　取手市市之代３号墳	22	Ｖ中	2	1		2		5	馬
6．　〃　かすみがうら市富士見塚古墳	105	Ｖ古~中			1	1	1	3	鹿、犬、家、動物小像
7．栃木県小山市網４号墳	30	Ｖ新	1			1	3	5	鞆
8．　〃　鹿沼市狼塚古墳	27	Ｖ新	3			2		5	馬、靭、大刀
9．埼玉県熊谷市野原古墳	40	Ｖ新	4			2	1	7	馬、大刀、槍、団扇
10．　〃　東松山市おくま山古墳	62	Ｖ中			4			4	
11．　〃　坂戸市塚の越１号墳	30?	Ｖ中	2		1	1		4	馬
12．　〃　川越市南大塚４号墳	36	Ｖ新TK217	4			4		8	馬、家、盾、靭、大刀、槍
13．　〃　行田市埼玉瓦塚古墳	67	Ｖ中TK10	12	6	1	7		26	馬、鹿、犬、水鳥、家、盾、大刀
14．　〃　加須市小沼耕地１号墳	34	Ｖ中~新TK10				4	3	7	馬、鹿、犬、猪、水鳥、家、盾、大刀
15．　〃　桶川市ひさご塚古墳	41	Ｖ新TK209	2			1	6	9	
16．群馬県高崎市観音山古墳	97	Ｖ新TK43	7	5	1	7		20	馬、鶏、家、盾
17．　〃　高崎市保渡田八幡塚古墳(A区)	102	Ｖ古	9	2		2	23	37	馬、水鳥、鶏
18．　〃　伊勢崎市境町天神山古墳	124	Ｖ中	5	1		4	1	11	馬、犬、猪、鶏
19．　〃　太田市新田二ツ山１号墳	74	Ｖ新	2				10	12以上	馬、鳥、家、靭、槍、翳
20．　〃　榛東村高塚古墳	60	－TK10		1		1		2	馬、家、盾、大刀、靭、鞆、弓、器台
21．千葉県市原市山倉１号墳	45	Ｖ新	9			4		13	馬、水鳥、鶏、大刀、翳
22．　〃　山武市森台７号墳	26	Ｖ中~新	3			2	1	6	馬
23．　〃　芝山町殿部田１号墳	33	Ｖ中	2	4		5		11	馬、家
24．　〃　〃　宝馬１号墳	25	Ｖs新	1			1	2	4	靭
25．　〃　〃　宝馬127 号墳	34	Ｖ新	8			4	1	13	馬
26．　〃　〃　高田木戸前１号墳	40	Ｖ新	3			9		12	鶏、家、大刀
27．　〃　横芝光町姫塚古墳	58	Ｖ新TK43	31			9		40	馬
28．　〃　〃　殿塚古墳	88	Ｖ新	40			15		55	馬、牛、犬、猪、水鳥、鷹、家、靭、鞆、翳
29．　〃　松尾町朝日ノ岡古墳	76	Ｖ新	4			2		6(多数)	馬、水鳥、鶏
30．　〃　横芝光町小川台５号墳	30	Ｖ中	5	4		5		14	馬、鹿、水鳥、鶏、家
31．　〃　我孫子市高野山１号墳	36	Ｖs新	1	1	2	2	5	11	馬、靭
32．　〃　香取市市片野11号墳	32	Ｖ新	6	2				8	馬
33．　〃　〃　片野23号墳	33	Ｖs新	1			2	3	6	家
34．　〃　香取市城山１号墳	68	Ｖs新TK43	10	2		3		15	馬、家、猪?
35．　〃　〃　城山５号墳	51	Ｖ新TK43	2					2	
：帆立貝形古墳									
36．茨城県水戸市杉崎コロニー87号墳	30	Ｖ中TK10	1	1			1	3	
37．栃木県上三川町西赤堀狐塚古墳	25	Ｖ新	3			2	1	6	馬、盾、靭、団扇
38．埼玉県熊谷市女塚１号墳	46	Ｖ古	2	1	4			7	
39．群馬県高崎市保渡田Ⅶ遺跡(突出遺構)	-40	Ｖ古TK47	10	2	16	3	6	37	馬、犬、猪、家、盾、蓋、壺
40．　〃　高崎市上芝古墳	18	Ｖ中	2	2		2	2	8	馬
41．　〃　前橋市内堀Ｍ－１号墳	35	Ｖ中~Ｖ新	3		1	1		5	馬、家、盾、靭、鞆、大刀、槍、帽子、翳
42．　〃　太田市塚廻り１号墳	26	Ｖ中MT15			4	2		6	馬、靭、大刀
43．　〃　〃　塚廻り３号墳	23	Ｖ中	4			5		9	盾、大刀
44．　〃　〃　塚廻り４号墳	29	Ｖ古~中	6			4		10	馬、家、盾、大刀
45．　〃　大泉町古海松塚11号墳	32	ⅣTK208	2+			3		5+	馬
46．千葉県市原市御蔵目浅間神社古墳	30	Ｖ中	2			1	1	4	馬、猪、鹿、鶏
47．神奈川県横須賀市蓼原古墳	28	Ｖ新	2			3	2	7	馬、家
48．福島県泉崎村原山１号墳	20	Ｖ古TK23	6		2	1	2	11	馬、鷹
：円墳									
49．茨城県筑西市女方３号墳	24	Ｖ新?				1	6	7	馬
50．　〃　つくば市下横場塚原34号墳	26?	Ｖs新	9		1	2	2	14	馬、鹿
51．　〃　取手市大日仏島	18	Ｖs新?	5			1	1	7	馬、鶏、靭
52．　〃　かすみがうら市粟田石倉古墳	21	Ｖ新TK209		1		2	3	6	馬、盾
53．　〃　水戸市杉崎コロニー88号墳	20	Ｖ新	2			2	2	6	馬、鶏
54．　〃　ひたちなか市鉾ノ宮２号墳	16	Ｖ新	1			2	1	4	馬、器財
55．　〃　常陸太田市端竜古墳	11	Ｖ新	3			1		4	馬、犬?
56．　〃　茨城町トノ山古墳	20	Ｖ中	1					1	
57．栃木県足利市葉鹿熊野古墳	15	Ｖ新?	4			3	1	8	馬、家、靭、大刀、翳
58．　〃　真岡市鶏塚古墳	22	Ｖ新	3	1		5	1	10	鶏、盾、鞆、大刀、舟
59．　〃　〃　亀山大塚古墳	35	Ｖ新	2			1	1	4	
60．埼玉県寄居町小前田９号墳	17	Ｖ新TK43	2			3	2	7	馬
61．　〃　〃　小前田10号墳	22	Ｖ新	2	1		4	2	9	馬、盾、靭
62．　〃　〃　小前田11号墳	10	Ｖ新	1			3	1	5	
63．　〃　熊谷市三ケ尻林４号墳	20	Ｖ新TK209	2				5	7	馬、家、靭、大刀
64．　〃　嵐山町屋田５号墳	22	Ｖ新	2	1			1	4	馬、家、盾
65．　〃　行田市酒巻14号墳	42	Ｖ新	7			4		11	馬、靭、大刀
66．　〃　〃　埼玉２号墳	23	Ｖ中MT15	2					2	馬
67．　〃　神川町諏訪ノ木古墳	14	Ｖ新	3			2	3	8	
68．　〃　本庄市御手長山古墳	42	Ｖ新TK217	2					2	馬、家
69．　〃　上里町寺浦１号墳	15	Ｖ中	1			2		3	馬
70．　〃　東松山市古凍７号墳	17	Ｖ中	2				1	3	
71．群馬県高崎市下條１号墳	9	Ｖ新TK10	1			1	1	3+	馬、家、靭
72．　〃　〃　下條２号墳	7	Ｖ新TK43	4			3	1	8	馬、家、盾、靭、鞆、大刀
73．　〃　富岡市富岡５号墳	30	Ｖ中TK10	3			3		6	馬、盾、靭、鞆
74．　〃　〃　芝宮79号墳	17	Ｖ新TK43	4			1	3	8	馬、鳥、家、靭、大刀、帽子、蓋、団扇
75．　〃　伊勢崎市五目牛13号墳	28	Ｖ新TK209	1			2	3	6	馬

76. 群馬県伊勢崎市石山南古墳	16	—	1			1		2	馬
77. 〃 前橋市白藤F－2号墳	22	V古TK47				1	1	2	馬
78. 〃 太田市オクマン山古墳	36	V新?	3	2			5	10	馬、家、靭、大刀、鏡
79. 〃 前橋市今井神社2号墳	40	V新TK209	1	2				3	馬、靭
80. 千葉県市原市南向原4号墳	22	V中TK47				2	3	5	馬
81. 〃 山武市経僧塚古墳	45	V新	10			17	5	32	馬、犬、水鳥、家、靭
82. 〃 成田市竜角寺 101号墳	25(45)	V中TK10	2	2	4	6	3	19	馬、犬、猪、鹿、水鳥、家
83. 〃 〃 正福寺1号墳	20	V中	2			1	2	5+	馬、水鳥
84. 〃 流山市東深井7号墳	14	V新	2					2	鶏、魚
85. 神奈川県厚木市登山1号墳	20	V新	4	1		4		9	馬、鶏、鳥、家
86. 福島県相馬市丸塚古墳	30	IV~V古	4			2		6	馬
87. 〃 会津坂下町経塚1号墳	24	V中	2	1		3	1	7+	馬、騎馬、鶏、鳥、家、高坏

表2　前方後円墳における人物埴輪の数

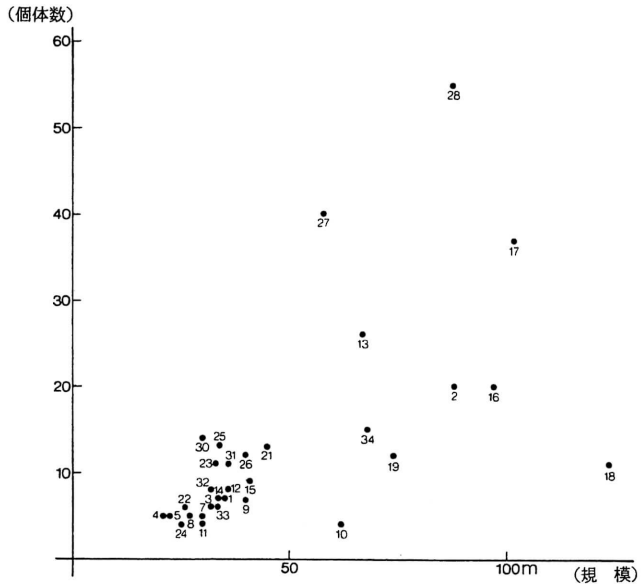


表3　帆立貝形古墳における人物埴輪の数

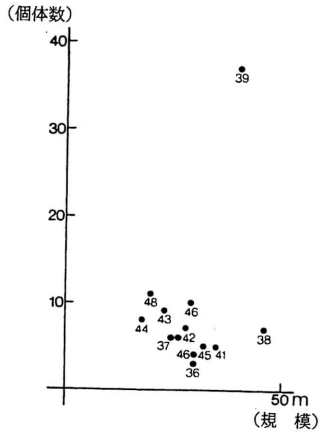


表4　円墳における人物埴輪の数

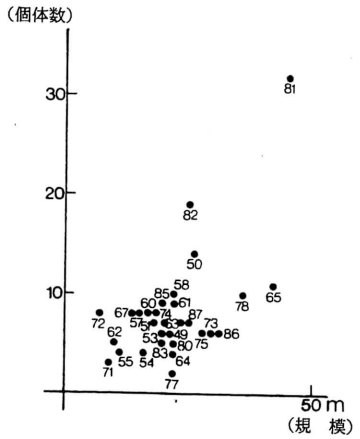


表5　半身人物埴輪の高さ

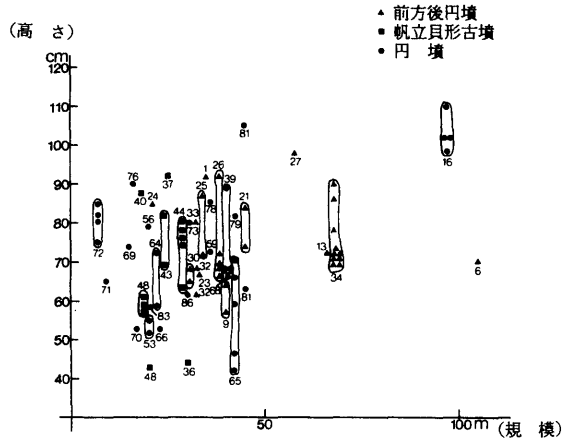
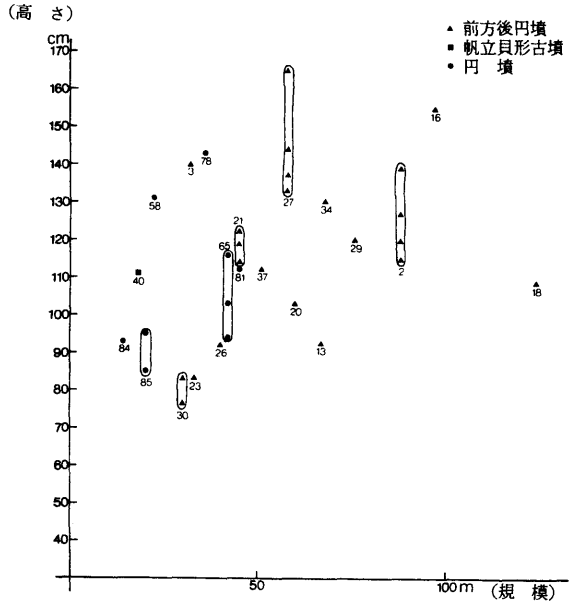


表6　双脚人物埴輪の高さ



第 10 章　埴輪群像を読み解く

－埼玉瓦塚古墳をもとにして－

はじめに

瓦塚古墳は埼玉県行田市埼玉に所在する墳丘長 73mの前方後円墳である。同古墳が所在する埼玉古墳群は、115 文字の金象嵌鉄剣が出土した稲荷山古墳や、馬冑・旗挿、銅鋺など多彩な副葬品が出土した将軍山古墳といった著名な古墳が集中する場所であり、その中でも瓦塚古墳は中規模の前方後円墳である。多くの前方後円墳が存在する埼玉古墳群ではあるが、埴輪の様相が判明しているものは極めて少ない。例えば、武装男子頭部や鈴鏡女子などが出土した稲荷山古墳は、トレンチ調査のため、埴輪の全容はわかっていないし、将軍山古墳も残存状況がわるく、その全体像を知ることはできない。一方、瓦塚古墳は断片資料も多いものの、ある程度形象埴輪の全体像を知ることができる。

日本各地において、比較的規模の大きい前方後円墳の資料は、いずれも断片資料ばかりである。どのような埴輪がどれだけ立て並べてあったのか、ということがわかる事例は案外少ない。近年の調査で大阪府高槻市今城塚古墳の埴輪配列が判明したが（森田 2009・2011a・2011b)、それ以外には近畿地方の前方後円墳で埴輪配列が判明している例はほとんどない。このことから、瓦塚古墳は稀有な事例であり、埴輪群像の意味を読み解く為には極めて重要な資料である。

1. 瓦塚古墳の埴輪群像

9 次にわたる発掘調査の結果、二重の堀、方形の造出し、中堤と外堀の間に渡り土手が確認された。発掘区域からは多くの埴輪や須恵器、土師器が出土しており、なかでも西側中堤周辺からは、多数の形象埴輪が出土した。残存状況には著しい差異が存在しているが、ほぼ樹立当時の様子を把握することができた。すなわち、人物埴輪（26)、馬形埴輪（6)、水鳥形埴輪（2)、犬形埴輪（2)、鹿形埴輪（1)、家形埴輪（4？)、大刀形埴輪（3)、盾形埴輪（5）である。すべての埴輪は、外堀に落ち込んだ状態で出土しており、原位置をとどめていたものは皆無である。しかし、その落ち込み方を詳細に観察すると、当初は中堤の外堀寄りに立て並べられていたと考えられた。また、出土状態では何個体もの形象埴輪

が折り重なって出土している部分と、あまり重ならずに出土している部分が存在する。中でも両手を突き出す女子や男子弾琴像、円柱家、格子壁家、水鳥などはそれぞれ纏まって出土していることから、外堀への落下が埴輪樹立当時の配置状況をある程度反映していると考えるに至った。その結果、図1のように、これらの埴輪群を中堤上で積極的に復原した。

埴輪群はA群、B群、C群、D群にわけられたが、A群からC群とD群の間には、約3mにわたって遺物の出土しない部分が存在する。当初から距離を置いて配置していた可能性が高い。すなわち、大きくみたときに埴輪配置としては2ヶ所と捉えることができよう。さらに、形象埴輪の種類を考えたとき、AからC群とD群では明らかに差異が存在する。すなわち、前者では家・大刀・盾などの器財埴輪とともに、人物埴輪も武装男子（3）や双脚男子（3）、男子弾琴像（2）、女子坐像（1）や女子像（6）であるのに対して、後者では馬（6）と馬曳き男子（6）、水鳥（2）、犬（2）と鹿（1）と狩人（1）という構成である。また、盾持ち人（1）は中堤の南西コーナー付近から出土している。

2. 瓦塚古墳埴輪群像のこれまでの見解

瓦塚古墳の埴輪群像に対して、積極的な意見を述べているのは若松良一である（若松1986a・1992bなど）。若松は、瓦塚古墳における琴弾像、女子坐像、円柱寄棟家（舞台）などの存在から、「魂振り歌舞の再現」に代表される「モガリ（殯）」と捉えている。また、平行突帯家を殯屋と想定している。

それに対して、橋本博文は瓦塚古墳において首長が存在する可能性はないのか、という疑問を提出するとともに、殯屋とした家形埴輪にも疑問を投げかけた（橋本1987）。さらに、群馬県高崎市綿貫観音山古墳の埴輪群像は「次期首長による代替わりの儀式」とする一方、同伊勢崎市境剛志天神山古墳の埴輪群像は「首長の再生と首長権の継承」を示すとした（橋本1993:pp.18-19）。いわば、水野正好（水野1971・1990など）に代表される「首長権（霊）継承説」と「殯説」の折衷案といえよう。

森田悌は文献史学の立場から、葬列、首長霊継承儀礼、殯、生前生活再現説をことごとく否定すると共に、「神事に伴う饗宴に関わるさまざまな情景をかたどっている（森田1995:p.12）」とした。そして、瓦塚古墳に関しても、家形埴輪のうち吹き放ちの建物は豪族の屋敷に設置された楼閣であり、堅魚木を置く寄棟造りの家は殯屋に相応しくないとし

た。瓦塚古墳例を含め、埴輪群像が示す世界は神を祭り、豊穣を願い感謝する神宴儀礼とした。

筆者は、かつて若松良一と瓦塚古墳出土埴輪の再整理検討をおこなった。その際、鹿狩りという狩猟儀礼に関連して、岡田精司（岡田 1988）のいう鹿狩りと稲魂との繋がりから「タマフリ」の姿を示している可能性を指摘した（若松・日高 1994)。しかし、その後、古墳とは人が埋葬される墓であり、その墓に埴輪が樹立されている以上、すでに再生の可能性は絶たれていたはずと考えるに至った。さらに、埴輪群像を総体としてみた場合、時間と空間を超越しており、このことは、埴輪に表現される場面が一つではないことを示している。よって、一つの場面（儀礼）を表現したという諸説は否定されるものと考えている（日高 1999d:p.84)。

3. 形象埴輪群像の意味についての再検討

形象埴輪の意味については、前述した「首長権（霊）継承儀礼」（水野正好・橋本博文・須藤宏など)、「殯」（和歌森太郎・若松良一・市毛勲・橋本博文）の他に、「葬列」（後藤守一・滝口宏・市毛勲)、「生前顕彰」（杉山晋作・和田萃)、「供養・墓前祭祀」（高橋克壽・車崎正彦・梅沢重昭)、「他界における王権祭儀」（辰巳和弘)、「集落・居館での祭祀→墓前祭祀→生前の儀礼」（坂靖)、「神宴儀礼」（小林行雄・森田悌)、「殉死の代用から来世生活」（増田美子)、「死後の世界における近習」（塚田良道）など多様な解釈がある。次には、これらの諸説への筆者の意見を提示したい。

3-1　首長権（霊）継承儀礼説について

水野正好の根幹は後の大嘗祭をモデルとして、それを人物埴輪群像になぞらえたところにある。その底流には、折口信夫の大嘗祭論（折口 1982）の影響が明瞭にみてとれる。いわゆる「真床追衾論」を中心とした天皇霊の継承を具現化したもの、すなわち「葬られた死せる族長の霊を、新たな族長が墳墓の地で引き継ぐ祭式（水野 1971:p.277)」が人物埴輪の世界であるとした。水野はさらに、群馬県高崎市保渡田八幡塚古墳の埴輪群像をモデルとして「男女二体ずつの椅座像は王と妃、皇太子と皇太子妃にあたる存在（水野 1990:p.29)」とも述べている。矛盾する意見であり、前論では死んだ後の場面、後論では皇太子（これ自体それほど遡る制度ではないが）などと書かれている以上、被葬者の生前

の一場面と考えていることになろう。ただし、後論は天皇霊の継承ともしているので、皇太子というのは口をついて出た物言いかもしれない。

これに対して、岡田精司は大王就任儀礼としての大嘗祭が比較的新しく成立したものであることを論証した。本来は王位の象徴＝レガリアとしての「宝器の授受があり、高御座をめぐる儀礼として宣命・拝礼（岡田 1983:p.17)」という形態が即位の儀礼であったということを明らかにし、大嘗祭と人物埴輪を結びつけることが困難であるとした。

熊谷公男は「天皇霊」そのものを「始祖霊」と考えるのではなく、祖霊全体を指すものと述べている（熊谷 1988)。また、「死者の霊魂は死後も遺体とともにあり、それが埋葬された墳墓に籠っているという観念（熊谷前掲:p.7)」の存在を指摘した。天皇霊が祖霊全体を示していて、かつ墳墓に霊魂が籠っているならば、天皇（首長）霊継承儀礼そのものが果たして存在していたのだろうか。筆者には甚だ疑問に思われるのである。

岡田荘司は、折口氏のいう真床覆衾そのものを、平安朝から中世の諸記録を渉猟しながら否定し、寝具（寝座）は「迎えられた大神が休まれると見立てられた座（岡田 1989:p.16)」と理解した。ただし、松前健は「一般に、儀礼とか祭式などは、時代や環境の変遷により、その意味や機能も変容し、やがては全く形骸化・象徴化」するものであり、「恐らく、「真床追衾」の秘儀は、平安時代には、ほとんど形骸化し、象徴化した（松前 1990:pp.511-512)」と考えていることや、榎村寛之が、岡田荘司の研究姿勢そのものに対して痛烈に批判している（榎村 1996）ことも付言しておきたい。

筆者は、前述した熊谷公男の指摘が正鵠を得ていると考えている。そもそも、首長霊継承儀礼を表したものならば、まさに首長霊を継承する場面を表現しているべきであり、それは真床追衾ということになろう。しかしながら、形象埴輪群がその場面を表現していないことは明白である。よって、水野が「天皇霊を継承（水野 1971:p.277)」するとしている以上、この説は成り立ち得ないと思われる。

3-2 殯説について

若松良一は人物埴輪の構成要素として9つの属性に整理している。それらが、墳丘規模や墳形によって構成要素を欠きつつ、総体として殯を再現していると説く。首長像の有無については、「殯の主催者は、その家族であって、自動的に後継者となる人物や未亡人（若松 1992b:p.153)」がいると述べている。殯再現という立場であるから、埴輪製作は被葬者死亡後に発注されたと考えているのであろう。ここに、「殯説」のみならず最も大きな克服

されていない課題がある。

埴輪がいつ作られたのかは、未確認な部分が多い。しかし、古墳の多くが寿陵であるならば（茂木 1994)、埴輪についても被葬者の生前に発注されていた可能性が極めて高い。例えば、埼玉県加須市小沼耕地1号墳と同さいたま市井刈古墳の馬形埴輪は、特徴的な馬装表現や胎土などが同鴻巣市生出塚窯跡群1号工房跡出土の馬形埴輪と共通しており、生出塚産としてよい。だとすると、同一の埴輪が作り置きされていた可能性が高いのである。間接的ではあるが、死後発注されたものではないことを示していよう。筆者がこれまで追求してきた人物埴輪における共通表現の存在（第 1・3 章参照）は、まさに作り置きを示すものと考えられる。

生前に発注されたのであれば、被葬者の殯の場面を表現することは不可能である。若松が「後継者となる人物」としたものは、被葬者とすべきであろう。殯を表現したならば、そこには死せる首長がなければならない。古墳は墓であり、死せる人物の復活がすでに不可能な段階に到達する場所である。そこに、復活を願う像を配置する必然性は低いと思われる。

3-3　葬列説について

後藤守一が、伊勢皇太宮式年遷宮の行列図を提示し、葬列を現したものとしたのがこの説である（後藤 1937)。しかし、殉死殉葬に代わる意義をももたせていた後藤の所論に対して、小林行雄が、行列の主たる根拠の双脚人物に見られる脚結は「晴の場に臨む者の姿として、必ずしも遠道を歩くことのみを表（小林 1944:p.108)」してはいないとしたように、首肯し得るものではない。

また、滝口宏は葬祭の場の表現を示すものが多いとしながらも、千葉県山武郡横芝光町姫塚古墳の埴輪配列をもって葬列説を提示した（滝口 1963)。しかし、姫塚古墳の双脚人物像が墳丘を背にして配置していることを考えると、列を表現したとは考えにくい。滝口は「表飾の効果を最大限に考慮（滝口前掲:p.14)」した結果と捉えているが、総体として理解すべきであり、葬列という諸説は認めがたい。

3-4　供養・墓前祭祀説について

高橋克壽は兵庫県加古川市行者塚古墳の調査成果から、造出しでの土製供物を用いた祭祀を復原し、「祭祀を司る人物を土製品に置き換えたのが人物埴輪」であり、「最初の人物

埴輪は、被葬者に対する祈りの姿」（高橋 1996:p.137）とした。車崎正彦も高橋に賛意を表しつつ、人物埴輪や動物埴輪の意味を、「死者の霊を祀る巫覡と、贄、供物の動物（車崎 1999:pp.174-176）」と捉えている。

梅沢重昭は群馬県高崎市綿貫観音山古墳の形象埴輪群をもとに、祭人・頌徳像グループという二つにわけ、前者は「黄泉国世界へ旅立つ被葬者の霊魂の鎮魂儀礼」とし、後者を「被葬者・豪族の生前の権威が死後の世界へ継起することを願望して被葬者を象徴的に象った」（梅沢 1998:pp.465-466）ものとした。梅沢は被葬者たる先首長と鎮魂の儀礼を執り行う新首長（男子胡座像）がグループを違えて表現されており、先首長は貴人・武人・農人の三場面にそれぞれその姿態でもって登場していると捉えている。一方、車崎は、被葬者は表現されない（車崎前掲:p.178）としている。

坂靖も、先の高橋の論説をひきつつも、「まず王の居館とそれを守護する器物を象徴的に表現した。また、集落や居館で行われた祭祀をも再現した。そして渡来文化の影響により、他界観が変質する中ではじめて墓前祭祀が表現されることとなった。最後には、王の行った数々の儀礼をも再現するようになった（坂 2000:p.133）」とした。

筆者は、首長（被葬者）は表現されていると考えている。それは、前述したように埴輪とは、被葬者の生前に発注されていたものと考えているからである。そのことからすれば、形象埴輪群が被葬者の鎮魂や供養・墓前祭祀を表現したものではなかろう。高橋も言及した群馬県前橋市舞台1号墳では、造出しで供物を貼り付けた高坏が出土している他、人物・馬形埴輪も出土している。つまり、両者は別物と捉えたほうがよい。瓦塚古墳でも、造出しやその周辺から相当数の須恵器・土師器が出土しており、形象埴輪とは別に、造出しで墓前祭祀が継続していたことを示す。造出しでおこなわれた供物を用いた供養・墓前祭祀を人物埴輪に再現したとするには不都合である。

3-5 他界・来世表現説について

他界（死後の世界）での王権祭儀と捉えるのは辰巳和弘である。墳丘規模の狭小な古墳から立派な埴輪が出土した事例をもとに、「被葬者の他界での一層の幸いを願って、立派な居館の姿を墳丘上に創造しようとする人々の心がそこにある（辰巳 1996:p.182）」としていることから、埴輪は被葬者（死者）のために生者がつくったものと捉えているのであろう。形象埴輪群像は、「他界に首長としての新しい生を得た亡き首長が、さまざまな王権祭儀を実修する情景（辰巳前掲:p.184）」と考えている。

塚田良道は女子埴輪がいかなる性格の姿を表していたのかということに関連して、人物埴輪の意味を論じている（塚田 1998)。塚田は先に、人物埴輪の配置に5つのゾーンがあり、それらが墳丘規模などによって欠落したり、結合したりしていることを明らかにした（塚田 1996)。そして、第1～3ゾーンを内区、第4～5ゾーンを外区として、2つの場面があった可能性を説く。総体として、「人物埴輪は被葬者の死後の世界における近習をあらわしたもの（塚田 1998:下 p.35)」と捉えている。

一方、増田美子は殉死の代用を否定してきた研究史に疑義を呈し、さらに、大阪府藤井寺市蕃上山古墳出土の人物埴輪を巫人と限定できず、近習を表したものと考えている。つまり、「初期段階の人物埴輪は、書紀の記述通りに、殉死の代用として近習者の人像」であり、その後「来世での華やかな生活の為に、より多くのまた様々の職業や階層の人々を伴う」ようになったとした（増田 1996:p.16)。その変化に、朝鮮半島からの移住者によって高句麗壁画などに描き出された来世での生活観ももたらされた可能性を考えている。

いずれも、人物埴輪が被葬者の死後の世界を表現したという点で共通する。筆者は再三述べてきたように、埴輪が被葬者の生前に発注されていたと考えている。被葬者が生前に、来世あるいは死後の世界を表現させようとして埴輪を製作させた可能性もある。生前における近習を死後でも使えさせる意図で製作されたと考えるのである。いわば、中国秦帝国の始皇帝陵における兵馬俑のごとくに、である。

しかし、それだけですべてが理解できるとも思えない。動きを持った形象埴輪群が、何らかの具体的場面を表現していると思うからである。それは、死後における場面と考えるより、生前における場面と捉えた方がより理解できると思われる。

4. 形象埴輪群像の意味

ここまで、近年までに提示されてきた埴輪群像をめぐる諸説について、筆者の見解を交えながら言及してきた。ここでは、再び瓦塚古墳の埴輪群像にもどり、その意味について思うところを述べてみたい。

瓦塚古墳におけるA・B群は一つの場面を表したものとしてよいだろう。問題はC群である。図1のように、筆者らはここには寄棟家（1）と武装男子（4)、盾（2）があると復原した。しかし、短甲着用の武装男子は、破片がB群付近からも出土しており、かなりの移動が考えられる。ここに復原した格子突帯家形埴輪は、壁体部分は一部が残存するだけ

である。特に底部の残存率は極めて悪い。このことから、本来あった位置からの移動の可能性が高い。

B群の平行突帯家形埴輪は、堅魚木の断片をのせているが、押縁などはまったく確認されておらず、この家形埴輪に伴うのか未詳である。また、屋根の傾きや上端の形状なども不明である。一方、B群の入母屋家は、切妻部分は小破片を含めてある程度確認できるものの、寄棟部分以下が未確認である。近接して出土した吹き放ちの寄棟家は上端が確認されており、この上に切妻部分がのることはない。このことから、残存状況の悪い寄棟家の上に切妻部分がのり、組み合わせ式の家形埴輪となる可能性が高いと判断する。格子突帯の家形埴輪を含めB群の位置に3棟の家形埴輪を配置していたと考えたい。

さらに、双脚男子はその出土位置から、家形埴輪の東側に3体（挂甲・短甲・甲不明）の武装男子を配置し、西側に3体（大刀を腰に佩用する男子像2体・裸足の双脚像1体）を配置し、その西側に盾（2）を配置していたと考える。そうすると、A～C群までが1つの場面として無理なく理解できよう。このうち、大刀を腰に佩用する男子像については、塚田良道の指摘（塚田 1996:p.34）通り、武装男子の草摺ではないと思われ、双脚男子像とすべきと判断した。D群の変更点はない。また、盾持ち人は中堤南西コーナー付近に樹立されていた。結果、新たに埴輪配置を復原したものが図2である。

筆者は、埴輪が生前に発注されていたことを再三述べてきた。このことから、埴輪群像が表したのは生前における何らかの場面である。瓦塚古墳の人物埴輪群像は、2体の琴弾と椅座の女子、そして未確認の首長像、さらに、姿態不明の女子3体、男子2～3体、双脚男子2体、3棟の家を挟んで両手をつき出す女子、鈴鏡を伴う女子、武装男子3体である。この他両端付近に盾、大刀がある。これらの埴輪群像が示す主題は、歌舞・音曲や飲食がおこなわれている場面と考えられる。家形埴輪は、入母屋造建物と吹放ち寄棟造高床建物、寄棟造建物である。吹放ちの家は森田悌が述べるように楼閣（森田 1995:p.11）とみるべきであろう。埴輪群像の示す儀礼がおこなわれたのはこの楼閣であったと推察する。これらの3棟の家形埴輪はハレの場の建物群、すなわち首長の居宅を現しているのであり、そこでの歌舞・音曲や飲食が伴う儀礼を現している。

先学が述べてきた埴輪群像の意味において注目されるのが、杉山晋作（杉山 1986）の説く、生前顕彰説である。文字通り生前の姿を顕彰するためであるが、瓦塚古墳でみた歌舞・音曲や飲食儀礼の具体的な場面としては、小林行雄のいう「神を祭る儀礼の場に臨んでいる人々の姿（小林 1944:p.109）」と考えるのが最も理解しやすい。

森田悌も、「埴輪群像が示す饗宴を概念化すれば、神宴儀礼として把握」でき、「神宴は神をまつり豊穣を願い感謝する豊饒を具象化(森田 1995:p.21)」したものと理解している。ただし、生前の事績を記念する頌徳的性格であるならば、安閑紀の武蔵国造の乱などをはじめとする戦いの場面が表現されるべきであるが、そのような例が皆無であることから、生前顕彰説を退けている。

筆者は生前における神を祭る儀礼を再現したものが人物埴輪群像であると考える。それは、生前に埴輪群像が製作されていた可能性を重視したいからである。瓦塚古墳の家形埴輪を中心にした群像もそのように理解したい。首長像は未詳だが、おそらく存在していたことであろう。多くの形象埴輪群像が現す場面の共通点は、先学の指摘するとおり、飲食ないし歌舞・音曲である。些細な表現の異同は、地域によって神を祭る儀礼が少しずつ異なっていたことを示していると理解したい。

これらの埴輪群とすこし離れて出土した動物を中心とした埴輪群像にはいかなる意味があったのだろうか。筆者は、狩猟場面(巻き狩り)を表現した埴輪群像をとりあげ、その獲物として鹿と猪がセットであることが望ましいと述べたことがある。そして、鹿と猪はまったく正反対の性格をもったもので、正と負の存在をともに駆逐することに意味があったと考えた(日高 1999d および第 11 章参照)。首長の巻き狩り(狩猟儀礼)の様子を再現したものと考えたい。獲物は神を祭る儀礼の場で捧げられたのであろう。ただし、この場面には首長は登場しない。それは、首長が造形されるならば、唯一最も重要な神を祭る儀礼場面にだけ登場すると考えるからである。

狩猟場面の東側の水鳥形埴輪は、妙案が思い浮かばない。大きな造形のそれは、焼成後に白泥を塗っているので、白鳥を表したものである。白鳥だとすると、すぐさまヤマトタケルの説話を思い起こすが、生前に製作された埴輪が被葬者の魂を運ぶ鳥として造形されたとは思えない。むしろ、雄略紀における鳥をめぐる様々な説話を重視したい。白鳥を献じたり、鳥官の鳥が犬に食い殺された失態に対して鳥養部としたり、大王(首長)の周りに鳥類が少なからず存在していたことを示しており、財産としての水鳥の存在を示していたと考えておきたい。

馬形埴輪については、いずれも鏡板や杏葉などを表現した飾馬であることから、狩猟儀礼に随行する馬列ではなかろう。森田悌は「奉迎された神への奉納」あるいは「首長へ納れるため牽かれている」姿と考えている(森田前掲:p.20)。しかし、筆者は飾馬を立て並べるということから、推古紀 16 年条にある、唐の使者である裴世清らを京にて迎えるた

めに75頭の飾騎を遣わしたという記事を重視したい。同様の記事は推古紀18年条において新羅や任那の客人を迎える場面でもみられる。つまり、客人を迎える場面に飾馬が必要だったのである。ただし、『日本書紀』には良馬・鞍馬を下賜する、あるいは献ずるという記事も随所にみられ、『続日本紀』光仁天皇宝亀8年5月7日の条にも装馬及走馬を進らしむという記事や同13日の条には白馬を丹生川上神に奉るなど、森田の説も捨てがたい。しかし、同宝亀7年正月の条で、諸王が装馬で参列していたことを知ることができる。つまり、儀礼に際して飾馬を並べることがあったと考えられよう。先にみた推古紀の記事と合せ、馬形埴輪（飾馬）で表された場面は儀礼に参列する姿と想定したい。それは、神を祭る儀礼場面であった可能性もあろう。

盾持ち人は、唯一埴輪群像から離れて出土している。同様の在り方を示す例は多く，堤や墳丘で外を向いて置かれていたようである。瓦塚古墳における盾持ち人は、埴輪群像のなかで警護するのではなく、唯一古墳という墓を警護する役割を担っていた可能性がある。埴輪群像の周りにある盾形埴輪や大刀形埴輪とは別の意味があったと思われる。

おわりに

瓦塚古墳出土の形象埴輪群像をめぐって、これまでの諸説と、その意味するところを考えてきた。もとより、これで、すべてが解釈できるとは考えていない。裸馬の意味や近年改めて注目された鵜飼いを表す場面、特殊な動物埴輪など多くの論じ残しがある。次章では狩猟場面を中心とした動物埴輪の意義について考えていきたい。

図版引用文献

図1　若松・日高 1993

図2　図1をもとに日高作成

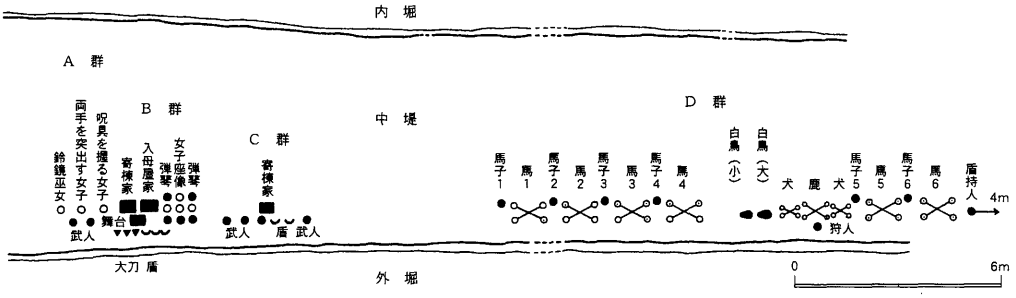


図1　瓦塚古墳形象埴輪配置復原案1

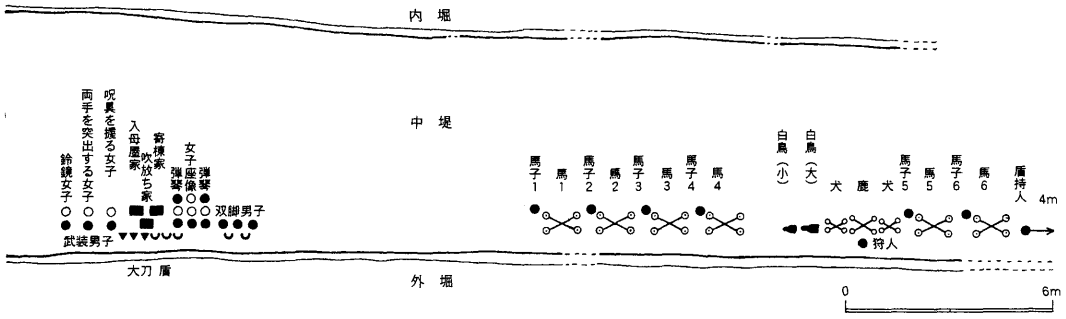


図2　瓦塚古墳形象埴輪配置復原案2

第 11 章　形象埴輪群像における動物

- 狩猟場面を再現する動物埴輪 -

はじめに

古墳時代につくられた形象埴輪は、粘土をこねてさまざまな形を表現したものである。ただし、形を象るという行為は、何も古墳時代に始まったことではない。世界史的にみれば、はるか旧石器時代にも女性や動物をかたどったもの、岩壁に絵画としてさまざまな生き物を描いたものなどがある。旧石器時代の絵画をみると、狩の様子や日常の生活などを表現豊かに描いている。生き物は生きた姿として描かれており、今にも飛び出してくるような動きをもっている。

日本列島において古墳時代とは、人物、動物、さまざまな器物などを最も数多く埴輪という形をとって具象化した時代であった。実物大に近い大きさに表現されることもしばしばであった。あたかも人々の目に曝すことを目的として作られたかのようでもある。

縄文時代には土偶（人物や動物）や岩偶などさまざまなモノを具象化した。弥生時代には青銅器の中にそれらを表現した。しかし、等身大にしかも、朽ちるまでその場に置かれて人々の目に曝されたわけではない。奈良時代や平安時代にも祭祀に伴って人や馬などさまざまなモノを具象化してはいるが、実物大につくられたものはない。永い日本列島の歴史の中で、これほどまでにさまざまなモノを粘土という材料を使って盛んに作りつづけた時代は古墳時代をおいて他にはない。埴輪とは、そのような位置付けのできる造形物なのである。

1. 埴輪の種類と変遷

埴輪にはさまざまな形を象ったものがある。もともとは器を載せる台を象った筒形の円筒埴輪、それに壺を乗せた形の朝顔形埴輪、家、さまざまな器財（盾や大刀など）、そして人物、動物などである。人物には男性・女性の区別があり、双脚を表現したものと、そうでないものがある。相対的にみて、双脚を表現したものは大きく造形され、そうでないものは小さい。動物には馬、犬、猪、鹿、牛、鶏、水鳥などがあり、類例の極めて少ないものとして魚、猿、ムササビなどもある。

形象埴輪は、古墳時代前期末ころまでに、家や器財埴輪が登場し、それに鶏や水鳥が加わる。そして古墳時代中期中ごろまでに、馬・猪・犬や人物埴輪が登場する。動物の中には魚や牛、猿なども存在するが、極めて類例の少ないものである。魚を象った埴輪はいまの千葉県北部地域に相当数みられるが、いずれにせよ一般的ではない。

人物埴輪には男子・女子の別があり、男子には冠を被った首長と考えられる姿、甲冑を身にまとった姿、弓を携えた姿、盾をもつ姿、楽器を奏でる姿、鷹を腕にとまらせた姿、農具を担いだ姿など多くの姿態がある。弓を携えた男子は背中に靫を背負っていることが多い。また、弓を射る姿態もあり、これは後述の狩猟場面に登場する狩人と考えられる。一方、女子埴輪はまれに器以外の器物を捧げ持つ姿もあるが、基本的に器を捧げ持つ姿であり、全国的にも共通点が多いことが指摘できる。

2. 埴輪群像のなかの動物埴輪

はじめ埴輪は、前方後円墳であれば後円部頂に、円墳や方墳であればその墳頂に置かれていた。数多くの円筒埴輪に囲まれた中に形象埴輪は立て並べられていた。その後、造出しと呼ばれる低方丘がくびれ部や主丘部に付随されるようになると、形象埴輪は墳頂部を降り、墳丘の側面部に置かれるようになる。ただし、造出し出現当初にその場所で立て並べられたのは、家や器財などの埴輪であり、墳頂部でのそれとほぼ同じものであった（図1)。造出しの出現からしばらくすると、人物や馬・犬・猪などの生物を象った埴輪がその場所で立て並べられるようになる（坂 1988)。

鳥類を除く生物を象ったもので現在までに知られるもっとも遡る例としては、5 世紀前半に築造された大阪府藤井寺市野中宮山古墳である。前方部側面に付設された造出しで馬・猪などが出土している。人物埴輪は確認されていないが、これが当初からなかったのかはなお検討を要する。

続いて 5 世紀後半になると、数多くの古墳で人物埴輪とともに動物埴輪が立て並べられるようになる。たとえば群馬県高崎市保渡田八幡塚古墳中堤Ａ区では、人物・馬・犬・猪・鹿などの形象埴輪が確認されている。小型の猪の存在から、腰に猪を吊り下げた狩人がいたことがわかる。同様の資料は同保渡田Ⅶ遺跡でも確認されており、人物・馬などとともに、猪を吊り下げた狩人・犬・鏃が突き刺さって血が流れている猪が出土している。猪は狩猟の対象である。

6世紀以降では類例を数多くみることができる。たとえば大阪府守口市梶2号墳（笠原1991、大西 1994）では前方後円墳のくびれ部から人物・馬・犬・猪・牡鹿・牛などが出土している（図2)。人物埴輪の破片で弓があることから、狩人がいた可能性もある。埼玉県行田市埼玉瓦塚古墳では墳丘の外の周溝に、中堤から落ち込んだ状態で人物・馬・犬・牡鹿などが出土している。狩人の存在は未詳である。

これらの犬や猪・鹿・馬などの埴輪が樹立当初にどの場所に立て並べられていたかをみると、他の人物埴輪などとは別の場所に立てられている場合が多い。例えば前述の瓦塚古墳では、家や弾琴像などの人物群がまとまって配置された場所とは 5mほどの空間を隔てて馬・犬・牡鹿・人物などが配置されていた（図3)。八幡塚古墳でも椅子に座る男子・女子像などの人物群とは別の場所に、狩の場面として犬・猪・狩人・さらには魚をくわえた鵜などとその周りに人物群が配置される（若狭 2000)。つまり犬・猪・鹿などは、人物が何がしかの飲食物を捧げる儀礼を執り行っている場面とは別の場所に置かれていて、そこには狩人が存在する場合がある。

筆者は、形象埴輪群像とはいくつかの時間と空間を異にした、被葬者生前の場面を再現していると考えている（第9・10章参照)。犬・猪・鹿などは保渡田Ⅶ遺跡にみるように、狩猟場面の一役を担っているのである。それは、犬を使った巻き狩り場面をあらわしているのであり、狩猟対象獣は猪や鹿であった。次には犬・猪・鹿によって現された狩猟場面の意味について考えていきたい。

3. 狩猟場面の意味

古墳から出土する形象埴輪は、長い間風雨に曝されていたことや、後世の開発に伴って古墳そのものが削られてしまったりして、断片になってしまう場合が多い。また、発掘調査がごく一部の範囲である場合もある。前述の各古墳のようにある程度の全体像が判明することは極めて稀である。よって、得られる情報が古墳時代のすべてではないことも念頭に置いておかなくてはならない。しかし、たとえ断片でもその存在が明らかになることで、普遍的なものなのか、それとも地域的に限定されるものなのか、ということは議論できるのである。そこで、列島各地で発見されている形象埴輪を、遺漏もあるだろうが見渡してみて、狩猟場面と考えられる埴輪群像を抽出してみよう。

抽出にあたっては、かつておこなった集成をもとにして（日高 1999d)、その後管見に

触れた事例などを加除した。また、狩人が確認された事例は極めて限定されるので、犬・猪・鹿の組み合わせをもとに狩猟場面を集成した。

3-1　狩猟場面の事例

・犬と猪・鹿……7例

・犬と猪……8例

・犬と鹿……3例

・矢負いの猪のみ…1例

・矢負いの鹿のみ…1例

・狩人のみ……3例

狩猟場面の可能性がある事例

・猪・鹿……5例

・猪のみ……14例

・鹿のみ……19例

・猪（伝出土）……4例

・鹿（伝出土）……4例

このほかに、たとえば大阪府堺市大仙陵古墳の墳丘外では犬が出土している（徳田・清喜 2001)。犬の存在が狩猟場面を表現していた可能性は、極めて高いと思われることから、このような例も本来は犬と狩猟対象獣というセットがあったと考えられるだろう。

狩猟場面の可能性がある事例についても、その出土古墳を仔細にみると、いずれも断片的な資料が多いことがわかる。今後の調査などによって、犬の存在がわかる可能性があろう。つまり、これらも狩猟場面と考えて差し支えないと思われる。そこで、狩猟場面における対象獣である猪と鹿の出現頻度を示せば、以下のようになる。

・猪が関わる狩猟場面……36例

・鹿が関わる狩猟場面……36例

猪と鹿の出現頻度は偶然にも同数であり、このことを最大限評価するならば、狩猟場面に登場する対象獣は猪と鹿の両者がセットであったと考えられるのではなかろうか。

さらに、岡山県赤磐市小丸山古墳出土の装飾付須恵器には、背中に矢筒を背負った騎馬の人物と背中に矢の刺さった牡鹿、小壺を挟んで斑点のある牝鹿、犬に追いこまれ背中に人物の乗る猪という像がある（図 4)。間壁葭子はこれらの図像を総体として躍動的な狩絵

巻と述べている（間壁 1988)。前述の、埴輪にみる狩猟場面と同様の世界が表現されているのである。装飾付須恵器には同様に狩猟場面と考えられる数多くの作品がある。狩猟場面の埴輪が確認された梶2号墳で出土した装飾付須恵器には、犬に追われる猪の像をみることができる（図5)。それでは、犬を使った巻き狩りの対象である猪と鹿にはいかなる意味があったのだろうか。

3-2　猪の意味

猪は、千葉徳爾によれば嗅覚にすぐれており、臭いを嗅いだり音を聞いたりすると姿を隠すといわれる。眼はあまりよくないようであり、遠方や高い場所はみられない。猪は水や泥を浴びた後で樹脂の出る樹木に身をすりつけることで、毛が固まり板のようになることがあるといい、昔の弓箭で射ぬくことが難しいことを指摘する（千葉 1975)。また、猪は多産で強い繁殖力をもつ動物でもある（井沢ほか編 1996)。

平林章仁は、古代の狩猟儀礼のなかで猪は負の存在であるという（平林 1992)。祈狩の結果としては、猪とは凶兆なのである。『日本書紀』や『古事記』、『播磨国風土記』には、天皇の狩りの場面がいくつも登場するが、猪の描かれ方は、随行した者を食い殺したり、猪に追いこまれたり、弓が折れたりなど、いかにも凶兆の存在である。しかし、その負の存在を駆逐することにこそ、重要な意味があったのだろう。

3-3　鹿の意味

鹿は、土地の神の化身として描かれる場合が多い。岡田精司が明らかにしたように、『延喜式』には瑞祥のなかの上瑞として位置付けられており、それは鹿の毛色の変化や角の成長・脱落が稲の生育と対応していることにより、吉兆とされたのである（岡田 1992)。

鹿（ニホンジカ）はオスのみが角をもっており、夏毛として鹿の子文様が全身にあらわれる。角は毎年春に落ち、春から夏にかけて新しく伸びてくる。おおむね年齢と共に枝の数が増えてくるという。また猪と比べ、鹿は1頭の子供しか出産しない（井沢ほか前掲)。

各地で出土した鹿の埴輪には、角の有無に関わらず、体に鹿の子文様が表現されたものがある。前述した小丸山古墳出土の装飾付須恵器の牝鹿も、鹿の子文様が表現されていた。この鹿たちは夏毛の時の姿をあらわしていることになる。憶測を述べるならば、狩猟の季節が夏毛のころであったことを示しているのかもしれない。そうすると、5月5日に執りおこなわれた薬草を摘んだり薬効をもつとされた鹿の角（袋角）を得たりするための薬狩

の可能性もでてくる（和田 1995)。ただし、表現された牡鹿の角は立派な枝振りのものも少なくないので、春というより夏の雰囲気が強い。また、鹿の象徴として鹿の子文様を表現したという可能性もある。たとえば、鳥取県東伯郡北栄町土下 211 号墳や同倉吉市沢ベリ 7 号墳で鹿の子文様の着衣を身にまとった人物埴輪が出土している。

3-4　狩猟場面の意味

いずれにせよ、鹿は猪とは正反対の存在であることが重要なのであろう。鹿と猪は、正と負、静と動、単と複、弱と強などすべてにおいて相反する性格を持っていたのである。その意味からすれば、狩猟の場面には鹿と猪の両者を表現することが望ましい。前述の鹿と猪が登場する狩猟場面がほぼ同数であることは、偶然とはいえ意味のあることと思われるのである。

それでも、いずれかの対象獣しか存在しないという場合もある。たとえば福島県本宮市天王壇古墳や群馬県保渡田Ⅶ遺跡などであり、いずれも猪であった。猪という負の存在を駆逐したことをことさら強調するために、あえて鹿を欠落させたのだろうか。

おわりに

最後に狩人について一言付言しておこう。狩人は確認されているものでは、すべて半身像（双脚を表現しない）である。服装も簡素であり、被葬者そのものとは思われない。被葬者とともに随行して狩にあたった人物なのであろう。狩猟の補助として重要な役割を担った猟犬とともに、鹿や猪を追っていたのである。

腰に吊り下げられた小型の猪には、足を上方に向けて吊り下げられ体に線刻を施したもの、足は下方に向け体には線刻がないものがある。前者はいわゆるウリ坊と考えられる。後者は成獣である可能性もあるが、それを実際に腰に吊り下げることは考えにくい。このことについて大塚和義は、獣殺害とこれに伴う霊送り儀礼の存在の可能性を指摘した（大塚 1998)。群馬県保渡田二子山古墳出土の二者の違いを説明したものとして興味深い。

図版引用文献

図 1　坂 1988

図 2　笠原 1991・大西 1994

図 3　第 10 章図 2

図 4　間壁 1988

図 5　笠原 1991

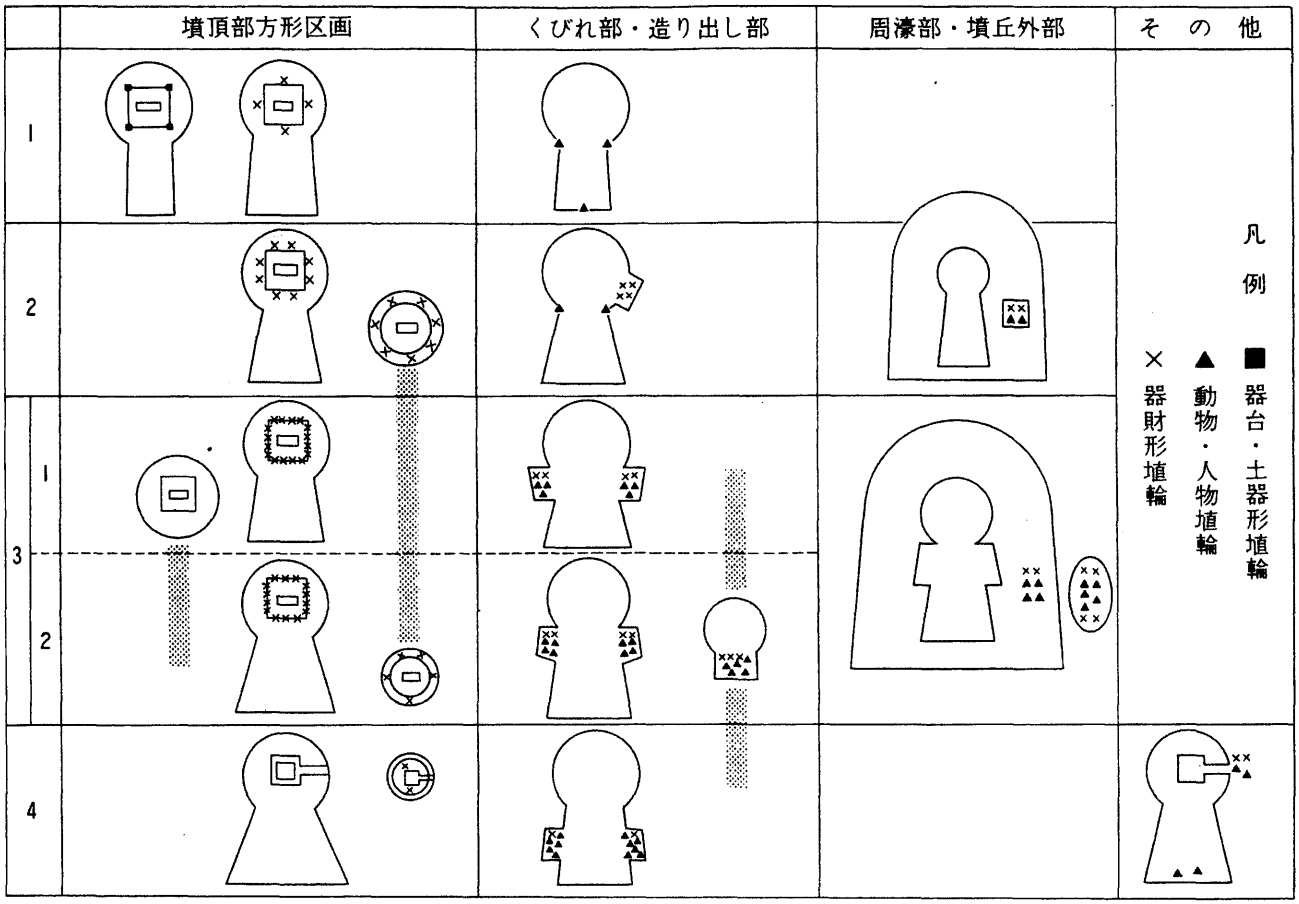


図1　坂靖による埴輪配列の変遷

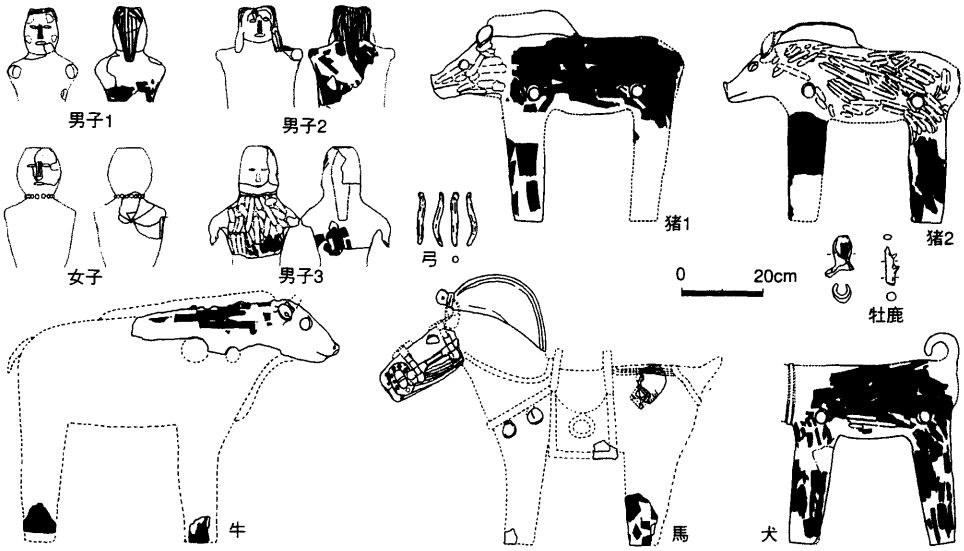


図2　梶2号墳出土の人物・動物埴輪

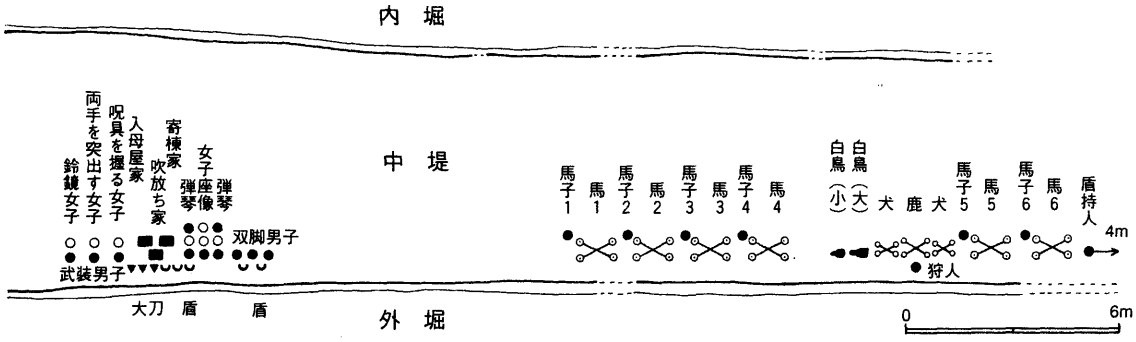


図3　瓦塚古墳の埴輪配列案

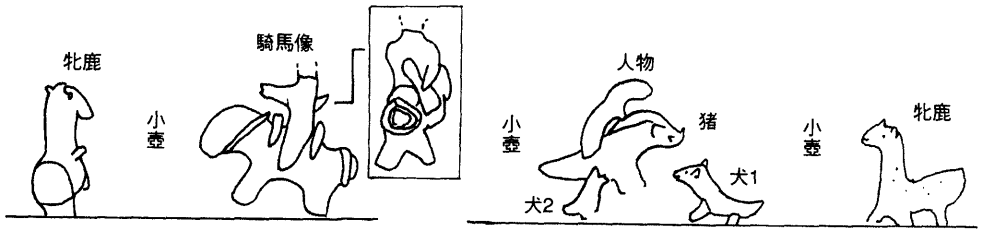


図4　小丸山古墳出土の装飾付須恵器の小像

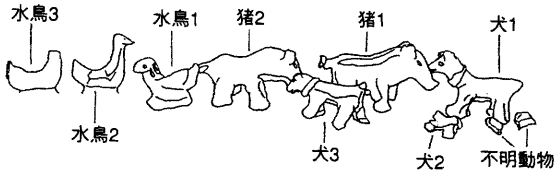


図5　梶2号墳出土の装飾付須恵器の小像

第12章　横坐り乗馬考

はじめに

私は以前、杉山晋作・井上裕一とともに千葉県山武郡横芝光町姫塚古墳出土の特徴的な馬形埴輪を読み解くために、古墳時代の横坐り乗馬について論じたことがある（杉山・井上・日高 1997)。そこで私は、主に東アジア歴史世界における乗馬姿を論じた。ユーラシアに目を広げると、中央アジアの地において、横坐りの図像を確認することができた。それは、ウズベク共和国サマルカンドの都市遺跡である7世紀後半のアフラシヤブ丘で発見された壁画である（アリバウム・加藤 1980)。その後日本列島において、横坐り乗馬を示すと考えられる馬形埴輪の類例も増えてきており、可能性のあるものも含めて 17 例となった。分布も関東地域のみならず、近畿地域においても確認されている。そこで、本章では改めて日本列島における横坐り乗馬の事例について概観したのち、中央アジアの事例や、中国での新たに確認した事例について紹介し、若干の考察をおこなってみたい。

1. 馬形埴輪にみる横坐り乗馬

日本列島に乗馬の風習が導入されたのは、概ね4世紀末ころのことであったようである。そのあと、急速に乗馬は広まっていったようであり、5 世紀中葉ころには東北南部地域にまで及んでいたことが知られている。それは、古墳に副葬された馬具の様相から判明することである。馬形埴輪についても5世紀中葉ころには九州地域から東北南部地域にまで樹立されるようになる。ただし、今回取り上げる横坐り乗馬を示すような馬形埴輪が確認される様になるのは、現在までに知られている資料では5世紀後半であり、ほとんどが6世紀代のものである。横坐り乗馬を示す馬形埴輪とは、障泥部分に鐙とは異なる板状の突出をもった馬形埴輪であり、その板を私どもは短冊形水平板と呼んだ（杉山・井上・日高前掲)。表 1 は同板を装着する馬形埴輪をまとめたものであるが、同板が取り付くのは、判明しているものではすべて右側であり、その下に鐙がつくものとそうでないものとがある。12例が関東地域の事例であり、5例が近畿地域の事例である。これらの資料の中には、同板を表現している可能性があるという資料も含まれるが、広く日本列島に存在した乗馬用の馬具ということは間違いなかろう。

短冊形水平板を装着する馬形埴輪は、それぞれに表現が異なっている（図 1)。大きな相違点は、同板を装着している胴側に輪鐙もしくは壺鐙を表現しているかどうかである。破片となっているものは未詳だが、鐙のある例として、群馬県伊勢崎市雷電神社跡古墳、同田向 2 号墳、栃木県下野市甲塚古墳、千葉県姫塚古墳、三重県多気郡明和町神前山 1 号墳、奈良県橿原市四条 1 号墳などがあげられる。鐙を表現していない同板について長滝歳康は、鈴木健夫の見解を紹介しつつ、大きさや形状から「足掛け」の可能性も指摘している（長滝 2003)。ただし、鐙を表現していない同板の特徴をみると、埼玉県行田市酒巻 6 号墳や同児玉郡美里町久保 2 号墳、同広木大町 28 号墳など居木から垂下させる構造を表現していないものもあり、省略化が進んだものと捉えることもできよう。もちろん右側の鐙表現が有る無しに関わらず、左側には鐙は表現されるものがほとんどである。一方、右側にも鐙表現があるものをみると、垂下させる構造はもとより、細部までしっかりと表現している例が多い。飾馬や鞍馬、裸馬などと異なる馬装として短冊形水平板を装着した馬形埴輪をつくり、同板で横坐り用の馬であることを表現したため、右側の鐙を省略したのではなかろうか。

つまり鐙を表現していないものも、実際には両側に鐙を垂下させており、短冊形水平板を装着した馬形埴輪を表現していればそれでよいという発想から、鐙を省略したと考えたい。このことは、同板が通常の馬装に付け足されて装着されるものであることを示しており、横坐りした時の足乗せと考えた方がいい。付言すると、馬形埴輪が複数出土している場合、異なる馬装であることはしばしば認められる。京都府木津川市音乗谷古墳の場合、同板を装着した馬のほかに、面繋・鞍・紐だけの尻繋という馬、片手綱の馬、杏葉などを完備した飾馬、詳細未詳の馬が出土しており、それぞれに異なる馬装であったことが知られる①。

2. 右乗り・左乗りと横坐り乗馬

短冊形水平板装着の馬は、基本的に右側にも鐙が装着されていたと考えてよければ、その鐙とはいかなる用途があったのだろうか。鐙とは基本的に馬に乗り込む時の足掛けであり、馬に跨る場合は両足を鐙に入れて固定し馬を走らせることになる②。横坐り乗馬の埴輪を最も写実的に表現したと考えられる千葉県姫塚古墳では、居木から 4 本の革帯で同板に繋いでいることがわかる。詳細に観察すると、4 本中の内側の 2 本が同板の胴側寄りに

繋がれており、前後の2本が同板の外よりに穿たれた小孔へと繋がれていることが分かる。内側の2本が同板の位置を保つための構造であり、前後の2本は同板が下方へ倒れるのを防ぐ構造であったと思われる。前後の2本を上方へ引っ張れば（もしくは緩めば）同板は馬の胴側にたたむことができたと推定されるのである。同板が馬の右胴側に装着されているのであるから、横坐りした時に馬の右側に人の正面が向くことになる。つまり、鐙を使って乗り込むとき、まず邪魔にならないようにたたまれて、馬の右側で鐙に足を掛けて上がり、鞍に尻を乗せたあと鐙から足を外して短冊形水平板に両足を乗せるという動作となろう。そこで想起されるのが、佐原眞が木下順二の論を引用しつつ、日本列島では右乗りであったことを指摘していることである（佐原 1993、木下 1991）。

古代中国では左乗りであったようであり、著名な湖南省長沙金盆嶺第 21 号墓（永寧 2 年:302 年）で出土した騎馬俑には左側にのみ輪鐙が表現されており、かつ鐙に足をいれていないので、乗り込む時に使用したのであろう（樋口 1972、湖南省 1959）。朝鮮半島では右乗りか左乗りかを推定する事例を知らない。日本列島において、短冊形水平板装着の馬形埴輪だけをもって、古墳時代の乗馬がすべて右乗りであったと断じることはできないが、少なくとも横坐り乗馬の場合は、右乗りであったとして大過ないと思われる。さらに推測するならば、もともと右乗りであったがために、短冊形水平板は右側に装着されたとはいえまいか。

3. 中央アジア・中国での横坐り乗馬

中央アジアの事例は前述のアフラシヤブ丘の壁画である（図 2）。並列する馬列中で左を向いて横坐りする女性の一番手前には輪鐙に左足を入れている様子が見て取れる。この場合、馬の左側から乗り込んだと考えられる。また、並列する馬列中で右および左を向いて横坐りする男性が確認できる。この壁画では鐙の表現がないが、狩猟場面を表現した壁画で右向きと左向きに失踪する騎馬像には、それぞれ鐙に足を入れているので、基本的には馬の両側に鐙があったと思われる。右からでも左からでも乗り込んで横坐りしたということだろう。これらの横坐りする人物は、いずれも長いスカート状の着衣を身にまとっている。裾が広がっていないことを考えると、馬に跨る構造の衣服ではないのだろう。そのような衣服を着たときには男性でも女性でも横坐りをしたことを示している。

前稿では、中国において図像として横坐りの例が確認できないと述べたが、その後河南

省黄冶唐三彩窯出土の騎馬俑に類例を確認することができた（河南省 2000)。標本 7930 とされた小型の騎馬俑であり、細部の表現は分からないものの、左を向いて横坐りし、両手をひざの上に置いている。頭から肩にかけて全体を覆う被り物を着けているように見えることから、女性像と考えてよかろう。黄冶唐三彩窯は隋代から宋・金代ころまで操業が続いていたと考えられているが、騎馬俑はおおむね唐代の所産と思われる。左向きに横坐りするという特徴は、前述した中国での馬への左乗りという特徴とも符合する。原田淑人が論じたように（原田 1918)、宋高丞の『事物紀原』巻 9・跨馬鞍の項に「国初以来婚姻之礼、皆胡虜之法也、謂坐女於馬鞍之側」との記述があり、女性の横坐り乗馬が文献ではみられたが、それを物質資料として確認できたことになる。

4. 横坐り乗馬と衣服

以上、中国・中央アジア・日本列島において、文献資料、絵画資料、物質資料で横坐りの存在が確認できたわけだが、横坐りを考える上で重要なことは、乗馬のときの服装であろう。中国では女性馬に跨る姿も騎馬俑や壁画などで確認できる。その際の衣服とはズボン状着衣である。逆に男性でも横坐りをおこなっていた中央アジアの壁画では、男性がスカート状着衣を身にまとっていた。それでは、日本列島において、短冊形水平板を装着した馬には男女のいずれが乗っていたのだろうか。古墳時代の衣服を考える上で参考となるのは、人物埴輪である。数ある出土例を通観すると、男性はズボン状着衣、女性は丈の長い（もしくは短い）スカート状着衣を身にまとっている。ズボン状着衣を身にまとった女性あるいは、丈の長いスカート状着衣を身にまとった男性は確認されていない。

人物埴輪のなかで、いわゆる盛装した男女の衣服に厳然と違いが存在することから、日本列島において横坐りをおこなうのは基本的に女性であると考えることができよう。『日本書紀』天武 11・13 年の條にみられる女性の横坐りの記述は古墳時代に遡ると思われる。また、女性が埋葬された朝鮮半島の韓国慶州市皇南大塚北墳出土の把手付後輪から、女性用の鞍であるとの議論がある。奈良県生駒郡斑鳩町藤ノ木古墳で同様の馬具が出土しているが、石棺に埋葬されていたのは 2 人の男性であった③。このことから、杉山晋作はこの種の馬具について、女性用あるいは横坐り乗馬との関連に慎重な態度をとっている（杉山ほか 1997 : p.180)。短冊形水平板を装着した馬形埴輪に把手などの馬具がついた例はないので、筆者も杉山の見解を支持したい。

おわりに

日本列島における乗馬が右乗りであったならば、騎馬民族との関わりで極めて重要な問題を含んでいよう。しかし、騎馬民族について横坐り乗馬だけで論ずるには材料不足である。かつて佐原眞が述べたように、実際に出土する鐙の左右での磨り減り方に着目することが重要な鍵になるだろう。本章は、横坐り乗馬に端を発して古代日本列島における騎馬文化の具体像の一端を示したに過ぎない。古墳時代を東アジア歴史世界の中で位置づけていくには、課題はあまりにも多いが、一歩ずつ近づいていくことを期し擱筆する。

註

① 千葉県姫塚古墳でも同様の特徴を有する馬が最低6個体出土している。

② 騎馬民族はそもそも鐙を使用しないので、必ずしも乗り込むための鐙が必要であったわけではない。

③ 玉城一枝は藤ノ木古墳の被葬者について、骨の残りのよくない人物について足玉の存在から女性であった可能性を指摘する（玉城 2008）。

図版引用文献

図1－1　杉山ほか 2004

　　－2　三浦ほか 1998

　　－3　中沢・長滝 2003

　　－4　小渕ほか 1980

　　－5　大塚ほか 1989

　　－6　井上 2004

　　－7　下村 1973

　　－8　高橋ほか 2005

　　－9　天理市教育委員会 1985

図2　L.I.アリバウム（加藤九祚訳）1980

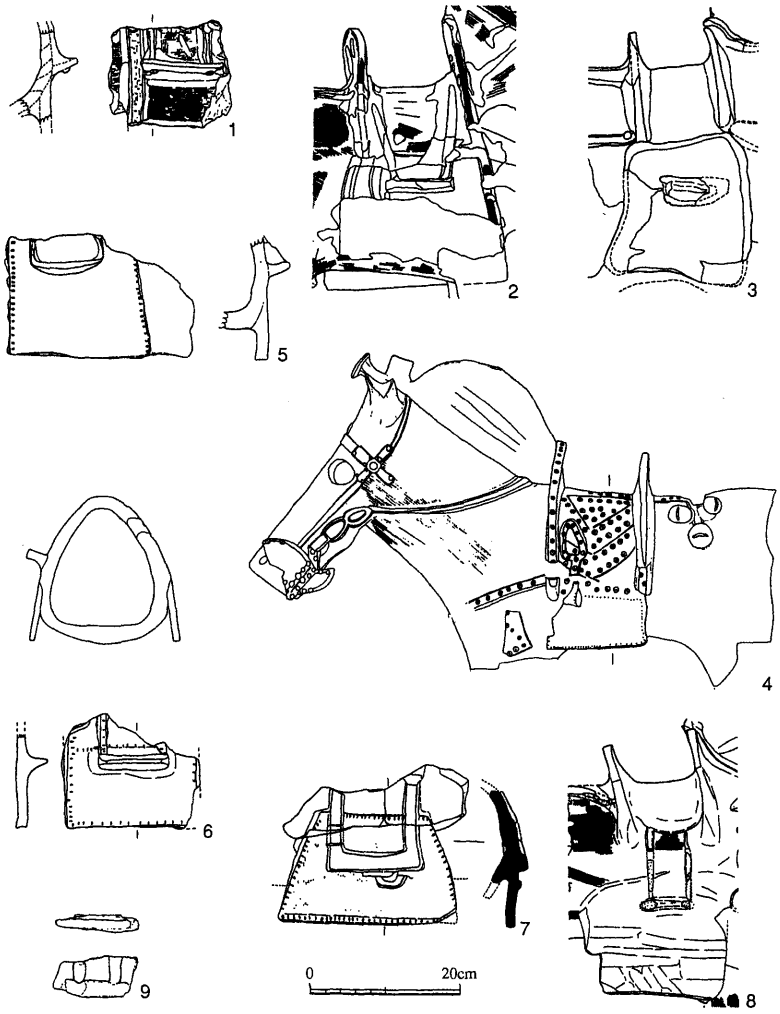


図1　短冊形水平板装着馬形埴輪

1.猿田Ⅱ遺跡　2.諏訪下23号墳　3.久保2号墳　4.広木大町28号墳
5.小幡北山2号窯　6.山内資料動物39　7.神前山1号墳　8.音乗谷古墳
9.岩室池古墳

図２　アフラシヤブ丘壁画にみる横坐り図像と騎馬図像

表1　短冊形水平板装着馬形埴輪一覧

	遺跡名	短冊形水平板の位置	鐙の有無	墳形・規模	年代	文献
1	群馬県藤岡市猿田Ⅱ遺跡C北２トレF層群	右	?	埴輪窯灰原	6世紀前半	杉山ほか2004
2	群馬県太田市世良田諏訪下23号墳	右	無	円・15.5	6世紀前半	三浦ほか1998
3	群馬県伊勢崎市雷電神社跡古墳	右	有	方円・60	6世紀後半	松村1969, 群馬県立歴史博物館1979・2009
4	群馬県伊勢崎市田向2号墳	右	有	円・24.8	6世紀後半	松村1981, 群馬県立歴史博物館2009
5	埼玉県美里町久保2号墳	右	無	円・23	6世紀後半	中沢・長滝2003
6	埼玉県美里町広木大町28号墳	右	無	円・12	6世紀前半	小渕ほか1980
7	埼玉県行田市酒巻6号墳	右	無	円・15	6世紀後半	杉山・井上・日高1997
8	栃木県下野市甲塚古墳	右	有	方円・80	6世紀後半	下野市HP
9	茨城県茨城町小幡北山2号窯	右	無	埴輪窯	6世紀後半	大塚ほか1989
10	茨城県小美玉市玉里舟塚古墳	右	無	方円・88	6世紀前半	忽那2010
11	千葉県横芝光町姫塚古墳	右	有	方円・58	6世紀後半	杉山・井上・日高1997
12	山内清男資料動物埴輪39（群馬西部？）	右？	無	?	5世紀後葉	井上2004
13	三重県明和町神前山1号墳	右	有	方円・38	5世紀後半	下村1973
14	京都府木津川市音乗谷古墳	右	無	方円・22	6世紀前半	高橋ほか2005
15	奈良県天理市岩室池古墳	?	無？	方円・45？	6世紀前半	天理市教育委員会1985
16	奈良県橿原市四条１号墳	右	有	方（造出し）・38	6世紀前半	2002年6月8日奈良県立橿原考古学研究所付属博物館企画展にて実見
17	和歌山県和歌山市大日山35号墳	?	?	方円・83	6世紀前半	和歌山県2008

終章　東国古墳時代埴輪生産組織の考古学的研究

1. 埴輪生産の組織

ここまで、主として人物埴輪の共通表現検討という手法をもとにして、埴輪生産の実体を考究してきた。その中で6世紀の関東地方における埴輪の生産と供給について、同一生産地の製品の供給範囲が 50Km 内外にまとまり、且つその範囲を超えて点在する資料の存在もあることを示した（第3・5章参照）。これまで関東諸地域について記述してきたが、詳細に検討を行う機会をもった千葉県山武郡横芝光町殿塚古墳・姫塚古墳出土埴輪ついて①、胎土に雲母と片岩、さらに大粒の長石・石英を多く含んだ一群があることが判明した。それは、顎鬚を蓄えた男子像であり、数ある同様の表現の埴輪とは着衣表現や製作技法が異なっている。胎土（砂礫）の特徴から、茨城県の筑波山周辺で製作された埴輪と共通していることが想定された。

ここでは、殿塚古墳・姫塚古墳出土埴輪の整理調査で明らかになった、筑波山周辺産埴輪の長距離供給という事象に着目し、その在り方を検討するとともに、改めて埴輪の長距離供給のもつ意味について考究していきたい。

1-1　筑波山周辺産埴輪について（図1）

筑波山周辺産埴輪については、石橋充がすでに霞ケ浦周辺について、その分布を明らかにしている（石橋 2004）。そこでは、雲母を胎土に含むもの（a）と長石や石英の粗い粒子を多く含むもの（b）について、筑波山系から遠く離れていない場所で生産された可能性を指摘している。筆者も同様に考えており、a・bともに筑波山系のなかで土浦入り周辺地域（桜川流域）に生産地がある可能性が極めて高い。また雲母を含む埴輪については、以前から千葉県側でも発見されており、それらを紹介した平岡和夫は、生産地への積極的な論及はないものの②、同一埴輪製作工人集団の製品と捉え、その時期を6世紀中葉から7世紀初頭ころとされている（平岡 1982）。

雲母を胎土に含む埴輪については、鉱物として見た場合、白雲母と黒（金）雲母の2種がある。もともとの粘土鉱物や岩石由来の鉱物の差異を示している可能性があり、石橋充は白雲母を「両雲母花崗岩」に、黒（金）雲母を「斑状花崗閃緑岩」に対応する可能性を指摘しており、それは筑波山麓における岩石の表面分布と対応している可能性を示した（石橋 2004：p. 14 註1）。大きくみたときに、筑波山の南および東側と西側とに分離できる可能性がある。

雲母の白と黒（有色）の差については、「雲母の風化の度合いの違いであり、すぐさま生産地を示すわけではない」と、以前に私は地質学者との対話で指摘されたことがある。しかし、白雲母を含む埴輪と、黒（金）雲母を含む埴輪が存在し、それらは1古墳中に混在しないようであることは、数ある出土埴輪を観察した際に感じていたことでもある。ただし、詳細に観察、分析を経た上で結論付ける必要があることは言うまでもない。今はひとまず雲母を含む埴輪として論を進めていきたい。

1-2　姫塚古墳の顎髭を蓄えた双脚男子像

姫塚古墳における筑波山周辺産埴輪の特徴を述べていこう。殿塚古墳にも同様の特徴を有する埴輪が存在するが、整理作業が途上であり、姫塚古墳の埴輪に限定して論述していく。ただし、殿塚古墳・姫塚古墳の人物埴輪の造形技法について論述した杉山晋作の研究によれば、写真4－2・3の腕が殿塚古墳の筑波山周辺産埴輪である（杉山2008：p.6）。特徴は姫塚古墳のものと共通する。また、殿塚古墳・姫塚古墳の人物埴輪で、これまで写真等で公開されているなかには（滝口1963、滝口ほか1988）、筑波山周辺産埴輪は掲載されていない。私どもがおこなっている殿塚古墳・姫塚古墳の整理作業中に確認された埴輪であり、姫塚古墳のものはすべて小破片となっていて残存状況は悪い。ただし、腕の破片の数からは、3～4個体の双脚像（男子）があったようで、いずれも顎鬚を蓄えた男子像と思われる。

まず、姫塚古墳における顎鬚を蓄えた双脚男子像の造形的な特徴を述べてみたい。全体的な形状や文様構成、彩色、焼成具合にもそれぞれに特徴を有しているが、ここでは、袖、靴、結び紐、鬚の貼り付け方法からその特徴に迫ることにする。まず、それぞれの特徴を述べていこう。また下記の諸特徴は、女子像のそれとはやや異なるものであり、概ね顎鬚を蓄えた双脚男子像に当てはまるものであることを指摘しておく。

袖・腕は、袖の表現と腕そのものの製作技法に違いがある。A類は袖の断面がO字形で中実粘土棒の腕が貼り付けられているものであり、杉山の研究によれば、写真4－1～3などがそれにあたる（杉山前掲：p.6）。B類は袖の断面が逆U字形で中実粘土棒の腕が貼り付けられているものであり、杉山の研究によれば、写真5－5がそれにあたる（杉山前掲：p.7）。C類は袖の断面が逆U字形で先端に掌をつけるものであり、杉山の研究によれば、写真5－6がそれにあたる（杉山前掲：p.7）。特にC類は独特なもので、袖の先端に手のひらを造形した粘土を挿し込む（というよりは貼り付ける）製作技法である。常陸地域によくみられる、中空の腕の手首付近から先に粘土棒を挿し込む製作技法（黒澤2010）との関連性を指摘できるかもしれない。

靴は、粘土板あるいは粘土塊、中空技法で靴を表現したものがある。A 類は粘土板で靴を表現し、天井が平らな円形の台部から靴が突出しており、筑波山周辺産埴輪にだけみられるものである。B 類は粘土板で靴を表現し、天井が平らな円形の台部から靴は突出せず、姫塚古墳の完形品に復元された「背丈の高い男」がこれに該当する（滝口ほか前掲：p. 5)。C 類は中空技法で靴を表現し、天井が平らな円形もしくは少し楕円形ぎみの台部から靴は突出せず、靴に刺突文を多用するという特徴がある（無文もある)。図録などには掲載されていない。D 類は粘土塊で靴を表現し、ドーム状の天井をもつ楕円形の台部から靴が突出しており、姫塚古墳の完形品に復元された「豊かなひげの男」や「行列最後尾の男」がこれに該当する（滝口ほか前掲：pp. 22-23)。第 2 章において関東地方の人物埴輪における履（靴）について検討を加えたが、姫塚古墳にはない表現のものも分類に加えているので、煩雑になるが双方の対応関係を以下に示しておく。なお第 2 章分類の a 類、e 類は姫塚古墳では存在しない。

本章分類 A 類－第 2 章分類 c 類に相当

本章分類 B 類－第 2 章分類 b 類に相当

本章分類 C 類－第 2 章分類 なしに相当

本章分類 D 類－第 2 章分類 d 類に相当

結び紐は、粘土紐をリボン状にして貼り付けたものである。A 類は結んだ環と紐の両端が表現されているものであり、筑波山周辺産埴輪にだけみられるようである。B 類は結んだ環のみが表現されているものであり、図録掲載のものでは「三角冠の男」あるいは「背丈の高い男」がこれに該当する（滝口ほか前掲：pp. 21-22)。C 類は結び紐の表現がないものであり、図録掲載のものでは「豊かなひげの男」あるいは「行列最後尾の男」がこれに該当する（滝口ほか前掲：pp. 22-23)。

顎鬚の貼り付け方法は、首筋から胸にかけて浮いているか貼り付いているかという違いがある。A 類は三角形の粘土板を浮かせて表現しており、筑波産周辺産埴輪および図録掲載のものでは「三角冠の男」や「ひざまづく男」、「背丈の高い男」や「老人の首」、「鍔広帽をかぶる男子」などがこれに該当する（滝口ほか前掲：pp. 21-23)。B 類は三角形の粘土板を顎から胸にかけて貼り付けて表現しており、図録掲載のものでは「豊かなひげの男」あるいは「行列最後尾の男」がこれに該当する（滝口ほか前掲：pp. 22-23)。

以上、袖・腕、靴、結び紐、顎鬚の貼り付け方法について説明してきた。図 2 はそれぞれの分類と相関を示したものである。すなわち、袖・腕、靴、結び紐、顎鬚の貼り付け方法の順に組み合わせを示すと以下の 5 種類のようになる。

・A－A－A－A

・A－B－B－A

・A－C－B－A

・B－C－B－A

・C－D－C－B

袖と腕のA類がもっともバリエーションのある組み合わせをもっている。靴のD類を除くすべてに組み合わさり、結び紐はC類を除いて組み合わさり、顎鬚はA類のみというものである。袖と腕のB類は靴ではC類、結び紐はB類、顎鬚はA類という組み合わせのみである。袖と腕のC類は他と全く共通点が見出せないものであり、すべての特徴が唯一の組み合わせとなっているが、この違いはかつて、姫塚古墳の埴輪の作者について作風の違いから論述した小林行雄のすぐれた先行研究とも共通する（小林 1974)、最近では城倉正祥も詳細に論じている（城倉 2006b・2009)。

大きくみたとき、袖と腕のA類とC類には大きな差がある。すなわち、中実の腕を肩口に挿し込んでつくるか、それとも逆U字とはいえ半中空ともいえる腕（袖）を肩口に接合するかということは、製作技法上の大きな差と考えるからである。そのことからすれば、袖と腕のB類はA類のバリエーションとして理解できるかもしれない。それは顎鬚の貼り付け方法の差にも共通している。ただし、靴が中空となっている点は注意すべきであろう。なぜなら千葉県千葉市人形塚古墳において、袖・腕はC類でB類の顎鬚をもつ双脚男子像の靴が中空となっており、一方袖・腕はB類で顎鬚が三角形の粘土板を浮かせてはいないものの胸までは至っていない個体の靴は中実のもので靴に刺突文を多用するという特徴をもっているのである。いずれも台部は楕円形でドーム状の天井をもっていることから、姫塚古墳の靴のD類を基本としているが、靴は中実と中空があるというものなのである（図3：城倉 2006b)。

ここまで、姫塚古墳の顎髭を蓄えた双脚男子像の諸特徴について詳述してきた。袖・腕、靴、結び紐、顎鬚の貼り付け方法の諸特徴と組み合わせからは、筑波山周辺産埴輪はA－A－A－Aの組み合わせであり、それは筑波山周辺産埴輪以外には認められないようである。雲母を含む筑波山周辺産埴輪は比較的砂っぽい胎土をもち、焼成は極めて良好なものである。それに対して、他の4種類の組み合わせのものは、胎土の特徴では特に違いはない。ただし、A－B－B－Aの組み合わせは焼成が良好なものが多いようである。次には、石橋充が明らかにした筑波山周辺産埴輪の分布域を超えて確認できる筑波山周辺産の顎鬚を蓄えた双脚男子像について考究していきたい。

1-3　筑波山周辺産の顎鬚を蓄えた双脚男子像の長距離供給先

1-2 において殿塚古墳・姫塚古墳で筑波山周辺産の顎鬚を蓄えた双脚男子像が出土していることを示したが、袖・腕その他の特徴が他の顎鬚を蓄えた双脚男子像と異なっていた。

雲母を多く含む筑波山周辺産の顎鬚を蓄えた双脚男子像の良好な出土例は存在しないが、茨城県つくば市中台 2 号墳が参考になる（図 4－1～8：吉川ほか 1995)。残存状況が悪いものの、袖・腕以下の分類は、A？－？－？－A という組み合わせである。顎の表現（輪郭）をもち、その下から顎鬚をはやすような表現となっている。姫塚古墳の顔部分の破片でも同様なものがあり、筑波山周辺産の顎鬚を蓄えた双脚男子像の一つの特徴といえるかもしれない。

栃木県真岡市若旅大日塚古墳の顎鬚を蓄えた双脚男子像の袖・腕以下の分類は、A？－？－A－A である（図 4－9：和田 1901、小森 1984)。顎の表現（輪郭）をもち、その下から顎鬚をはやすような表現となっている。残存部分の特徴から、筑波山周辺産と考えられる。近接する若旅鏡塚古墳出土の円筒埴輪は内面の底部付近までハケ調整を施しており（図 4－10～12：小森前掲)、後述の石下 16 号墳出土の円筒埴輪と共通する。大日塚古墳・鏡塚古墳と、若旅富士山古墳群には筑波山周辺産埴輪が継続して供給されたようである。

栃木県芳賀郡市貝町石下 16 号墳の双脚男子像の袖・腕以下の分類は、A－A－A－？である（図 4－13～15：東京国立博物館 1980、小森 1990、秋元・飯田 1999)。残念ながら、顔面部分は残存していないが、胸に剥離痕がないので、おそらく三角形の粘土板を浮かせて表現する顎鬚 A 類であったと思われる。同古墳出土の形象埴輪は東京国立博物館にも所蔵品があり、A 類となる袖・腕が確認され、A 類となる靴も確認できる（東京国立博物館前掲)。また、内面の底部付近までハケ調整を施した円筒埴輪が出土している③。

表1　筑波山周辺産の顎鬚を蓄えた双脚男子像

	古墳名	墳形	規模	袖・腕	靴	結び紐	顎鬚
1	千葉県横芝光町姫塚古墳	方円	58	A	A	A	A
2	千葉県横芝光町殿塚古墳	方円	88	A	?	?	A
3	茨城県つくば市中台2号墳	円	36	A?	?	?	A
4	栃木県真岡市若旅大日塚古墳	方円	30以上	A?	?	A	A
5	栃木県市貝町石下16号墳	円	30	A	A	A	?
	栃木県真岡市若旅鏡塚古墳	方円	?	円筒（内面ハケメ多用）			

以上が、確実に筑波山周辺産と考えられる埴輪の長距離供給先である。表 1 にこれらの諸特

徴をまとめた。埴輪の長距離供給はひとり筑波山周辺産のものに限らず、様ざまな産地の埴輪に類例がある。次には長距離供給の方法あるいはルート、そして背景に迫ってみたい。

1-4　埴輪の長距離供給・地域間交流の背景

筆者は第3・5章において、技術の共有という視点も含めて同一埴輪製作工人集団による埴輪の長距離供給の具体像について示した。多くの事例は河川沿いに運ばれたと推定される分布を示している。埴輪という重量物を運搬する場合、最も合理的に運ぶことができるのは河川を媒介にした舟運ということになろう。小型の円筒埴輪といえども、1つの古墳に供給する量ということになれば舟で運んだ方がより大量に運べるはずである。

とはいえ河川のみを運搬の手段としたとは思えないような分布を示すものもある。例えば、福島県須賀川市塚畑古墳には常陸型人物埴輪（日高 2000c）の影響を受けたと考えられる分離造形の人物埴輪が存在する。また、栃木県真岡市鶏塚古墳でも常陸型の影響を受けたと考えられる分離造形の人物埴輪が存在する。前者は、那珂川あるいは久慈川を遡って運搬された後、陸上交通によって運ばれ、その後阿武隈川を下ったのだろうか。後者は、那珂川を遡って、陸上交通によって運ばれ、その後小貝川あるいは鬼怒川を下ったのだろうか。やや遠回りとも思われるので、一端霞ケ浦に出てから桜川を遡って、小貝川を横断して運ばれたのであろうか。

第3章で示した埼玉県深谷市上敷免や群馬県伊勢崎市赤堀町出土の武装男子にみえる、常陸型の影響をうけたと考えられる首甲の表現などは、霞ケ浦を介し現利根川を遡って長距離を運ばれたか工人そのものが移動したかのどちらかであろう。さらに栃木県那須烏山市塙平古墳出土の人物埴輪にも分離造形の人物埴輪脚部の存在が知られている（烏山町史編集委員会 1978）。胎土は茨城県ひたちなか市周辺の埴輪と共通する印象を持った[④]。那珂川を遡ってもたらされたものであろう。

それでは、筑波山周辺産の埴輪はどのようなルートで千葉県山武郡横芝光町殿塚古墳・姫塚古墳へ、あるいは栃木県真岡市若旅大日塚古墳、栃木県芳賀郡市貝町石下 16 号墳などにもたらされたのであろうか。栃木県のものは、筑波山周辺で生産されたものが霞ケ浦に注ぎこむ桜川を遡って、小貝川を横断して若旅大日塚古墳へ、桜川をかなり遡っていき石下 16 号墳へと運ばれたと考えるのが妥当だろう。山武郡の殿塚古墳・姫塚古墳へも霞ケ浦（香取海）を介して水運で運ばれ、千葉県側で陸揚げされた後、栗山川を下ってもたらされたのであろうか。顎鬚を蓄えた双脚男子像の分布は、千葉県側では山武郡の各古墳と千葉市人形塚古墳、そして香取市（旧佐原市）内出土品（野間 1942）が知られている（第3章参照）[⑤]。香取市（旧佐原市）

内出土品は顎鬚が胸に貼り付いているものだが顎の表現があり、服の結び目の表現はない。顎から下は姫塚古墳のものと共通している可能性もあるが、顎から上は筑波山周辺産の埴輪の影響も指摘できそうではある。つまり、両者の折衷のような顎鬚を蓄えた双脚男子像であるとも思われる。資料の実見は叶っておらず所蔵先も未詳なので、詳細な製作技法は未検討である。しかし、山武郡域に運ばれた筑波山周辺産埴輪が、可能性としてそのような資料の知られる佐原周辺で陸揚げされたと理解できないだろうか。

群馬県地域については、第3章で述べた垂下帯付き美豆良をもつ人物埴輪はまとまりとして認識できようが、それ以外に特徴的な共通表現をもついわば「一型」⑥という埴輪を見出すのは難しい。一方、特徴的な胎土（骨針、結晶片岩）の存在から、図5に示したように藤岡市本郷埴輪製作工人集団あるいは猿田埴輪製作工人集団の製品の供給範囲が地図上に描かれるようになった（志村 1995）⑦。また利根川中流域には、角閃石安山岩を胎土に含む埴輪の分布がみられる（中里 2000）。

図6は埴輪製作工人集団を同じくする製品が濃密に分布する範囲と、長距離に供給された古墳との位置関係を示したものである。特徴的な製作技法をもとにした「一型」の埴輪の分布範囲と、同一埴輪製作工人集団の製品供給範囲は、おおむね 50km 内外でおさまっていることがわかる。関東地方の場合、同一埴輪製作工人集団の製品認識が可能となるのは6世紀以降である。それ以前の 5 世紀段階では、「型」の認識はおろか同一埴輪製作工人集団の製品を抽出することが困難である場合も多い⑧。たとえば茨城県の霞ヶ浦周辺においては、5 世紀末ころの築造と考えられる墳丘長 90m前後の前方後円墳出土埴輪がそれぞれまったく異なった特徴を有しており、一方6世紀中葉以降になると共通の特徴や規格などをもつ埴輪も確認できるようになる（日高 2001）。この時期に埴輪製作工人集団の再編があり、集団としてのまとまり（個性）が顕在化してくると思われる。群集墳の増加（埴輪樹立古墳の増加）に伴う生産量の増加が埴輪そのものに斉一化を促し、「型」を成立せしめたと考えられはしないだろうか。

ただし、すべての埴輪製作工人集団にそれぞれを特徴付ける「型」が成立するわけではない。埼玉県地域では、生出塚遺跡を中心として円筒埴輪には最下段の伸長化と最上段の短縮化、底部径の矮小化あるいは底部調整などが特徴としてあげうることが、数値化をおこなうことにより明確となっており（山崎 2000）、角閃石安山岩を胎土に含む利根川流域の埴輪にもその特徴は認められる（中里 2000）。しかし、茨城県の霞ヶ浦周辺では、前述のように共通の特徴や規格を有する埴輪がある一方、円筒埴輪のなかには6世紀を通じて形態上の変化に乏しいことも事実である（日高 2003a）。いずれにせよ、6世紀代になると他にはない共通表現をもつ埴輪が

顕在化してくるという事実は、極めて重要である。筆者はこの現象に対して、第8章において土師部の成立と古墳時代社会組織や支配体制の国家的再編が関わっていると考えた。もとより埴輪だけでこれらを語るのは早計であろうし、古墳時代のあらゆる要素を考慮してのみ語ることのできる課題であることはいうまでもない。

ここまで埴輪の分布範囲と、同一埴輪製作工人集団の製品供給範囲をめぐって、その実体を述べてきた。関東地方において6世紀中葉以降は、埴輪生産量がそれ以前と比べると飛躍的に伸びた時期である。そのような時期に埴輪製作工人集団としての「型」が成立したことは、古墳時代史のなかで極めて大きな画期を求めることができるだろう。いずれにしても、筆者が安定供給範囲として理解した50km内外（第5章参照）を超えて埴輪が供給される場合（工人の移動などの技術の共有も含めて）、両地域に地域間交流を促す理由があったはずである。政治的繋がり（意図）も視野に入れておかなくてはならないが（坂本 1996）、政治的意図とは別のいわば商品のような流通網（経済的繋がり）にのって埴輪が運搬された可能性もあるのではないかと考えている。図6に示した直線あるいは矢印、点線間に、政治的繋がりと経済的繋がりという2つの地域間交流の形が含まれると思われる。いずれであるかを決するのは困難であるが、墳丘企画や石室・石材など複合的に共通する場合には（同一地域内での共通性も含めて）、政治的繋がりを考えた方がよいのだろう。

ここまで、殿塚古墳・姫塚古墳の整理調査のなかで明らかになった筑波山周辺産埴輪を中心に6世紀後半代の関東地方の地域間交流の一部を考えてきた。姫塚古墳における顎鬚を蓄えた双脚男子像の製作技法には、大きく2つの差異があることは前述の通りである。顎鬚を蓄えた双脚男子像という括り方でいえば非常に近しい造形であるが、個々の技術に着目するとかなり大きな差があることもまた確かである。工人集団の差異を反映していることは間違いない。わざわざ筑波山周辺から埴輪を搬入してこなければならない理由を考えていかなくてはならないが、現在の筆者には明確な答えは見いだせていない。ただし、霞ケ浦周辺における首長墓の動向は注意しておく必要があるだろう。筑波山周辺で顎鬚を蓄えた双脚男子像はつくば市中台2号墳、潮来市棒山2号墳、同市大生西1号墳、行方市矢幡、伝筑波郡が知られており、この他茨城町小幡北山埴輪窯でも出土が伝えられている（第3章参照）。殿塚・姫塚古墳の埴輪と胎土が共通するのは中台2号墳である。中台2号墳の近辺で同時期の首長墓を探すとなると、茨城県小美玉市玉里古墳群の首長墓やかすみがうら市域の首長墓が知られているが（日高 2010）、埴輪に共通性はあまり見られない。このことから、政治的繋がりを想定することは難しいのではなかろうか。同様の顎鬚を蓄えた双脚男子像は茨城県北部地域などでも出土してお

り、それらの詳細な検討が必要となってくるが、政治的意図とは別のいわば商品のようなかたちで流通網にのって埴輪が供給されたと考えられないだろうか。

2．埴輪の意義

埴輪の意義に関して様ざまな意見があることは序章で示した通りである。私の考える埴輪の意義については第 10 章で述べたところであるが、そもそも古墳という墓に埴輪を立て並べるということについて、基本的な疑問が存在する。それは古墳構築の各段階を考えた時、埴輪はいつ古墳に立て並べられたのだろうか、という素朴な疑問である。ここでは埴輪樹立に関する基本的な整理をおこなって、その上で改めて埴輪の意義について考えてみたい。

2-1　埴輪が立て並べられた場所について

埴輪の意義を考える前に、埴輪が古墳に立て並べられた場所について、形象埴輪を中心にこれまでの発掘調査の成果から列挙すると以下のようになる。

・墳頂部

・墳丘テラス面および横穴式石室前庭部周辺

・墳丘外の堤上

・造出および周辺

・出島上や中島上

・前方部上

・墳丘から離れた兆域端

当初、前方後円墳の後円部墳頂において方形埴輪列として出発したものが、くびれ部等に造出が出現するとそちらへも埴輪が並べられるようになる。さらに、墳丘の外へと埴輪列の位置が変化し、堤上さらには横穴式石室が導入されるとその入り口付近に並べられるようになる（坂 1988：図 7)。墳丘の中段に埴輪列が展開するものなどは、横穴式石室との関わりで考えた方がよいだろう。

埴輪はいつ並べられたのか。竪穴系の内部主体の場合、しばしば墓坑の内側に埴輪が並べられている例が認められる。例えば、三重県伊賀市石山古墳（京都大学文学部博物館 1993:図 8)、京都府八幡市ヒル塚古墳（桝井ほか 1990：図 9）などでは埋葬が終わって墓坑を埋めた後、埴輪を樹立したことが分かっている。このことからすれば、埴輪とは死者の埋葬段階の最後に置

かれたものと考えることもできよう。但し、主体部と切りあいのない形での埴輪樹立の場合前後関係を知ることは難しい。石山古墳やヒル塚古墳の場合でも、主体部の墓坑と関わらない墳丘テラス面の埴輪などは事前に立て並べていたことも想定される。

古墳時代後期に多くみられる、中堤上や帆立貝形古墳の前方部上、くびれ部の造出、前方後円墳の墳丘テラス面に立て並べられた形象埴輪群などは、その樹立時期が埋葬前であるのか、埋葬時であるのか分からない。古墳が寿墓であるとするならば、形象埴輪に共通表現が存在することは埴輪の作り置きを示唆しており、生前に発注されているのではないかと考えられるが（第 10 章参照）、そのことからすれば埋葬前に樹立されていた可能性もある。しかし、古墳時代前期以来の伝統がなおも続いているとするならば、埋葬時と捉えることができよう。横穴式石室の前やそこから繋がるテラス面などに埴輪が樹立されているものがあることから、私自身は埋葬時（埋葬終了時）に埴輪が立て並べられたものと推察している。

和歌山県和歌山市井辺八幡山古墳の東西くびれ部造出に立て並べられた形象埴輪群についても埋葬時に立て並べ、底を打ち欠いた須恵器大甕などを置いたのではなかろうか（森ほか 1972、松田ほか 2007：図 10）。群馬県高崎市神保下條 2 号墳の小規模円墳の埴輪群（右島 1992：図 11）も横穴式石室への埋葬時に埴輪が立て並べられたと考えたい。奈良県生駒郡三郷町勢野茶臼山古墳では、横穴式石室の前庭部に女子、家、蓋、盾、大刀、円筒埴輪が並べられていた（伊達 1966、若松 1988：図 12）。これなどは、横穴式石室の埋葬時（あるいは終了時）に並べられたものであろう。

2-2　埴輪配列の全国的共通性について

古墳に立て並べられる埴輪は、1 列に立て並べられるものと群像として何列もの配列として立て並べられる場合がある（市毛 1985）。立て並べられた形象埴輪群に共通した要素が存在することは、多くの研究者によって夙に明らかにされてきたところである（水野 1971・1974、橋本 1980、若松 1992b など）。また、配置されたそれぞれの形象埴輪群に共通する区分けが存在し、それらが削除や変形を伴いながら全国的に存在することも明らかにされてきた（塚田 1996・2007、犬木 2007・2008）。これらの諸研究は形象埴輪の意義を考える上でいずれも極めて重要な視点を提示しており、それぞれの要素が全国各地で共通しているということは、埴輪の意義を考える上でも示唆に富むものである。

配置された区分け要素のすべてを備えている例が大阪府高槻市今城塚古墳である（森田 2009・2011a・2011b など：図 13）。そこでは、柵形埴輪で 1～4 区として区画された中に、そ

れぞれ時間と空間を異にした場面が再現されているようである。これらの場面の縮小版や削除されたものが各地の古墳の埴輪配列に認められるようである（犬木 2008）。

筆者は、東北地域の形象埴輪を検討した際、同様の視点で埴輪配列を考えたことがある（日高 2011b）。福島県西白河郡泉崎村原山 1 号墳（福島県教育委員会 1982、今津 1988）、福島県相馬市丸塚古墳（今津 1988）、福島県神谷作 101 号墳（福島県 1964、今津 1988）の埴輪配列は不明な点も多いものの、構成される要素として、中心儀礼場面、動物中心場面、家中心場面、墳丘守護場面の 4 つがあると考えた。そして、今城塚古墳の区画でいうならば、それぞれ 3 区、4 区、2 区、4 区？に相当すると認識したのである。埴輪樹立の数では縮小されているが、中心儀礼場面では対面・飲食・音楽など、動物中心場面では馬列・狩猟・武人など、家中心場面では家・鶏・器財など、墳丘守護場面では盾持ち・力士などが場面構成要素として存在し、それぞれの場面が判明していない古墳についても発掘された地点の隣接地などで確認される可能性を指摘した。

表2 場面構成要素一覧

構成要素	中心儀礼場面			動物中心場面			家中心場面			墳丘守護場面	
	対面	飲食	音楽	馬列	狩猟	武人	家	鶏	器財	盾持	力士
原山1号墳	?	○	○	○	○?	?	?	?	?	○	○
丸塚古墳	○	○	?	○	?	?	?	?	?	?	?
神谷作101号墳	○	?	?	○	?	○	○	○	○	?	?
今城塚古墳	3区			4区			2区			4区？	

全国各地で確認される埴輪配列に共通点が見出せるということは、埴輪として表現された場面が共通していた可能性を示している。それでは、今城塚古墳の埴輪配列の縮小版とはいかなる意味がこめられていたのだろうか。それは、水野正好が形象埴輪群像に対して、「発想のもとは朝廷にあり、この点を巧みに媒体として、各地の首長を容認する手段として各地に埴輪祭式を拡げ配布していくのであって、政治色のきわめてつよいものであった（水野 1974:p.153）」と評価したことが極めて蓋然性の高いことであったと思われるのである。

2-3 埴輪の樹立と古墳葬送儀礼

これまで埴輪の意義に関しては、「首長権（霊）継承儀礼」、「殯（殯宮儀礼）」、「葬列」、「生

前顕彰」、「供養・墓前祭祀」、「他界における王権祭儀」、「被葬者が主宰した祭祀」、「神宴儀礼」、「殉死の代用から来世生活」、「死後の世界における近習」、「政治・祭祀行為の表示」、「現生の来世への投影」など正に多様な解釈がある。

これらの諸説については一長一短があり、あるいはいずれも捨てがたい魅力的な解釈である。私は被葬者が生前において神を祭る儀礼（神宴儀礼）をおこなっている姿と捉えているが、それは、埴輪が生前に発注されているのではないかと考えているからである（第 10 章参照）。また、動物埴輪を中心とした場面は被葬者生前の場面のうち、狩猟あるいは馬列を再現したものであると考えている（第 11 章参照）。

ただし、被葬者生前の場面であるならば、被葬者が生前に首長権を継承した時の儀礼を再現したと考えてもよいのではないかと思われてくる。しかし、律令以前の大王就任儀礼にとって欠かせない宝器の授受や宣命・拝礼の儀式のうち（岡田 1982）、宝器の授受という場面が[9]、形象埴輪の中に再現されているとは思えない。確かに群馬県太田市塚廻り 4 号墳（石塚ほか 1980：図 14）にみる大刀を持つ女子埴輪の存在は、宝器の授受を思わせるが、この他には類例がなく、むしろ飲食供献儀礼を中心とした場面が一般的であると考えたほうが理解しやすいのではなかろうか。

埴輪樹立についての基本的な問題を述べてきたが、埴輪がいつ立て並べられたのかという問題を含めて、古墳築造における葬送儀礼にはいかなる諸段階・場面があるのだろうか。和田晴吾は墳丘や、内部主体等で行われていたと考えられる古墳祭祀について、前期古墳から後期古墳の墳丘や内部主体構築過程の違いなどを踏まえて詳細に整理した。すなわち、地鎮儀礼、納棺・埋納儀礼、墓上儀礼、墓前儀礼などを古墳構築の各段階と対比させてまとめたのである（和田 1989・2009 など）。また土生田純之は古墳構築にあたって、様ざまな場面で儀礼が執り行われたであろうことを示している。古墳の選地に始まり、基礎工事、埋葬など多くの場面で儀礼が行われたと考えたのである。また、実際の発掘調査成果から、それらの場面で儀礼が行われたことを示した。具体的には、「土器を用いたものと焚火の二種、およびこれらの複合形態」があるとした（土生田 1998c：p.217）。

先学の卓見に導かれながら、古墳築造における葬送儀礼の諸段階・場面を改めて示すと以下のようになる[10]。

0.墳丘築造中－築造の各段階において儀礼を行なう→旧表土上や墳丘中での儀礼

1.死の確認－死を受け入れずに甦りを図る→居宅や古墳とは別の場所での儀礼

2.死の決定－死を受け入れ死者から生者への何らかの移行を図る→居宅での儀礼？

3.死者の埋葬－死者を埋葬することで完全に生者との関係を断つ→埋葬施設および墳丘最終段階での儀礼（埴輪樹立はこの段階と思われる）

4.死者の慰撫－埋葬後に追悼儀礼をおこなう→墳丘上あるいは横穴式石室前庭部での儀礼

前述した通り埴輪は 3.死者の埋葬場面において樹立されたものと考えている。古墳構築の最終段階において、生前発注されていた埴輪を立て並べて古墳への埋葬は終了したのである。第1章で論じた共通表現の埴輪の存在は、共通表現の人物や馬などの埴輪が作り置きされていたことを示しており、それらの埴輪が複数の古墳へと供給されたのであろう。このことからも、埴輪製作が被葬者の死後に発注されたのではなく、予め製作されていたものと考えた方がよい。さらに推敲するならば、被葬者の生前に埴輪製作が発注されたと解することもできよう⑪。

かつて、若松良一は古墳における埴輪の多様性について、追加樹立の可能性を指摘した（若松 1982)。多様性については、埴輪製作工人集団の違いや集団内での工人差による見かけ上の型式差の可能性もある。ただし、追加樹立があったとすれば、それは追葬時であったと思われ、埴輪樹立は埋葬時であると考えることができよう。

3．埴輪研究の課題

3-1　埴輪同工品論をめぐって

現在の埴輪の研究は、生産体制をめぐってハケメ工具の異同などをもとにした同工品論がその中心に躍り出た感が強い。特に、下総型埴輪に関しての犬木努の研究（犬木 1994・1995・1996・2005）や、生出塚埴輪製作工人集団に関しての小橋健司の研究（小橋 2004・2005)、城倉正祥の研究（城倉 2007・2008・2009・2010a・2010b・2011）などがあげられる。

犬木努の研究は同一古墳で出土する埴輪製作工人が複数の古墳のなかで、製作本数を異にしながら供給されていることを明らかにしており、「ある工人の製品が、特定の古墳には多数確認されていても、別の古墳ではごく少量しか確認できないような事例も散見されており、一古墳で見出されている埴輪製作本数の多寡のみから、埴輪生産にかかわる「労働編成」を論じるには、十分に慎重な検討が必要である（犬木 2005：p. 17)」とされた。また、「大型墳では埴輪工人の人数が多く、小型墳では埴輪工人の人数が少ないという大まかな傾向が認められる。－中略－埴輪の在庫管理が行われていたとすれば、大型墳でも小型墳でも、本数の多寡にかかわらず同様な人数構成を示す筈であり、上記のような傾向は、古墳造営のたびにその古墳に樹立する埴輪だけを限定的に生産していたことを示す状況証拠（犬木前掲：pp. 18-19)」としたの

である。極めて重要な指摘であるが、果たして複数の古墳から出土した同一埴輪製作工人の製品とはいかなる時間のなかで製作されたものなのだろうか。古墳造営のたびに必要な本数だけ埴輪を製作したのだろうか。私は、複数の古墳から出土する同一埴輪製作工人の製品の存在は、埴輪の作り置きを示しているのではないかと推察する。古墳の規模と工人の数の多寡に関しては、工人の埴輪製作本数の多寡に起因していると考えられないだろうか。

城倉正祥の研究は北武蔵地域の埴輪窯跡出土埴輪をもとに、周辺の古墳出土の埴輪にも目配りをした詳細な研究であり、生出塚埴輪製作工人集団を拠点生産地と位置付け、馬室・和名・桜山・姥ヶ沢・権現坂の各埴輪製作工人集団を衛星生産地と位置付けることで、図 15 に示したような埼玉古墳群を頂点とする階層秩序のもとで「拠点・衛星二重構造型」の生産体制が確立したという（城倉 2011：pp. 69-70)。かつて、山崎武が生出塚窯と馬室窯との比較の中で、「生出塚の工人と馬室の工人が同じ人間で、例えば荒川流域に供給する場合には馬室で作り、元荒川で供給する場合には生出塚を利用したと推定することも可能ではないか（山崎 1993：pp. 52・60)」との指摘をおこなっていることも想起される。拠点生産地があり、その周りに影響を受けつつ生産をおこなっていた複数の生産地が存在していたと考えることができよう。

以上のように、各生産地と供給地との関係を証明していく上で、同工品分析は極めて重要な研究である。今後も、各地で出土する埴輪が何処で製作された埴輪であるかを考究していく上で継続的な研究が必要となってくるだろう。一方で、私がここまで述べてきたような共通表現検討も埴輪製作工人集団とその製作品を追求していく上で重要な視点であると考えている。また、第 4 章で示したような巨視的にみた埴輪の地域性という観点も必要なものであると考える。さらに、埴輪の胎土分析を積極的に進めていくことで新たな見解を得ることもできるだろう。

3-2　東アジア歴史世界の中の埴輪

第 12 章では横坐り乗馬に注目して古墳時代を東アジア歴史世界の中で理解していく視点を示したものである。それは、かつて田村実造がアジアの 4 つの歴史世界を詳細に論じたうちの東アジア歴史世界のなかの日本列島という相対化の必要性を強く感じていたからである（田村 1990)。もちろん日本列島という地理的・歴史的環境からは、北アジア歴史世界との関わりも当然あったはずである。このことについて、かつて北海道余市郡余市町大川遺跡出土品をめぐって若干考えたことがある（日高 2003b)。そこでは北からと日本列島の西からとの交流の様を素描した。

太田博之は埼玉県行田市酒巻 14 号墳出土の朝鮮半島起源の服飾・器物を表現した埴輪を取

り上げて、「筒袖人物埴輪を実際に関東へ移動・往来する機会のあった朝鮮半島出身者をモデルとし、古墳時代後期後半に至って新規に造形されるようになった人物埴輪の一器種（太田 2010:p. 124)」と理解し、被葬者と朝鮮半島との強いつながりを示していると考えた。古墳時代を東アジア歴史世界の中で位置づける一つの方法である。さらに酒巻 14 号墳の埴輪は、被葬者の生前の活動を色濃く反映しているものであり、埴輪が被葬者の生前の場面であるとする私の意見とも合致してくる。

古墳時代をひとり日本列島の中でのみ理解しようとせず、広く東アジア歴史世界と結び付けていかなければならない。埴輪研究の重要な課題の一つとして提示しておきたい。

註

① 国立歴史民俗博物館で殿塚古墳・姫塚古墳の整理作業を始めたのは 1996 年 2 月からである。その後、今日に至るまで多くの方々と共に作業を進めてきており、近年は総括にむけて写真撮影をしている。本章の内容はこれまで整理作業に携わった方々との対話等も基にしている。

② 平岡和夫は轟俊二郎の研究(轟 1973)を引用しつつ、下総地域を行動範囲としていたとも述べている。

③ 那須烏山市郷土資料館に保管されている同古墳出土品実見にあたっては、秋元陽光氏、賀来孝代氏にお世話になった。殿塚古墳・姫塚古墳の整理作業を共に行っている加藤一郎氏、山田俊輔氏、米澤雅美氏らと実見・検討することができた。

④ 本例の実見にあたっては秋元陽光氏、賀来孝代氏にお世話になった。

⑤ イギリス大英博物館にも顎鬚を蓄えた双脚人物埴輪が収蔵されている。千葉県経僧塚古墳や同人形塚古墳と顎鬚の表現などと共通する部分が多い。

⑥ 上半身と下半身を別々につくる「常陸型埴輪」(日高 2006)、「下総型埴輪」、萩原恭一のいう「山武型埴輪」(萩原 1999) などや「生出塚産埴輪」などが型として認識できる一群である。

⑦ ただし、結晶片岩を胎土に含むという特徴を有している地域として埼玉県北西部の児玉郡域がある。埴輪製作遺跡も多く所在する地域であるが、各古墳出土埴輪との対応は未詳な部分も多く、今後の検討課題である。

⑧ それに対して、東海地方では須恵器の技法を多用した埴輪が基本であり、赤塚次郎によって尾張型埴輪が提唱されている（赤塚 1991・1997)。それによれば、尾張型埴輪の顕在化は早くも 5 世紀前半にはじまっているようである。ただし、他地域への拡散には 2 次拡散期と終焉的拡散期があり、後者は 6 世紀第 2 四半期ころのことであったという。

⑨ 各地の首長たちも、配下の群臣が参列する中、宝器の授受や宣命・拝礼の儀式があっただろう。また、

岡田が大王就任儀礼における壇（高御座）の存在を詳細に検討したように（岡田前掲：pp.10-15）、自らの宮（居宅）あるいはその近傍で特別な小さい壇をつくり執り行われた儀礼であると考える。考古学的にこれらの壇状構築物が確認された例はないが、豪族居館と目される遺跡のなかの無遺構部分などに本来あったのではないかと憶測してみるが、今後の調査進展を待ちたいと思う。

⑩ 埋葬施設内の副葬品配置や横穴式石室追葬の際の片付けなども葬送儀礼の一段階であり、語りきれなかった葬送儀礼の方が多岐にわたるものであることを記し、他日を期したい。

⑪ 各地の首長墳と中小円墳とで埴輪製作に違いがあったことも想定される。すなわち、前者は注文製作され、後者は作り置きから入手するといった可能性はある。しかし、いずれにしても生前に製作されていた可能性は高いのではなかろうか。

図版引用文献

図1　石橋 2004

図2　筆者作成

図3　城倉 2006 b

図4－1～8　吉川ほか 1995

図4－9～12　小森 1984

図4－13　小森 1984

図4－14～15　秋元・飯田 1999

図5　志村 1995

図6　日高 2006 に加筆

図7　坂 1988

図8　京都大学文学部博物館 1993

図9　桝井ほか 1990

図10　松田ほか 2007

図11　右島 1992

図12　若松 1988

図13　森田 2011a

図14　石塚ほか 1980

図15　城倉 2011

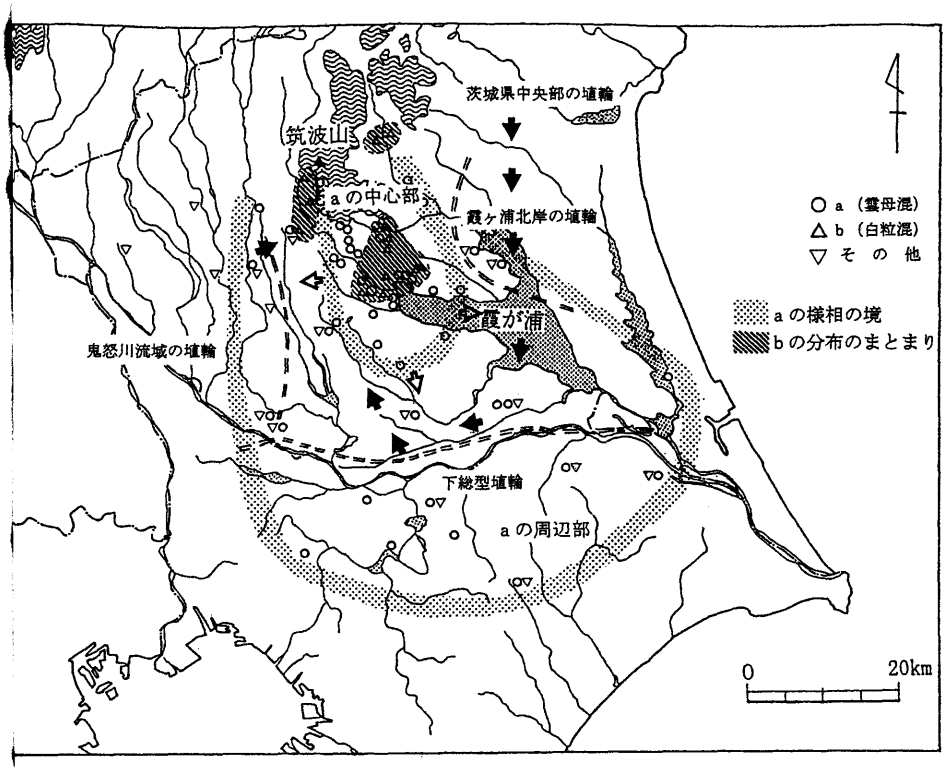


図1　石橋充による筑波山周辺産埴輪の分布

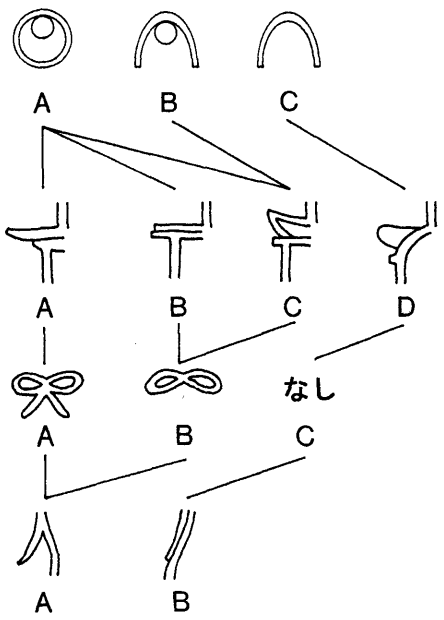


図2　顎鬚を蓄えた双脚男子像の諸特徴

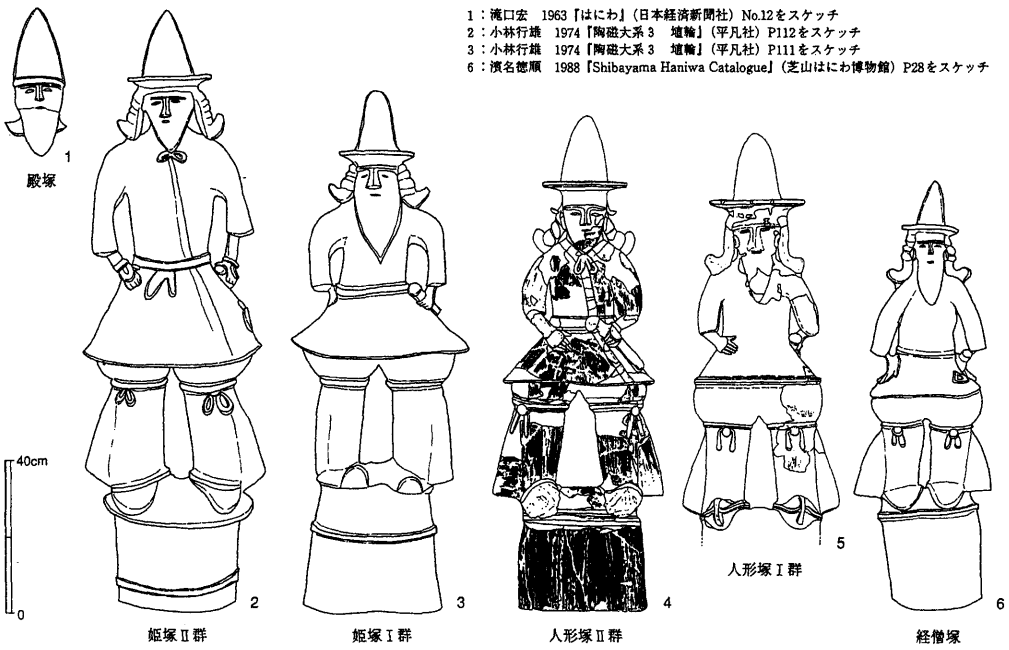


図3　城倉正祥による顎鬚を蓄えた双脚男子像の分類

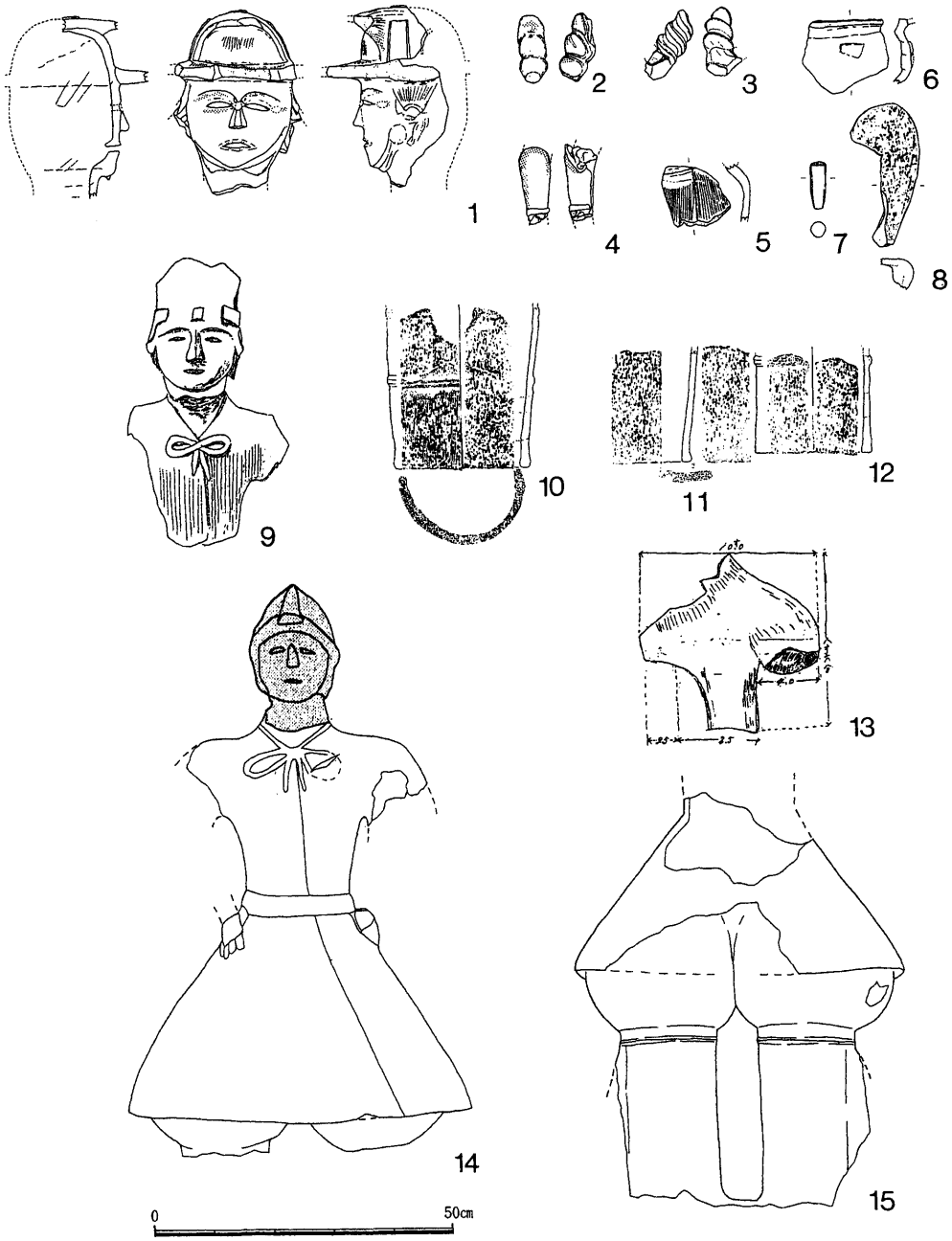
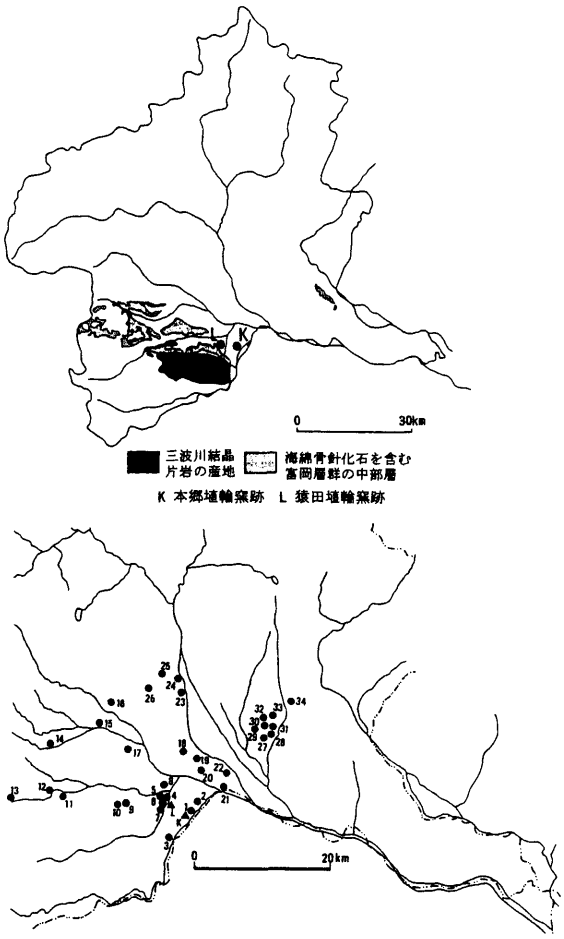


図 4　筑波山周辺産の顎鬚を蓄えた双脚男子像

1～8.中台 2 号墳　9.若旅大日塚古墳　10～12.若旅鏡塚古墳の円筒埴輪　13～15.石下 16 号墳



K　本号埴輪窯跡
L　猿田埴輪窯跡
1　堀ノ内遺跡墳
2　戸塚神社古墳
3　高峯古墳
4　宗永寺裏東塚古墳
5　七興山古墳
6　平井地区１号古墳
7　皇子塚古墳
8　土合４・５号古墳
9　神保下条
　　１・２号古墳
10　多胡村95号古墳
11　桐渕11号古墳
12　堂山稲荷古墳
13　吉田２号古墳
14　簗瀬二子塚古墳
15　平塚古墳
16　本郷的場古墳
　　稲荷塚古墳
17　小林山台２号古墳
18　情報団地遺跡
　　５号古墳
19　綿貫観音山古墳
20　若宮八幡北古墳
21　オトカ塚古墳
22　小泉大塚遺蹟跡
　　３号古墳
23　王山古墳
24　遠見山古墳
25　高塚古墳
26　八幡塚古墳
27　波志江今宮遺蹟
　　４・７号古墳
28　地蔵山古墳群
29　宮下西遺蹟
30　石山南所在古墳
31　洞山古墳群
32　今井神社２号古墳
33　中二子古墳
34　峯岸山古墳群

図５　結晶片岩・海綿骨針化石分布（上）と藤岡産埴輪の供給範囲（下）

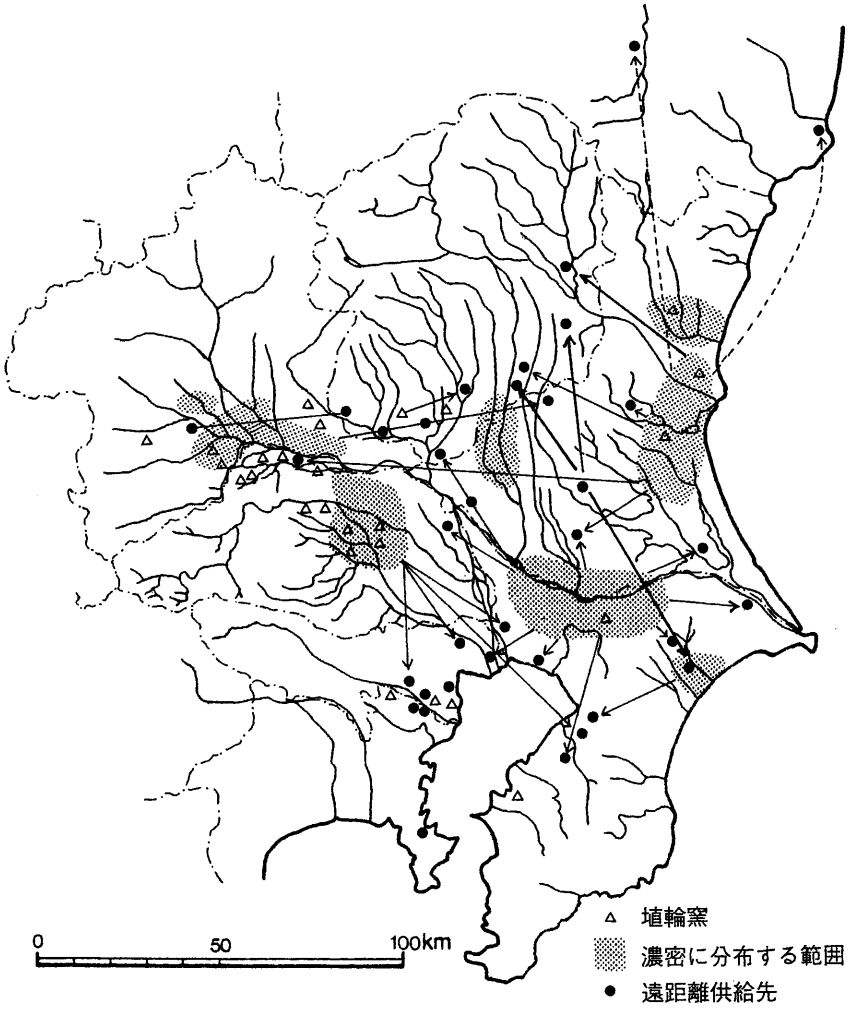


図6　埴輪の供給範囲と遠距離供給先（技術の共有を含む）

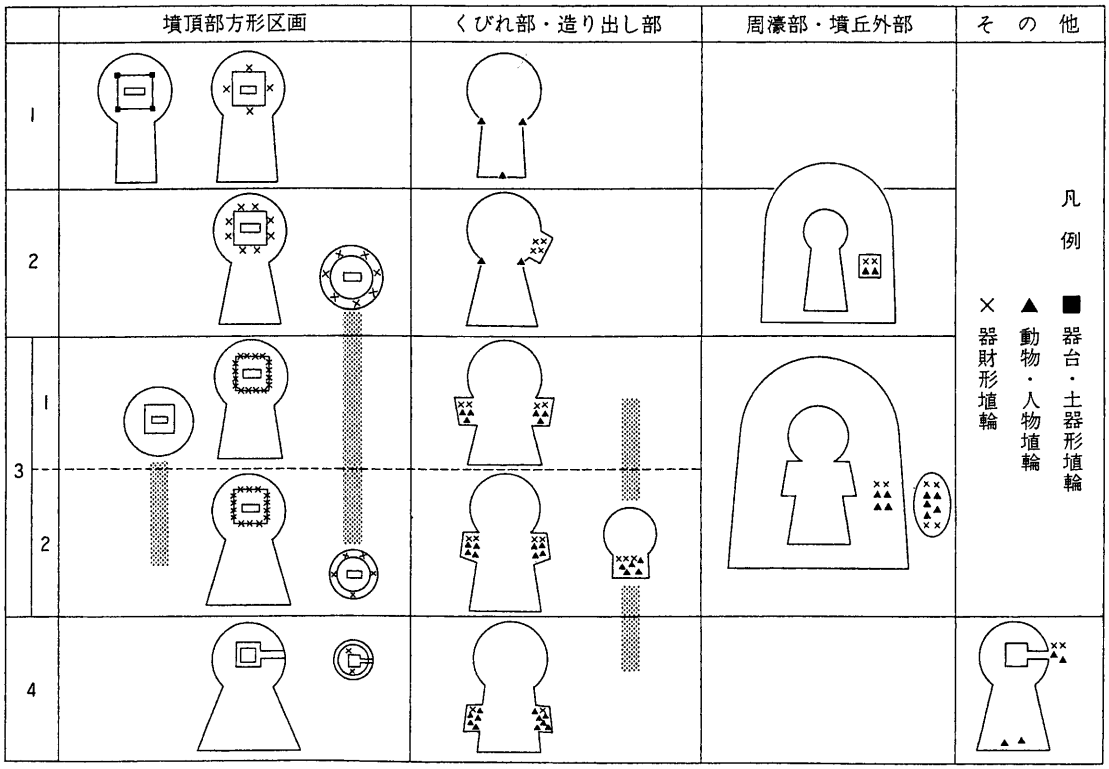


図7　坂靖による埴輪配列の変遷

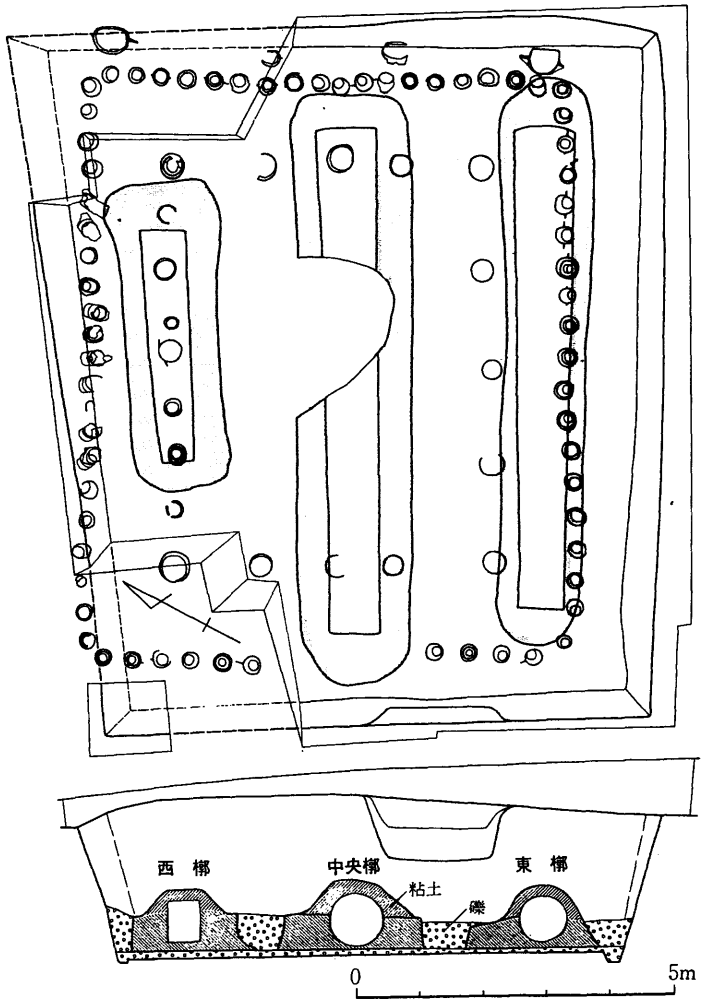


図8　石山古墳の埴輪配列

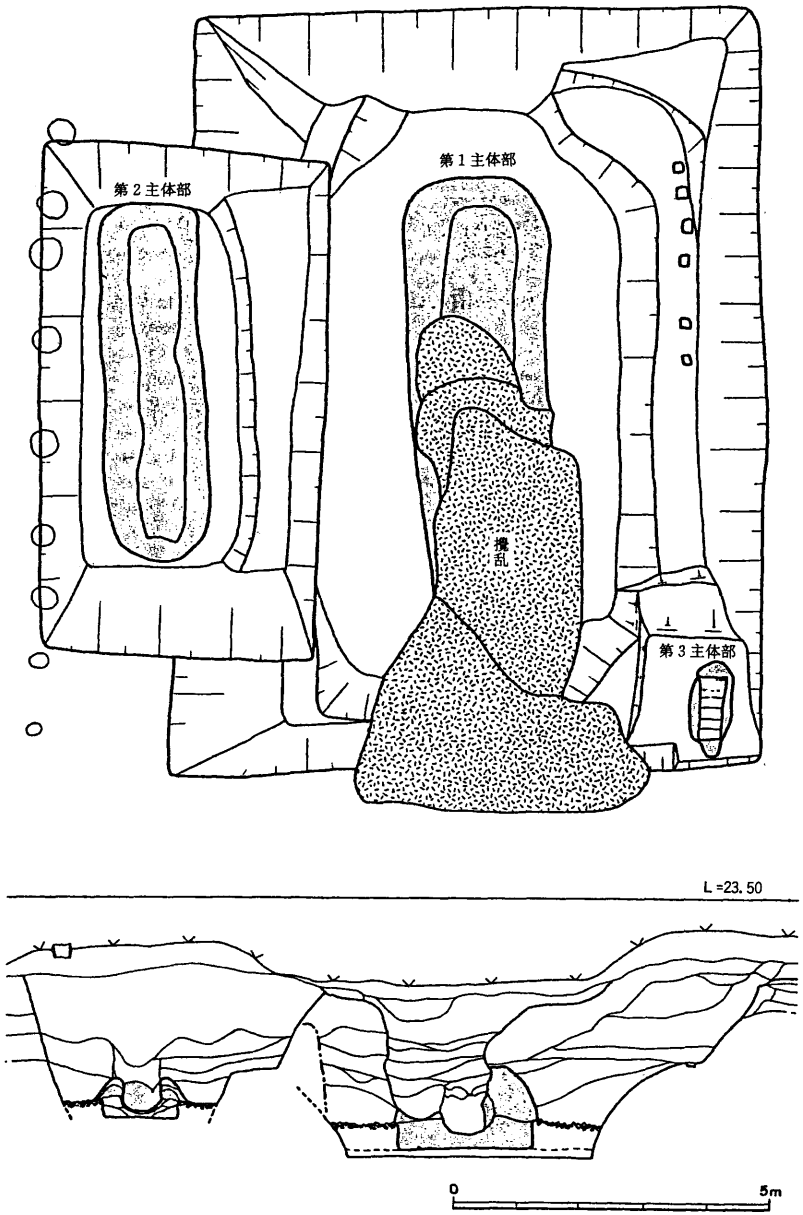


図9　ヒル塚古墳の埴輪配列（左端の円形が埴輪列を示す）

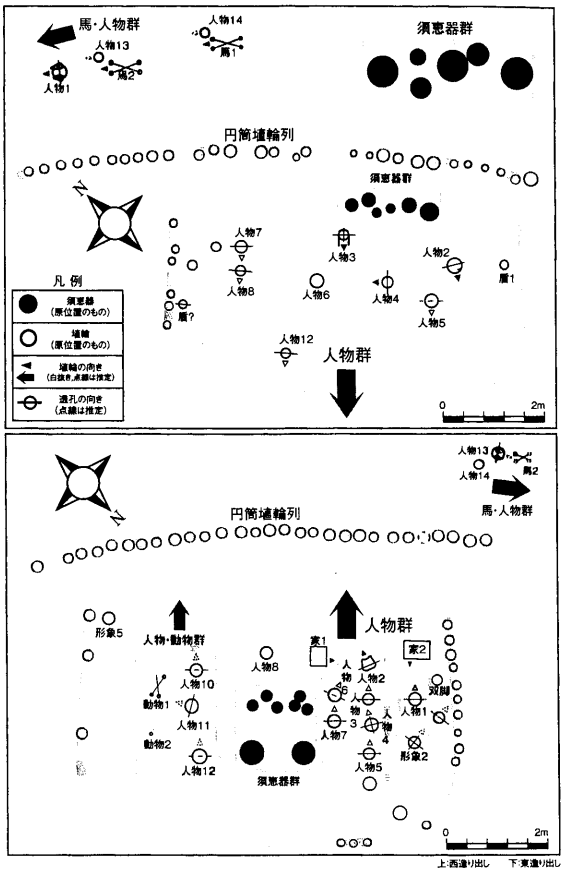


図 10　井辺八幡山古墳造出周辺における埴輪・須恵器出土状況

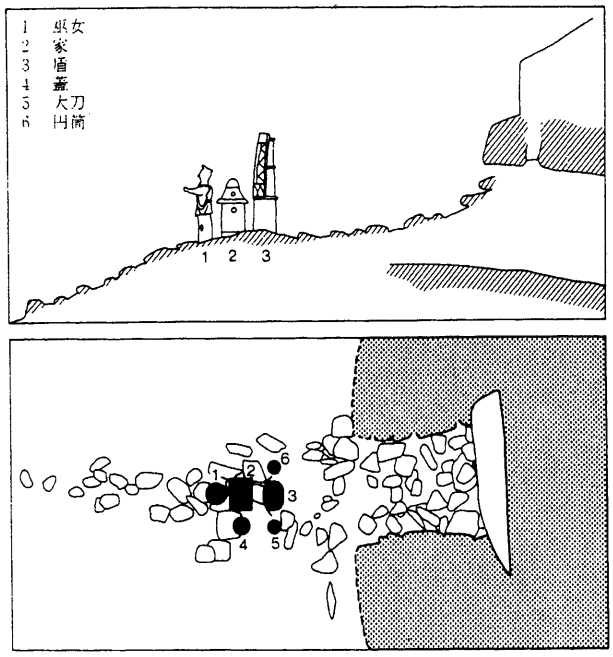


図 12　勢野茶臼山古墳の埴輪配列復元

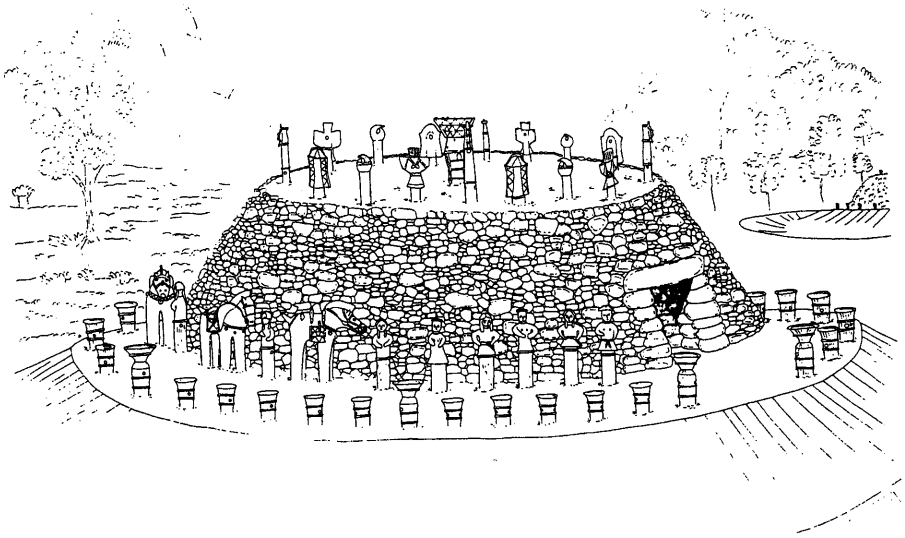


図 11　神保下條 2 号墳の埴輪配列復元

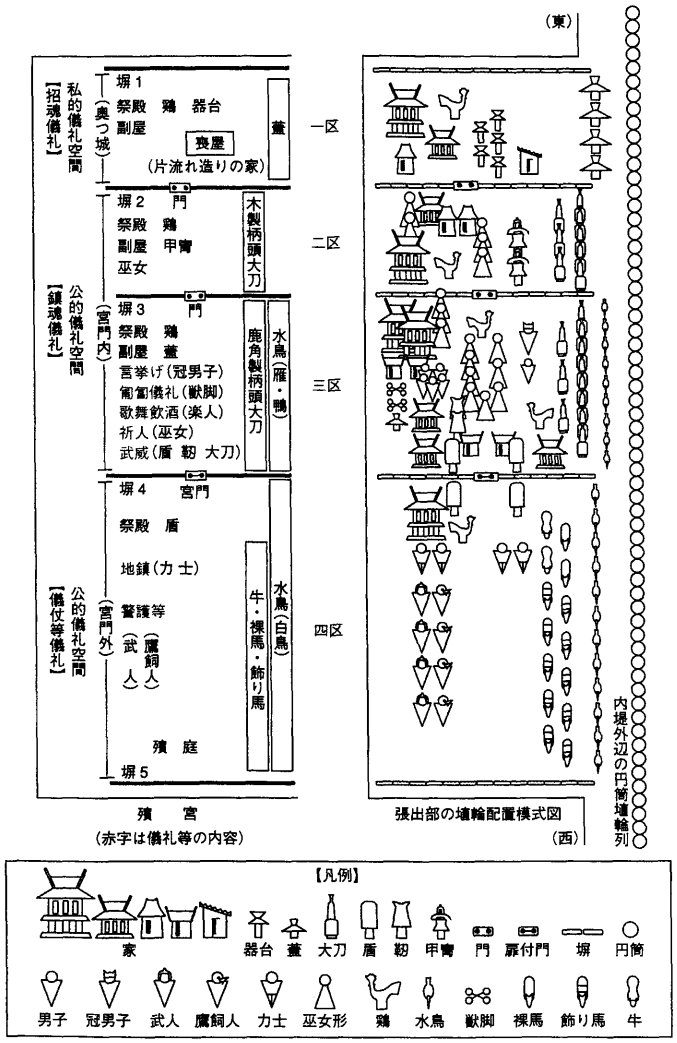


図 13　今城塚古墳の埴輪配列復元

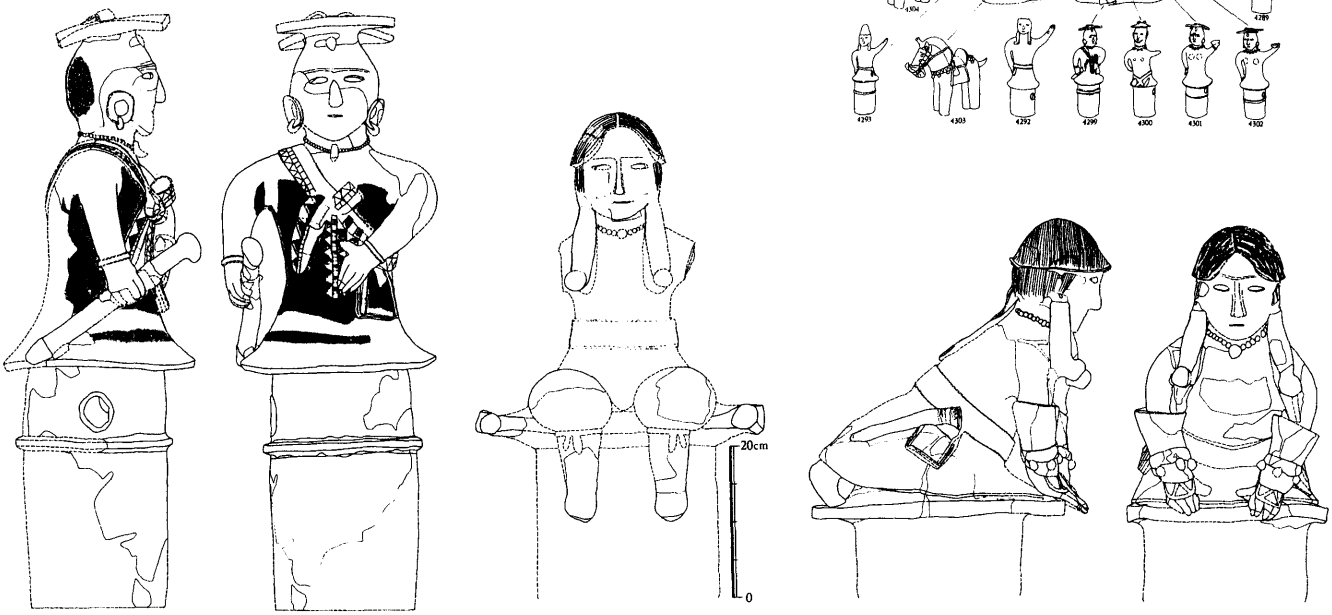


図 14　塚廻り 4 号墳の埴輪と配列復元

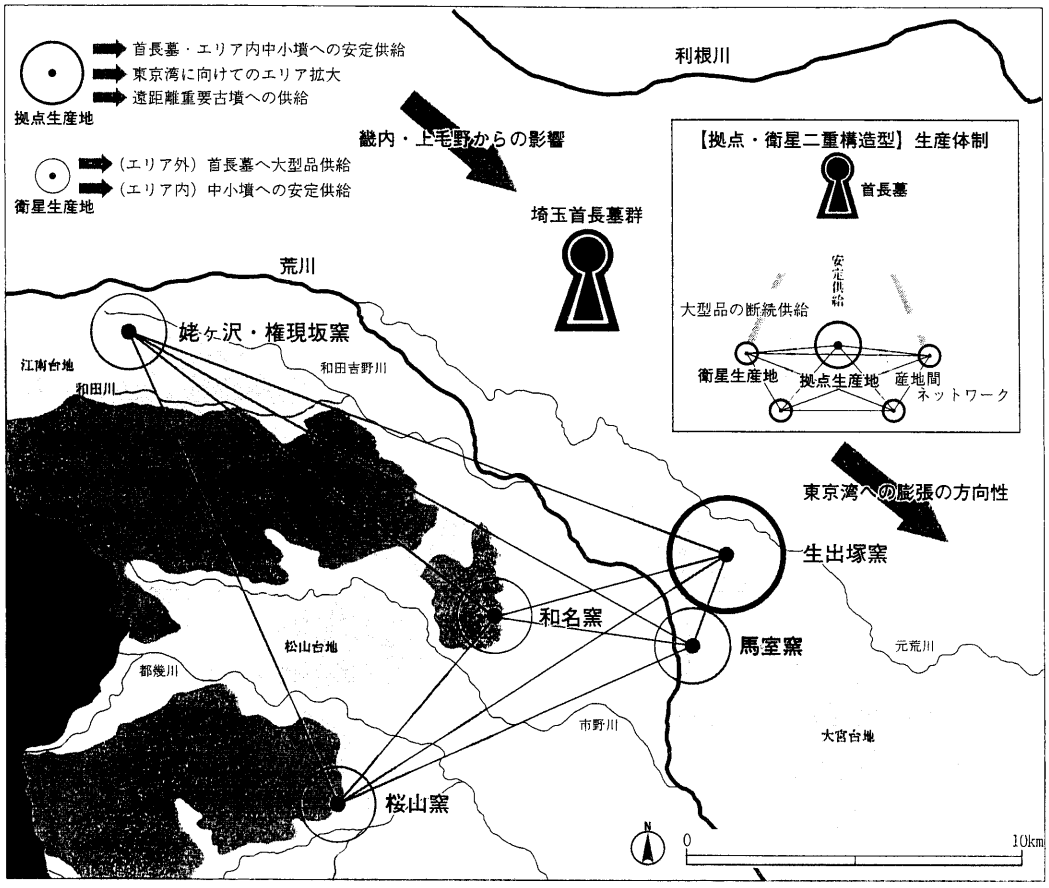


図 15　城倉正祥による生出塚埴輪製作工人集団をめぐる諸関係

引用・参考文献一覧

青柳泰介　2003「導水施設考」『古代学研究』160　pp. 15-35

赤塚次郎　1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター　pp. 34-50

赤塚次郎　1997「須恵器系埴輪の拡散」『伊達先生古稀記念古文化論叢』pp. 309-323

赤星直忠　1938「横須賀市に於ける形象埴輪の出土に就いて」『考古学雑誌』28-6　pp. 394-410

赤星直忠　1967『厚木市登山古墳調査概報』(厚木市文化財調査報告　第8集)厚木市教育委員会

赤坂　亨　2000「風返稲荷山古墳の再測量調査」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会　pp. 25-27

秋元陽光・飯田光央　1999「三王山星宮神社古墳出土の埴輪」『栃木県考古学会誌』20, pp. 55-89

浅田芳朗　1958「埴輪本質論覚書」『古代学研究』第19号　pp. 4-11

足利市史編さん委員会　1979『近代足利市史』第3巻　史料編　足利市

足利市文化財総合調査団

1982「7.丸木古墳群」『足利市文化財総合調査年報Ⅲ』　足利市教育委員会　pp. 28-38

新井　悟　2000「茨城県玉里村舟塚古墳の再測量報告」『駿台史学』109　pp. 135-147

新井仁ほか　1994『下高瀬上之原遺跡』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

荒井世志・坂本行広　1995「下総町菊水山2号墳」『事業報告Ⅳ』香取郡市文化財センター　pp. 37-47

荒海古墳群発掘調査団　1975「荒海古墳群第15号墳発掘調査報告」『成田市の文化財』第六輯 pp. 40-60

安藤鴻基 1974　「千葉県木更津市畑沢埴輪窯址の調査速報」『古代』57　早稲田大学考古学会　pp. 35-37

安藤鴻基　1976「埴輪祭祀の終焉」『古代』59・60合併号　pp. 26-37

安藤鴻基　1981「「変則的古墳」雑考」『小台遺跡発掘調査報告書』芝山はにわ博物館　pp. 151-158

安藤鴻基　1983「房総埴輪の推移」『房総風土記の丘年報』6　千葉県立房総風土記の丘　pp. 36-41

安藤鴻基　1988「房総の埴輪について」『千葉県成田市所在竜角寺第101号古墳発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会　pp. 134-143

安藤鴻基ほか　1981『小台遺跡発掘調査報告書』　芝山はにわ博物館

安藤鴻基ほか　1988『竜角寺古墳群第 101号古墳発掘調査報告書』　千葉県文化財保護協会

飯島伸一ほか　1998「道作1号墳の調査について」『印西の歴史』創刊号

飯塚武司　1984「北武蔵における埴輪生産の展開」『法政考古学』9　pp. 1-33

飯塚武司　1985「東京都・神奈川県地域における埴輪編年」『埴輪の変遷』（第6回・三県シンポジウム資料）北武藤古代文化研究会ほか　pp. 211-226

伊崎俊秋ほか　1983『立山山古墳群』八女市教育委員会

井沢紘生ほか編　1996『日本動物大百科2　哺乳類Ⅱ』平凡社

石川　功　1989「茨城県における横穴式石室の様相」『第10回三県シンポジウム東日本における横穴式石室の受容』　pp. 834-919

石川正之助　1981「高塚古墳」『群馬県史』資料編3　原始古代3・古墳時代　pp. 391-397

石倉亮治・安井健一　2000『主要地方道成田松尾線ＸＩ』財団法人千葉県文化財センター

石坂　茂ほか　1986『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』　群馬県教育委員会

石塚久則ほか　1980『塚廻り古墳群』　群馬県教育委員会

石戸啓夫　1991「古墳時代遺構群の性格」『千葉県印旛郡栄町龍角寺尾上遺跡・龍角寺谷田川遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター　pp. 91-102

石戸啓夫ほか　1991『千葉県印旛郡栄町龍角寺尾上遺跡・龍角寺谷田川遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター

石橋　充　1995「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』6　pp. 31-56

石橋　充　2004「「筑波山系の埴輪」の分布について」『埴輪研究会誌』8, pp. 1-16

泉森皎　1983「古墳と周辺施設」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』関西大学　pp. 227-252

市川市史編纂委員会　1971『市川市史 第一巻 原始・古代』　吉川弘文館

市毛　勲　1963「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』41　早稲田大学考古学会　pp. 19-26

市毛　勲　1964「人物埴輪顔面の赤彩色について」『考古学雑誌』50-1　pp. 11-29
市毛　勲　1968「赤い埴輪（茨城編）一人物埴輪顔面の赤彩色についてⅡ-」『茨城考古学』1　pp. 20-30
市毛　勲　1969「本邦古代における黥面と顔面彩色一人物埴輪顔面の赤彩色についてⅢ-」『考古学雑誌』54-4　pp. 48-59
市毛　勲　1971「千葉県山武郡成東町経僧塚古墳の調査」『史観』83 pp. 96-97
市毛　勲　1973「「変則的古墳」覚書」『古代』56　早稲田大学考古学会　pp. 1-29
市毛　勲　1974a「茨城の埴輪考」『月刊かしま灘』1-3　pp. 1-4
市毛　勲　1974b「前方後円墳における長方形周溝こついて」『古代学研究』71　pp. 1-9
市毛　勲　1976「房総人物埴輪顔面の赤彩色法-人物埴輪顔面の赤彩色についてⅣ-」『古代』59・60合併号　早稲田大学考古学会　pp. 16-25
市毛　勲　1976「はにわをめぐる10の謎」『歴史読本』21-11　pp. 94-108
市毛　勲　1980「人物埴輪における目と口の様式的研究」『古代探叢』　早稲田大学出版部　pp. 317-348
市毛　勲　1984『増補・朱の考古学』（雄山閣考古学選書12）雄山閣
市毛　勲　1985「人物埴輪における隊と列の形成」『古代探叢Ⅱ』　早稲田大学出版部　pp. 353-368
市毛　勲　1991a「人物埴輪における姿態別服飾について」『古代探叢Ⅲ』　早稲田大学出版部　pp. 449-469
市毛　勲　1991b「髪形と身体装飾」『古墳時代の研究3　生活と祭祀』　雄山閣　pp. 45-51
市毛　勲　1992「人物埴輪顔面のヘラガキについて」『考古学雑誌』77-4　pp. 1-16
市毛勲・多宇邦雄　1974「千葉県香取郡小見川町城山発見石棺群と城山６号墳の調査」『古代』58　pp. 26-36
市毛　勲ほか　1971『舟塚原古墳第一次発掘調査概報』（千葉県埋蔵文化財抄報 1）千葉県教育委員会
市原市教育委員会　2004『千葉県市原市山倉古墳群』（上総国分寺台遺跡調査報告ＸＩ）
一柳隆芳ほか　1987『蓼原』（横須賀市文化財調査報告書　第13集・第1分冊）横須賀市教育委員会
伊野近富　1990「塩谷古墳群平成元年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』38（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊藤久美子ほか　1995『古村積神社古墳発掘調査報告書(その2)』岡崎市教育委員会
伊藤　純　1984「古代日本における黥面系譜試論」『ヒストリア』104　pp. 1-18
伊藤　鈍　1987「古墳時代の黥面」『季刊考古学』20　雄山閣　pp. 38-42
糸原　清　1993「よみがえる人物埴輪」『房総の文化財』3　p. 1
稲村　繁 1986　「群馬県における馬形埴輪の変遷」『ミュージアム』425　pp. 4-20
稲村　繁　1991「茨城県における横穴式石室の変遷(1)」『博古研究』創刊号　pp. 21-29
稲村　繁　1997「第３節　家形埴輪」『厚木市登山１号墳出土埴輪修理報告書』　厚木市教育委員会　pp. 22-30
稲村　繁　1999『人物埴輪の研究』　同成社
井上義安 1995　『水戸市北屋敷古墳』
井上裕一　2004「動物埴輪資料」『山内清男考古資料14』奈良文化財研究所　pp. 57-100
犬木　努　1994「下総型埴輪考-同工品論の視点から-」『はにわのとも』1　pp. 23-27
犬木　努　1995「下総型埴輪基礎考」『埴輪研究会誌』1　pp. 1-36
犬木　努　1996「埴輪製作における個体内・工程別分業と種類別分業」『埴輪研究会誌』2　pp. 1-30
犬木　努　1997a「茨城県猿島郡境町百戸出土人物埴輪の再検討」『ＭＵＳＥＵＭ』549　pp. 47-71
犬木　努　1997b「1996年の歴史学界-回顧と展望-　四」『史学雑誌』106-5　pp. 25-31
犬木　努　2005「下総型埴輪再論-同工品識別の先にあるもの-」『埴輪研究会誌』9　pp. 1-22
犬木　努　2007「形象埴輪「列状配置」の本義」『志学台考古』7　pp. 1-21
犬木　努　2008「形象埴輪「列状配置」についての補遺」『埴輪の風景』六一書房　pp. 215-220
猪熊兼勝　1977『埴輪』（日本の原始美術　6）講談社
茨城県教育財団　1992『つくば市中台遺跡報告会資料』
茨城県史編さん委員会　1974『茨城県史料』考古資料編・古墳時代　茨城県
茨城県立歴史館　1990『茨城の古墳』
今津節夫　1983「森台7号墳出土の埴輪について」『千葉県山町森台古墳群の調査』青山学院大学森台遺跡調査団　pp. 118-147
今津節生　1988『東国の埴輪』　福島県立博物館
今津節夫　1992「登山1号墳出土埴輪の年代と系譜」『登山1号墳出土遺物調査報告書』　厚木市教育委員会　pp. 82-87

今津節夫ほか　1992『登山１号墳出土遺物調査報告書』　厚木市教育委員会
入江正則ほか　1995『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
岩崎卓也　1973「古式土師器再考」『東京教育大学文学部紀要』91　pp. 1-26
岩崎卓也　1984「後期古墳が築かれるころ」『土曜考古』9　pp. 1-16
岩崎卓也　1992「関東地方東部の前方後円形小墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44　pp. 53-77
印旛郡市文化財センター　1991『財団法人印旛郡市文化財センター年報・7』平成２年度
印旛郡市文化財センター　1993『財団法人印旛郡市文化財センター年報・9』平成４年度
印旛村教育委員会　1977『吉高山王遺跡』
上野利明・中西克宏　1985「大賀世2・3号墳の出土遺物について」『紀要』Ⅰ（財）東大阪市文化財協会　pp. 1-37
宇田敦司　1996『南羽鳥遺跡群Ⅰ』（印旛郡市文化財センター発掘調査報告書　第112集）
内山敏行　2003「後期古墳の諸段階と馬具・甲冑」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会　pp. 43-58
梅沢重昭ほか　1979『群馬のはにわ』　群馬県立歴史博物館
梅沢重昭　1987「綿貫観音山古墳の埴輪祭式」『討論群馬・埼玉の埴輪』あさを社　pp. 161-170
梅沢重昭　1990「観音山古墳の発掘調査」『藤ノ木古墳と東国の古墳文化』群馬県立歴史博物館　pp. 58-80
梅沢重昭ほか　1998『綿貫観音山古墳Ⅰ　墳丘・埴輪編』群馬県教育委員会
江川隆・藤沢敦　1991『菅沢2号墳』山形市教育委員会
海老原幸ほか　1981『棒山古墳群発掘調査報告書』潮来町教育委員会
榎村寛之　1996『律令天皇制祭祀の研究』塙書房
Ｌ．Ｉ．アリバウム（加藤九祚訳）　1980『古代サマルカンドの壁画』文化出版局
大井古墳群発掘調査団　1975　『大井古墳群発掘調査概要』
大川清 1964 『安蘇山麓古代窯業遺跡』窯業史研究所
大河内光夫・山崎義夫　1984『天王壇古墳』本宮町教育委員会
太田博之　2001『旭・小島古墳群－前の山古墳－』本庄市教育委員会
太田博之　2003『宥勝寺裏埴輪窯跡・宥勝寺北裏』本庄市教育委員会
太田博之　2010「朝鮮半島起源の服飾・器物を表現する埴輪について」『古代』123　早稲田大学考古学会　pp. 111-127
大谷猛・橋本真紀夫・中島広顕・佐々木彰・下津弘・山路直充・加藤晃・谷口榮
　　1994「東京低地周辺の埴輪胎土分析報告」『博物館研究紀要』2　葛飾区郷土と天文の博物館　pp. 1-81
大塚和義　1998「イノシシの魂を所持する人物埴輪の考察」『時の絆［道を辿る］』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会　pp. 537-548
大塚初重　1974「那珂郡東海村関係資料」『茨城県史料』考古資料編　古墳時代　茨城県　pp. 236-239・376
大塚初重　1976「4　埴輪と埴輪窯跡」『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』茨城県　pp. 39-43
大塚初重・小林三郎　1968「茨城県・舟塚古墳Ⅰ」『考古学集刊』4-1　pp. 93-114
大塚初重・小林三郎　1971「茨城県・舟塚古墳Ⅱ」『考古学集刊』4-4　pp. 57-103
大塚初重・小林三郎 1976 『茨城県馬渡における埴輪製作址』（明治大学文学部研究報告考古学　第六冊）
大塚初重ほか　1989『小幡北山埴輪製作遺跡』　茨城町教育委員会
大西貴晴　1994『梶遺跡第二次発掘調査概要』守口市教育委員会
大西智和　1993「地域性の発現からみた円筒埴輪の導入と展開の再構築」『九州考古学』68　pp. 49-63
大野雲外　1897『東京人類学雑誌』140　巻末図版
大野雲外・柴田常恵 1903「（根岸武香家資料）図版考説」『東京人類学会雑誌』207　pp. 352-371
大野延太郎　1896「常陸國霞ケ浦沿岸旅行談」『東京人類学会雑誌』121　pp. 286-291
大場磐雄ほか　1971『常陸大生古墳群』　潮来町教育委員会
大橋泰夫　1990「下野における古墳時代後期の動向」『古代』89　pp. 151-186
大村　直　1982「明戸古墳の測量調査」『市立市川博物館年報』10　pp. 21-23
大森信英 1955 『常陸国村松村の古代遺蹟』
大和久震平　1976「塙平古墳」『栃木県史　資料編考古1』　栃木県　pp. 616-617
大和田坂ノ上遺跡調査会　1988『大和田坂ノ上遺跡』下総町教育委員会

岡田精司　1983「大王就任儀礼の原形とその展開」『日本史研究』245　pp. 1-32
岡田精司　1988「古代伝承の鹿―大王祭祀復元の試み」『古代史論集』塙書房　pp. 125-151
岡田荘司　1989「大嘗祭―〝真床覆衾〟論と寝座の意味―」『国学院雑誌』90-12　pp. 1-27
岡林孝作　1991「冠・帽」『古墳時代の研究　8　副葬品』雄山閣　pp. 92-103
岡本健一　1994「埼玉将軍山の横穴式石室について」『調査研究報告』 7 埼玉県立さきたま資料館　pp. 47-54
岡本健一　1997『将軍山古墳』埼玉県教育委員会
小栗明彦　1997「光州月桂洞1号墳出土埴輪の評価」『古代学研究』137　pp. 31-42
尾崎喜左雄　1964「群馬県北群馬郡高塚古墳」『日本考古学年報』12　pp. 128-129
尾崎喜左雄ほか　1976『下総片野古墳群』　芝山はにわ博物館
小沢　洋　1989「千葉県における横穴式石室の受容」『第10回三県シンポジウム東日本における横穴式石室の受容』　pp. 268-289
小沢　洋　1995「房総の古墳後期土器」『東国土器研究』4　pp. 131-153
小畑三秋　1990「埴輪配列の意義」『京都府平尾城山古墳（古代学研究所研究報告第1輯）財団法人古代学協会　pp. 145-183
小渕良樹ほか　1980『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査会
小山市史編さん委員会　1981『小山市史』史料編・原始古代　小山市
折口信夫　1928「大嘗祭の本義」『国学院雑誌』34-8・11（のち1955『折口信夫全集　第3巻』中央公論社　pp. 174-240に再録）
笠井敏光　1992「埴輪の生産」『古墳時代の研究』9　雄山閣　pp. 209-221
笠原勝彦　1991　『梶遺跡』守口市教育委員会
樫田　誠　1992『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』小松市教育委員会
霞ケ浦町教育委員会　2000『風返稲荷山古墳』
門脇伸一ほか　1994「白山２号墳」『行田市文化財調査報告書』第30集　行田市教育委員会　pp. 55-71
金井塚良一　1979a「野本将軍塚古墳の謎」『歴史読本5月号』新人物往来社（のち1980『古代東国史の研究』埼玉新聞社　pp. 120-136に再録）
金井塚良一　1979b「稲荷山古墳と武蔵国造の争乱」『歴史と人物6月号』中央公論社（のち1980『古代東国史の研究』埼玉新聞社　pp. 137-153に再録）
金井塚良一　1984「県立博物館が収蔵・保管する比企郡出土の形象埴輪について」『埼玉県立博物館紀要』10　pp. 3-25
金井塚良一ほか　1986『日本の古代遺跡・31埼玉』保育社
金井塚良一ほか　1987『討論群馬・埼玉の埴輪』あさを社
金井塚良一　1994a『はにわ屋高田儀三郎聴聞帳』　新人物往来社
金井塚良一　1994b「人物埴輪の伝播と河内」『古代を考える　東国と大和王権』吉川弘文館　pp. 95-182
金砂郷村史編さん委員会　1989『金砂郷村史』
金谷克己　1951「形象埴輪始原論序説」『考古学論攷』1　pp. 79-86
金谷克己　1958「埴輪の意義」『相模女子大学紀要』4　pp. 16-31
金谷克己　1962『はにわ誕生』（ミリオン・ブックス146）講談社
河南省鞏義市文物保護管理所編　2000『黄冶唐三彩窯』科学出版社
神尾明正　1952「金鈴塚の砂と石とについて」『古代』6　早稲田大学考古学会　pp. 13-15
神尾和歌子　2001「人物埴輪樹立の意義」『三重大史学』創刊号　pp. 33-68
神山　崇　1980「殿部田1号墳出土の円筒埴輪」『上総殿部田古墳』芝山はにわ博物館　pp. 77-86
亀井正道　1966「衣服と装身具」『日本の考古学』Ⅴ　河出書房新社　pp. 211-237
亀井正道　1977a「祈りの形象-埴輪」『土偶・埴輪』（日本陶磁全集　3）中央公論社　pp. 54-64
亀井正道　1977b「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『ミュージアム』310　pp. 4-23
軽部慈恩　1955「千葉県山武郡板附不動塚古墳」『日本考古学年報』4　日本考古学協会　pp. 122-123
軽部慈恩　1957a「千葉県山武郡朝日ノ岡古墳」『日本考古学年報』5日本考古学協会　pp. 76-77
軽部慈恩　1957b「千葉県山武郡大堤権現塚前方後円墳の発掘調査」『古代』25・26合併号　早稲田大学考古学会　pp. 21-31
軽部慈恩　1958「千葉県山武郡西の台古墳」『日本考古学年報』7　日本考古学協会　pp. 141-143
軽部慈恩・平沢一久　1964「茨城県出島村風返、稲荷塚前方後円墳の発掘調査」『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』

日本考古学協会　pp. 15-16
烏山町史編集委員会　1978「古墳時代」『烏山町史』烏山町　pp. 14-18
川戸　彰　1957「千葉県山武郡埴谷古墳群調査概報」『上代文化』27　pp. 28-33
川那辺隆徳　1987「人物埴輪配置の再検討」『滋賀史学会誌』6　pp. 3-21
川西宏幸　1973「埴輪研究の課題」『史林』56-4　pp. 108-125
川西宏幸　1977「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』2-4　pp. 13-46
川西宏幸　1978・79「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2・4　pp. 1-70、pp. 90-105
川西宏幸　1986「後期畿内政権論」『考古学雑誌』71-2　pp. 1-42
川西宏幸　1988『古墳時代政治史序説』塙書房
川西宏幸　1988「田身輪の首長」『古墳時代政治史序説』塙書房　pp. 362-401
川述昭人　1984『立山山13号墳』八女市教育委員会
瓦　片生　1903「埴輪円筒に就て」『考古界』2-9　pp. 12-16
岸　俊男　1984「画期としての雄略朝」『日本政治社会史研究　上』塙書房　pp. 11-49
岸本直文　1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39-2　pp. 45-63
岸本直文　1995「前期前方後円墳の変遷」『前期前方後円墳の再検討』埋蔵文化財研究会　pp. 1-2
喜田貞吉　1921「埴輪考」『民族と歴史』5-5　pp. 13-28
北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所　1985　『埴輪の変遷』（第6回・三県シンポジウム資料）
木下順二　1991『ぜんぶ馬の話』文春文庫　pp. 121-122
京都大学文学部博物館　1993『紫金山古墳と石山古墳』
忽那敬三　2010『王の埴輪－玉里舟塚古墳の埴輪－』明治大学博物館
熊谷公男　1988「古代王権とタマ（霊）」『日本史研究』308　pp. 1-23
倉林真砂斗　1994「墳形の違い」『国府台』5　pp. 33-52
倉林真砂斗　1996「房総における前方後円墳秩序」『国府台』6　pp. 8-47
栗原雅也ほか　2005『神内平古墳群』細江町教育委員会
車崎正彦　1980　「常陸久慈の首長と埴輪工人」『古代探叢』早稲田大学出版部　pp. 349-365
車崎正彦　1987「房総豪族層の動向」『古代』83　pp. 83-99
車崎正彦　1988「埴輪の作者」『早大所沢文化財調査室月報』34　pp. 2-8
車埼正彦　1992「関東」『古墳時代の研究9・埴輪』　雄山閣　pp. 29-39
車崎正彦　1999「東国の埴輪」『はにわ人は語る』山川出版社　pp. 133-179
黒澤彰哉　2010「腕の製作技法と顔の作風から見た茨城の人物埴輪」『茨城県立歴史館報』37, pp. 1-32
黒澤彰哉ほか　2004『茨城の形象埴輪』茨城県立歴史館
群馬県立歴史博物館　1979『群馬のはにわ』
群馬県立歴史博物館　1993『はにわ-秘められた古代の祭祀-』
群馬県立歴史博物館　2009『国宝武人ハニワ、群馬へ帰る！』
江南町史編さん委員会　1995『江南町史』資料編１　考古　江南町
古河市史編さん委員会　1986『古河市史』資料　原始・古代編
国學院大學考古學資料館　1976『国學院大學考古學資料館要覧』関東の古墳時代文化
国学院大学宍塚調査団　1971『常陸宍塚』
小暮仁一　1981　「オクマン山古墳」『群馬県史』資料編３　原始古代３・古墳時代　pp. 941-948
木暮昌典ほか　1990『成塚住宅団地遺跡Ⅰ』　太田市教育委員会
古代学研究会　1984「特集　各地域における最後の前方後円墳」『古代学研究』102～106
後藤守一　1927『日本考古学』　四海書房
後藤守一　1931a「埴輪の意義」『考古学雑誌』21-1　pp. 26-50
後藤守一　1931b「着裳の埴輪女子発見」『考古学雑誌』21-8　pp. 61-62
後藤守一　1933a「埴輪の意義を論じて古代の祭祀に及ぶ」『国史学』14　pp. 1-17

後藤守一　1933b『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』（帝室博物館学報第六冊）
後藤守一　1935「前方後円墳雑考」『歴史公論』4-7　pp. 25-44
後藤守一　1936「所謂袈裟衣着用埴輪について」『考古学論叢』第三輯（のち1942『日本古代文化研究』河出書房　pp. 271-294に再録）
後藤守一　1937「埴輪より見たる上古時代の葬礼」『斎藤先生古稀記念論文集』（のち1942『日本古代文化研究』河出書房　pp. 257-270に再録）
後藤守一　1940「上古時代の帽に就て」『人類学雑誌』55-5（のち1942『日本古代文化研究』河出書房　pp. 366-399に再録）
後藤守一　1941a「上古時代の天冠」『史潮』10-3・4（のち1942『日本古代文化研究』河出書房　pp. 319-365に再録）
後藤守一　1941b「上古時代衣服の形式」『古代文化』12-7（のち1942『日本古代文化研究』河出書房　pp. 295-318に再録）
後藤守一　1942『埴輪』（アルス文化叢書15）アルス
後藤守一　1942『日本古代文化研究』　河出書房
後藤守一ほか 1931　「鶏塚古墳発見の埴輪」『考古学雑誌』21-9　pp. 21-44
湖南省博物館　1959「長沙両晋南朝隋墓発掘報告」『考古学報』1959-3　pp. 75-103
小橋健司　2004「山倉1号墳出土埴輪について」『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター　pp. 185-208
小橋健司　2005「山倉1号墳出土埴輪から見た生出塚遺跡」『埴輪研究会誌』9　pp. 23-68
小橋健司ほか　2004『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター
小林三郎ほか　1976『法皇塚古墳』（市立市川博物館研究調査報告・3）市立市川博物館
小林行雄　1935「小型丸底土器小考」『考古学』6-1　pp. 1-6
小林行雄　1944「埴輪論」『史迹と美術』15-4　pp. 105-114
小林行雄　1960『埴輪』（陶器全集1）平凡社
小林行雄　1974『埴輪』（陶磁大系3）　平凡社
小林行雄　1976（初出1949）「黄泉戸喫」『古墳文化論考』平凡社　pp. 263-281
小牧美知枝　1994『大畑Ⅰ-3遺跡』印旛郡市文化財センター
小森哲也　1984「若旅富士山古墳群」『真岡市史　第1巻』真岡市　pp. 470-483
小森紀男　1990「石下古墳群」『市貝町史　第1巻』市貝町　pp. 460-502
近藤義郎　1998『前方後円墳の成立』岩波書店
近藤義郎　2005『前方後円墳の起源を考える』青木書店
近藤義郎・春成秀爾　1967「埴輪の起源」『考古学研究』13-3　pp. 13-35
西郷信綱　1967『古事記の世界』岩波新書
埼玉県教育委員会　1959　『古墳調査報告書』3
埼玉県教育委員会 1978 『馬室埴輪窯跡群』（埼玉県埋蔵文化財調査報告　第７集）
埼玉県立さきたま資料館　1993「すすむ将軍山古墳の解明」『さきたま』 5　p. 2
埼玉県立さきたま資料館　1994「県内主要古墳の調査（Ⅲ）-戸場口山古墳・中の山古墳範囲確認調査-」『調査研究報告』 7　pp. 1-14
財団法人香取郡市文化財センター　1993　『城山四号墳』
財団法人山武郡市文化財センター　1996　『山田・宝馬古墳群（宝馬93-42地点）』
西藤清秀ほか　1997『島の山古墳調査概報』学生社
斎藤国夫 1994 「愛宕山古墳」『行田市文化財調査報告書　第31集』　行田市教育委員会　pp. 6-35
斎藤忠　1988『古典と考古学』学生社
斎藤忠ほか 1974 『茨城県史料』考古資料編・古墳時代　茨城県
斎藤忠ほか　1960『三昧塚古墳』　茨城県教育委員会
斎藤忠ほか 1980 『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
坂井利明 1966 「千葉県芝山町高田木戸前第１号墳発掘調査概報」『塔影』1　本郷学園　pp. 83-104
坂詰秀一 1965 「神奈川県白井坂埴輪窯跡」『武蔵野』44-2･3　pp. 2-20
坂本和俊　1996「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』6　pp. 65-88
笹生衛　1987「椎名崎古墳群・人形塚古墳発掘調査概要」『研究連絡誌』19　pp. 1-4

笹森紀己子ほか　1987『稲荷塚古墳周溝確認調査報告』（大宮市文化財調査報告　第23集）　大宮市教育委員会
佐原眞　1993『騎馬民族は来なかった』日本放送出版協会　pp. 30-32
澤田秀実　1990「東北日本における前方後円墳の出現とその様相」『法政考古学』15　pp. 43-61
澤田秀実　1993「前方後円墳の成立過程」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』12　pp. 1-38
山武考古学研究所　1989　『千葉県九十九里地域の古墳研究』
山武町史編さん委員会　1988『山武町史 通史編』　山武町
塩野　博　1976「日本はにわ製作遺跡総覧」『歴史読本』21-11　pp. 123-136
塩谷修ほか　1990『第３回特別展 常陸のはにわ』　土浦市立博物館
篠川　賢　1996『日本古代国造制の研究』　吉川弘文館
篠原幹夫 1992 『芝宮古墳群』（富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書　第12集）富岡市教育委員会
柴田常恵　1929「上野国箕輪町上芝古墳」『人類学雑誌』44-6　pp. 353-364
島田貞彦　1929「埴輪土物の配置について」『史林』14-4　pp. 71-85
志村哲 1985 「藤岡台地における埴輪の様相」『埴輪の変遷』（第6回・三県シンポジウム資料）　北武蔵古代文化研究会ほか　pp. 181-201
志村哲 1990～1992『七輿山古墳』（範囲確認調査報告書Ⅴ～Ⅶ）藤岡市教育委員会
志村　哲　1995「本郷埴輪窯跡とその周辺」『日本考古学協会1995年度茨城大会シンポジウム２関東における埴輪の生産と供給』　日本考古学協会　pp. 34-39
下津谷達男　1969『流山市東深井古墳群』千葉県教育委員会
下総町史編さん委員会　1990『下総町史　原始古代・中世史料集』下総町
下村登良男　1973『三重県神前山１号墳発掘調査報告書』明和町教育委員会
城倉正祥　2005a「同工品分析と埴輪製作組織論」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』50-4　pp. 75-86
城倉正祥　2005b「同工品分析による埴輪製作組織の復元」『埴輪研究会誌』9　pp. 69-88
城倉正祥　2005c「埴輪生産の多様性」『古代文化』57-10　pp. 15-34
城倉正祥　2006a「埴輪の系統-朝日の岡古墳出土埴輪をめぐって-」『埴輪研究会誌』10　pp. 1-50
城倉正祥　2006b「人形塚古墳出土埴輪の分析」『千葉東南部ニュータウン35-千葉市椎名崎古墳群B支群-』千葉県教育振興財団　pp. 461-483
城倉正祥　2007a「北武蔵の埴輪生産と地域社会」『史観』157　pp. 93-115
城倉正祥　2007b「千葉県香取市城山5号墳出土人物埴輪」『埴輪研究会誌』11　pp. 149-158
城倉正祥　2008「北武蔵における埴輪生産の定着と展開」『古代文化』60-1　pp. 97-107
城倉正祥　2009『埴輪生産と地域社会』学生社
城倉正祥　2010a「生出塚産円筒埴輪の編年と生産の諸段階」『考古学雑誌』94-1　pp. 1-50
城倉正祥　2010b「生産地分析からみた北武蔵の埴輪生産」『考古学研究』57-2　pp. 38-58
城倉正祥　2011『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』（科学研究費補助金研究成果報告書）奈良文化財研究所
白井久美子・芳賀正和　1996「古墳に使用された磯石」『土筆』4　pp. 142-149
白井久美子ほか　2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県史料研究財団
白井秀明・鈴木京太郎　2004「辺田平１号墳出土の埴輪について」『浜北市史　資料編　原始古代中世』浜北市　pp. 719-784
白石太一郎　1975「ことどわたし考」『橿原考古学研究所論集　創立35周年記念』吉川弘文館　pp. 347-371
白石太一郎　1979「近畿における古墳の年代」『考古学ジャーナル』164　pp. 21-26
白石太一郎　1985「年代決定論（二）」『岩波講座日本考古学1・研究の方法』岩波書店　pp. 217-242
白石太一郎　1992「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44　pp. 21-51
白石真理 1991 「馬渡埴輪製作遺跡・小幡北山埴輪製作遺跡」『考古学ジャーナル』331　pp. 2-7
末永雅雄　1947『埴輪』大八州出版（のち『はにわ読本』雄山閣として増補復刊1987）
菅谷文則　1971「横穴式石室の内部－天蓋と垂帳－」『古代学研究』59　pp. 23-28
杉崎茂樹　1987『二子山古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書　第5集）埼玉県教育委員会
杉崎茂樹　1988『丸墓山古墳・埼玉１～７号墳・将軍山古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書　第6集）埼玉県教育委員会
杉崎茂樹ほか　1985a『鉄砲山古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書　第2集）埼玉県教育委員会

杉崎茂樹ほか　1985b『愛宕山古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書　第3集）埼玉県教育委員会
杉崎茂樹ほか　1986『瓦塚古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書　第4集）埼玉県教育委員会
杉戸町教育委員会　1964　『杉戸町目沼遺跡』
杉原清一　1985『常楽寺古墳』仁多町教育委員会
杉山晋作　1969「所謂「変則的古墳」の分類について」『茨城考古学』2　pp. 18-26
杉山晋作　1976「房総の埴輪（一）」『古代』59・60合併号　早稲田大学考古学会　pp. 1-51
杉山晋作　1983「人物埴輪頭部における装身表現」『季刊考古学』5　雄山閣　pp. 47-51
杉山晋作　1986「古代東国の埴輪群像」『歴博』16　国立歴史民俗博物館　p. 15
杉山晋作　1991「人物埴輪の背景」『古代史復元7　古墳時代の工芸』講談社　pp. 41-56
杉山晋作　1992「有銘鉄剣にみる東国豪族とヤマト王権」『新版古代の日本8　関東』角川書店　pp. 149-179
杉山晋作　2008「殿塚古墳・姫塚古墳出土人物埴輪の造形技法」『埴輪研究会誌』12, pp. 1-10
杉山晋作・井上裕一・日高慎　1997「古墳時代の横坐り乗馬」『古代』103　早稲田大学考古学会　pp. 157-186
杉山晋作ほか　1991『西の台古墳』　千葉県教育委員会
杉山晋作ほか　2004「猿田Ⅱ遺跡の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』120　pp. 277-481。
杉山晋作ほか　2006『富士見塚古墳群』かすみがうら市教育委員会・国士舘大学考古学研究室
鈴木一男　1999『飯塚古墳群Ⅲ－遺構編－』小山市教育委員会
鈴木一男　2001『飯塚古墳群Ⅲ－遺物編－』小山市教育委員会
鈴木重信　1990「川崎市高津区末長久保台出土の埴輪」『川崎市文化財調査集報』25　川崎市教育委員会　pp. 39-67
鈴木敏則　1994「淡輪系埴輪」『古代文化』46-2　pp. 39-50
鈴木敏則　2001「浜松市郷ヶ平４号墳確認調査報告」『静岡県の前方後円墳-個別報告編-』静岡県教育委員会　pp. 513-550
須藤　宏　1991「人物埴輪のもつ意味」『古代学研究』126　pp. 26-32
関本寿雄　2002『古海松塚古墳群』大泉町教育委員会
十河稔郁　1991「日置荘遺跡」『堺市文化財調査報告』52　堺市教育委員会
高崎光司　1992『新屋敷遺跡-Ｂ区-』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 123集）財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
高梨俊夫　1994「房総における埴輪の生産と流通」『千葉県文化財センター紀要』15　pp. 178-196
高橋一夫・本間岳史　1994「将軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究』29　pp. 21-38
高橋克壽　1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71-2　pp. 69-104
高橋克壽　1992「器財埴輪」『古墳時代の研究9　埴輪』雄山閣　pp. 90-108
高橋克壽　1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』41-2　pp. 27-48
高橋克壽　1996『埴輪の世紀』講談社
高橋克壽ほか　2005『奈良山発掘調査報告Ⅰ』奈良文化財研究所
高橋健自　1911「支那発掘土偶及其埴輪との関係」『考古学雑誌』1-11　pp. 22-36
高橋健自　1913『考古学』聚精堂
高橋健自 1920 『日本埴輪図集』歴史参考図刊行会
高橋健自　1922『古墳と上代文化』雄山閣
高橋健自　1925「殉死と埴輪」『中央史壇』11-2　pp. 113-119
高橋健自　1927『日本服飾史論』大鐙閣
高橋健自　1929『埴輪及装身具』（考古学講座12）雄山閣
高橋康男　1992『市原市小谷１号墳』（市原市文化財センター調査報告　第45集）市原市文化財センター
滝口　宏　1956「千葉県芝山古墳群調査速報」『古代』19・20合併号　早稲田大学考古学会　pp. 49-64
滝口　宏　1963『はにわ』日本経済新聞社
滝口　宏ほか　1951『上総金鈴塚古墳』千葉県教育委員会
滝口　宏ほか 1988『Shibayama Haniwa Catalogue』芝山はにわ博物館
滝沢　誠　1994「筑波周辺の古墳時代首長系譜」『歴史人類』22　pp. 91-112
瀧瀬芳之　1986『小前田古墳群』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第58集）財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
竹石健二　1964「茨城県新治郡出島村所在稲荷塚古墳発掘略報」『日本大学史学会研究彙報』8　pp. 105-107

竹石健二　1965「茨城県新治郡出島地方に所在する高塚墳墓の性格と今後の問題点」『日本大学史学会研究彙報』9　pp. 66-76
武部喜充ほか　1982『山田・宝馬古墳群』　山田古墳群遺跡調査会
伊達宗泰　1966「勢野茶臼山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』23　奈良県教育委員会
伊達宗泰　1978『埴輪』（カラーブックス424）保育社
伊達宗泰ほか　1972「烏土塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』27　奈良県教育委員会
辰巳和弘　1990『高殿の古代学』白水社
辰巳和弘　1992『埴輪と絵画の古代学』　白水社
辰巳和弘　1996『「黄泉の国」の考古学』講談社
辰巳和弘ほか　2005「新島襄が写生した埴輪」『同志社大学歴史資料館館報』8　pp. 1-31
館野和己　1978「屯倉制の成立」『日本史研究』190　pp. 1-30
田中清美ほか　1989『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ　大阪市文化財協会
田中新史　1981「根田古墳群」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台調査団・市原市教育委員会　pp. 6-19
田中新史ほか　1987『「王賜」銘鉄剣概報』吉川弘文館
田中広明　1994「「国造」の経済圏と流通」『古代東国の民衆と社会』（古代王権と交流2）名著出版　pp. 69-98
田中広明　1995「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向」『東国土器研究』4　pp. 155-178
田中信ほか　1988『南大塚古墳群』川越市遺跡調査会
田中正夫　1991『小沼耕地遺跡』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第100集）財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中　裕　1996「前方後円墳の規格と地域社会」『考古学雑渉・西野元先生退官記念論文集』西野元先生退官記念会　pp. 142-158
田中良之　2004「殯再考」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』小田富士雄先生退職記念事業会　pp. 661-627
田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園創立九十周年記念・研究論集10）真陽社
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
谷口　榮　1991『柴又八幡神社遺跡』（葛飾区遺跡調査会調査報告　第15集）　葛飾区遺跡調査会
谷口榮ほか　1992『柴又八幡神社古墳』（葛飾区郷土と天文の博物館考古学調査報告　第1集）葛飾区郷土と天文の博物館
谷口榮ほか　1997『人物埴輪の時代』葛飾区郷土と天文の博物館
谷口榮ほか　2009『柴又八幡神社古墳Ⅶ』（葛飾区郷土と天文の博物館考古学調査報告　第18集）葛飾区郷土と天文の博物館
玉城一枝　1994「古墳構築と玉使用の祭祀」『博古研究』8　pp. 12-34
玉城一枝　2008「藤ノ木古墳の被葬者と装身具の性差をめぐって」『考古学からみた古代の女性』大阪府立近つ飛鳥博物館　pp. 70-73
玉里村立史料館　1999『地方王権の時代』
田村実造　1990『アジア史を考える　アジア史を構成する四つの歴史世界』中央公論社
千葉県企業庁 1975 『公津原』
千葉県教育振興財団　2006『千葉東南部ニュータウン35-千葉市椎名崎古墳群B支群-』
千葉県教育庁文化課　1990「御前鬼塚古墳」『千葉県記念物実態調査報告書Ⅱ』千葉県文化財保護協会　pp. 1-6
千葉県文化財センター　1994『研究紀要』15　生産遺跡の研究 4-埴輪-
千葉県文化財センター　1995『佐倉市池向遺跡』
千葉県文化財センター　1996『一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書』
千葉県文化財保護協会　1990『千葉県重要古墳群測量調査報告書-山武地区古墳群（2）-』
千葉県立房総風土記の丘 1982 『房総のはにわ』（展示図録ＮＯ. 10 ）
千葉市史編纂委員会　1976『千葉市史』史料編１　千葉市
千葉徳爾　1975『狩猟伝承』法政大学出版局
中條英樹　2003「土製品からみた墳頂における儀礼について」『史跡昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会　pp. 447-454
塚田良道　1991『第5回企画展海をわたってきた文化』　行田市郷土博物館
塚田良道　1992「東国の人物埴輪と渡来文化」土曜考古学研究会発表資料
塚田良道　1995「塵尾について」『埴輪研究会誌』1　pp. 60-67
塚田良道　1996「人物埴輪の形式分類」『考古学雑誌』81-3　pp. 1-41

塚田良道　1998「女子埴輪と采女（上・下）『古代文化』50-1・2　pp. 15-30・pp. 30-37
塚田良道　2007『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣
津金澤吉茂ほか 1980 「群馬県藤岡市本郷埴輪窯跡出土の埴輪について」『群馬県立歴史博物館紀要』1　pp. 1-68
辻川哲郎　2007「埴輪生産からみた須恵器工人」『考古学研究』54-3　pp. 79-98
都出比呂志　1982「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』67-4　pp. 119-122
都出比呂志　1990「日本古代の国家形成論序説-前方後円墳体制の提唱-」『日本史研究』343　pp. 5-39
坪井正五郎　1888「埴輪土偶に基いて古代の風俗を演ぶ」『東京人類学会雑誌』3-23　pp. 100-108
坪井正五郎　1901『はにわ考』東洋社
出島村史編さん委員会　1971『出島村史』出島村教育委員会
伝田郁夫ほか　2009『白井坂埴輪窯跡』川崎市市民ミュージアム
天理市教育委員会　1985『岩室池古墳　平等坊・岩室池遺跡』
東京国立博物館　1980『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇　関東Ⅰ
東京国立博物館 1983 『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇　関東Ⅱ
東京国立博物館　1986『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇　関東Ⅲ
徳田誠志・清喜裕二　2001「仁徳天皇百舌鳥耳原中陵の墳丘外形調査および出土品」『書陵部紀要』52　pp. 1-19
轟俊二郎　1973『埴輪研究 第1冊』
友部町教育委員会 1976 『高寺2号墳』
外山和夫　1972『富岡５号古墳』（群馬県立博物館研究報告　第7集）群馬県立博物館
直木孝次郎　1960「土師氏の研究」『人文研究』11-9　pp. 58-81
永井正浩　1998「近畿地方における巫女形埴輪について」『網干善教先生古希記念考古学論集』pp. 637-658
永井正浩　2002「百舌の巫女」『埴輪論叢』3　pp. 60-67
中井正幸ほか　2003『史跡昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会
中里正憲　2000「角閃石安山岩を混入する埴輪について」『埴輪研究会誌』4　pp. 64-90
中里正憲　2003「角閃石安山岩混入の埴輪〈大刀編〉」『埴輪研究会誌』7　pp. 19-26
中里正憲　2008「埴輪生産域の推定復原」『群馬考古学手帳』18　pp. 39-58
中沢良一・長滝歳康　2003『白石古墳群Ⅱ』美里町教育委員会
中島洋一ほか　1988『酒巻古墳群』（行田市文化財調査報告書　第20集）行田市教育委員会
長滝歳康　2003「左右で異なる馬装の馬形埴輪」『白石古墳群Ⅱ』美里町教育委員会　pp. 224-228
中根君郎・徳富武雄 1930 「東京府久ケ原に於ける彌生式の遺蹟遺物竝に其の文化階梯に關する考察（三）」『考古学雑誌』20-4　pp. 42-49
那珂町史編纂委員会 1988　『那珂町史　自然環境・原始古代編』　那珂町
中村　浩　1977『陶邑Ⅱ』（大阪府文化財調査報告29）大阪府教育委員会
中村　浩　1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房
中村　浩　1990『研究入門　須恵器』柏書房
中村幸雄ほか　1990『長峰遺跡』（茨城県教育財団文化財調査報告　第58集）茨城県教育財団
中山清隆ほか　1998「品川区大井林町一・二号墳の埴輪片分析報告」『品川歴史館紀要』13　pp. 1-37
流山市立博物館　1985『埴輪　流山の古墳文化を考える』（流山市立博物館企画展調査報告書・3）
西田健彦ほか　1991『舞台・西大室丸山』群馬県教育委員会
西田尚史ほか　1990『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会
日本大学考古学会　1952　「千葉県成東不動塚古墳発掘調査概報」『文学部研究年報』第二輯　日本大学文学部　pp. 367-381
日本窯業史研究所　1987『西赤堀狐塚古墳』上三川町教育委員会
野中徹ほか　1976『狐塚古墳』狐塚古墳発掘調査会
野間清六　1942『埴輪美』聚楽社
荻野谷悟　1990「竜角寺第101号墳発掘調査報告（補遺2）」『千葉県立房総風土記の丘年報』13　千葉県立房総風土記の丘　pp. 126-150
萩原恭一　1985「千葉県における埴輪の様相と展開」『埴輪の変遷』（第6回・三県シンポジウム資料）北武蔵古代文化研究会

ほか　pp. 227-260
萩原恭一　1999「九十九里地域の首長墓形態と埴輪供給」『月刊考古学ジャーナル』443　pp. 22-26
橋本博文　1981「埴輪研究の動静を追って」『歴史公論』63　pp. 120-130
橋本博文　1980「埴輪祭式論」『塚廻り古墳群』　群馬県教育委員会　pp. 337-368
橋本博文　1981a「埴輪研究の動静を追って」『歴史公論』63　pp. 120-130
橋本博文　1981b「ＸＶ梶山古墳出土玉類をめぐって」『梶山古墳』大洋村教育委員会　pp. 61-80
橋本博文　1986「埴輪研究余録（その1）」『早大所沢文化財調査室月報』11　pp. 2-7
橋本博文　1987「関東地方の埴輪」『季刊考古学』20　pp. 72-77
橋本博文　1992「古墳時代後期の政治と宗教」『日本考古学協会1992年度大会　研究発表要旨』日本考古学協会　pp. 81-96
橋本博文　1993「埴輪の語るもの」『はにわ』群馬県立歴史博物館　pp. 17-22
橋本博文　1996「埴輪の需給関係」『佐野の埴輪展』佐野市郷土博物館　pp. 3-7
橋本博文ほか 1980 『宥勝寺北裏遺跡』宥勝寺北裏遺跡調査会
長谷川武　1976「伝大日塚古墳出土の衝角形兜」『郷土文化』17　pp. 7-12
土生田純之　1998a（初出1996）「古墳出土の須恵器（Ⅲ）」『黄泉国の成立』学生社　pp. 80-101
土生田純之　1998b（初出1994）「畿内型石室の成立と伝播」『黄泉国の成立』学生社　pp. 173-199
土生田純之　1998c（初出1995）「古墳構築過程における儀礼」『黄泉国の成立』学生社　pp. 202-221
土生田純之　1998d（初出1987）「『記紀』と横穴式石室」『黄泉国の成立』学生社　pp. 304-314
浜田耕作　1911「支那の土偶と日本の埴輪」『藝文』2-1　pp. 210-220
浜田耕作　1931「埴輪に関する二、三の考察」『東京帝室博物館講演集11』（のち1988『濱田耕作著作集1・日本古文化』同朋社　pp. 164-177に再録）
浜田晋介　1992「川崎の埴輪」『川崎市市民ミュージアム紀要』4　pp. 1-49
浜名徳永　1980「形象埴輪考」『上総殿部田古墳・宝馬古墳』芝山はにわ博物館　pp. 87-102
浜名徳永ほか　1975『下総小川台古墳群』芝山はにわ博物館
浜名徳永ほか 1980 『上総殿部田古墳　宝馬古墳』芝山はにわ博物館
林正ほか　1989『堀切古墳群調査報告書』田辺町教育委員会
原田淑人　1918「唐代女子騎馬土偶に就いて」『考古学雑誌』8-8　pp. 1-10
坂　靖　1988「埴輪文化の特質とその意義」『橿原考古学研究所論集　第八』吉川弘文館　pp. 293-393
坂　靖　1996「古墳時代の導水施設と祭祀」『月刊考古学ジャーナル』398　pp. 16-20
坂　靖　2000「埴輪祭祀の変容」『古代学研究』150　pp. 127-134
坂　靖　2001「近畿地方の武器・武具形埴輪」『古代武器研究』2　pp. 85-91
樋口隆康　1972「鐙の発生」『青陵』19（のち1993『馬の文化叢書一　古代』　pp. 325-327に再録）
比佐陽一郎　1992「埴輪馬の馬具」『同志社大学考古学シリーズＶ考古学と生活文化』pp. 279-289
日高　慎　1992「二子山古墳の円筒埴輪について」「瓦塚古墳の埴輪について」『二子山古墳・瓦塚古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書　八）埼玉県教育委員会　p. 37、pp. 94-96
日高　慎　1994「埴輪祭祀の階層性について」『同志社大学考古学シリーズⅥ　考古学と信仰』pp. 101-114
日高　慎　1995「人物埴輪の共通表現とその背景」『筑波大学先史学・考古学研究』6　pp. 1-29
日高　慎　1996「人物埴輪表現の地域性-双脚人物像の脚部の検討-」『考古学雑渉・西野元先生退官記念論文集』西野先生退官記念会　pp. 187-204
日高　慎　1997a「1996年の考古学界の動向 古墳時代（東日本）」『考古学ジャ-ナル』423　pp. 71-81
日高　慎　1997b「埴輪からみた交流と地域性」『人物埴輪の時代』　葛飾区郷土と天文の博物館　pp. 74-78
日高　慎　1997c「埴輪にみる地域性」『地域史フォーラム　６世紀における房総と武蔵の交流と地域性』　葛飾区郷土と天文の博物館　pp. 25-37
日高　慎　1998a「茨城県 前期古墳から中期古墳へ」『前期古墳から中期古墳へ』東北・関東前方後円墳研究会　pp. 105-122
日高　慎　1998b「茨城県つくば市松塚１号墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』9　pp. 97-109
日高　慎　1999a「下総型埴輪と墳丘企画」『同志社大学考古学シリーズⅦ考古学に学ぶ-遺構と遺物-』pp. 385-400
日高　慎　1999b「下総型埴輪が樹立された前方後円墳形態」『月刊考古学ジャ-ナル』443　pp. 16-21

日高　慎　1999c「人物埴輪の共通表現とその有効性」『埴輪研究会誌』3　pp. 1-17
日高　慎　1999d「大阪府守口市梶二号墳出土の狩猟場面を表現した埴輪群」『駆け抜けた人生　笠原勝彦君追悼文集』pp. 76-94
日高　慎　2000a「風返稲荷山古墳出土須恵器をめぐる諸問題」『風返稲荷山古墳』霞ケ浦町教育委員会　pp. 109-120
日高　慎　2000b「埼玉県埼玉瓦塚古墳の埴輪群像を読み解く」『埴輪群像を読み解く』かみつけの里博物館　pp. 36-41
日高　慎　2000c「茨城県における埴輪の様相」『古墳と埴輪』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　pp. 30-33
日高　慎　2001「妙見山古墳の埴輪」『玉里村立史料館報』6　pp. 115-125
日高　慎　2002「埴輪の生産と土師部の成立」『季刊考古学』79　雄山閣　pp. 46-50
日高　慎　2003a「霞ヶ浦周辺の円筒埴輪」『埴輪研究会誌』7　pp. 27-43
日高　慎　2003b「北海道大川遺跡出土資料の再検討」『同志社大学考古学シリーズⅧ考古学に学ぶⅡ』pp. 721-730
日高　慎　2006「「型」成立の実体」『埴輪づくりの実験考古学』大学合同考古学シンポジウム実行委員会編　学生社　pp. 85-99
日高　慎　2007「横坐り乗馬再考」『同志社大学考古学シリーズⅨ考古学に学ぶⅢ』pp. 365-374
日高　慎　2008a「人物埴輪の東西比較ー論点の抽出ー」『埴輪研究会誌』12　pp. 19-37
日高　慎　2008b「伝茨城県行方市沖洲大日塚古墳出土品」『東京国立博物館ニュース』689　p. 3
日高　慎　2010「茨城県玉里古墳群にみる古墳時代後期首長墓系列」『同志社大学考古学シリーズⅩ考古学は何を語れるか』pp. 263-274
日高　慎　2011a「毛野の影響圏としての北武蔵」『古墳時代毛野の実像』（季刊考古学別冊17）雄山閣　pp. 92-100
日高　慎　2011b「東北の前方後円墳埴輪体系」『考古学ジャーナル』617　pp. 7-10
日高慎ほか　1992『はにわ人の服飾』芝山はにわ博物館
平岡和夫　1982「胎土に「金雲母」を含む埴輪について」『山田・宝馬古墳群』山田古墳群遺跡調査会　pp. 54-56
平沢一久　1974「女方古墳」『茨城県史料　考古資料編・古墳時代』茨城県　pp. 68-69
平林章仁　1992『鹿と鳥の文化史』白水社
平山誠一　1993『千葉県松尾町大堤権現塚古墳確認調査報告書』　山武郡市文化財センター
昼間孝志 1991 『塚の越遺跡』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第101集）財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
廣瀬　覚　2003「埴輪の伝播と工人論」『埴輪-円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析-』埋蔵文化財研究会　pp. 205-224
深澤敦仁　2007「「喪屋」の可能性をもつ竪穴」『同志社大学考古学シリーズⅨ　考古学に学ぶⅢ』pp. 375-389
深澤敦仁ほか　2004『多田山古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
深谷市割山遺跡調査会 1981 『割山遺跡』
福島県　1964『福島県史　第6巻　資料編1考古資料』
福島県教育委員会　1982　『原山１号墳発掘調査概報』（福島県立博物館調査報告　第1集）
福島武雄ほか　1932『上芝古墳・八幡塚古墳』（群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告　第2輯）群馬県
福田　聖　1998『末野遺跡Ⅰ』（埼玉県文化財調査事業団報告書　第196集）財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
藤岡一雄　1967　『鷺沼古墳』（習志野市文化財調査報告書　第1輯）　習志野市教育委員会
藤岡市史編さん委員会 1993 『藤岡市史』資料編　原始・古代・中世　藤岡市
藤田和尊　1988「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『橿原考古学研究所論集第八』吉川弘文館　pp. 425-527
藤本強ほか　1969『我孫子古墳群』　我孫子町教育委員会
古屋紀之　2007『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣
古屋紀之　2009「弥生墳墓から古墳へ」川崎市市民ミュージアム編『墓から探る社会』雄山閣　pp. 168-173
保坂三郎 1961 「埴輪男子立像」『大和文華』34　p. 57
穂積裕昌　2004「いわゆる導水施設の性格について」『古代学研究』166　pp. 1-20
穂波町教育委員会　1997『小正西古墳』
本庄市史編さん室 1976 『本庄市史』　本庄市
前原豊ほか　1992『後二子古墳・小二子古墳』前橋市教育委員会
間壁葭子　1988「装飾須恵器の小像群」『倉敷考古館研究集報』20　pp. 33-84
桝井豊茂ほか　1990『ヒル塚古墳発掘調査概報』八幡市教育委員会

増田逸朗　1985「埼玉古墳群と円筒埴輪」『埴輪の変遷』（第6回・三県シンポジウム資料）北武蔵古代文化研究会ほか　pp. 95-100
増田逸朗　1987「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社　pp. 401-421
増田清一　1976『埴輪の古代史』新潮社
増田美子　1996「人物埴輪の意味するもの」『学習院女子短期大学紀要』34　pp. 1-17
松田度ほか　2007「井辺八幡山古墳の再検討」『同志社大学歴史資料館館報』10　pp. 13-34
松前　健　1990「大嘗・新嘗祭と真床追衾」『国学院雑誌』91-7　pp. 494-518
松村一昭　1969『佐波郡東村の古墳』東村々誌編纂委員会
松村一昭　1981「田向二号古墳」『群馬県史　資料編3　古墳』群馬県史編さん委員会　pp. 768-772
丸子亘ほか　1978『城山第１号前方後円墳』　小見川町教育委員会
三浦京子ほか　1998『世良田諏訪下遺跡』尾島町教育委員会
右島和夫　1992『神保下條遺跡』（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告　第137集）群馬県考古資料普及会
三木文雄　1958『はにわ』　講談社
三木文雄　1967『はにわ』（日本の美術19）至文堂
水野正好　1971「埴輪芸能論」『古代の日本2　風土と生活』角川書店　pp. 255-278
水野正好　1974「埴輪体系の把握」『古代史発掘7　埴輪と石の造形』講談社　pp. 136-153
水野正好　1977「埴輪の世界」『日本原始美術大系3　土偶・埴輪』講談社　pp. 172-187
水野正好　1990「王権継承の考古学事始」『ドルメン』4　pp. 4-39
水村孝行ほか 1982 『桜山窯跡群』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第7集）　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
光井清三郎　1902「埴輪円筒は果して柴垣に象れるものか」『考古界』2-7　pp. 22-24
三辻利一　1989「埼玉古墳群出土埴輪の蛍光Ｘ線分析」『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』自然科学分析編（埼玉古墳群発掘調査報告書　7別冊）埼玉県教育委員会　pp. 17-24
三辻利一　1994「4節　千葉県内の古墳出土埴輪の蛍光Ｘ線分析」『千葉県文化財センター研究紀要』15　pp. 130-158
三辻利一　1995　「胎土分析の課題」『日本考古学協会1995年度茨城大会関東における埴輪の生産と供給』日本考古学協会茨城大会実行委員会　pp. 49-52
三辻　利一　1999　「牛伏古墳群出土埴輪の蛍光Ｘ線分析」『牛伏４号墳の調査』　内原町教育委員会　pp. 196-206
水戸市立博物館　1983　『関東の埴輪』
壬生町立歴史民俗資料館 1989 『しもつけのはにわ人たち』
宮坂光昭ほか　1988『一時坂』諏訪市教育委員会
宮崎まゆみ　1989「埴輪に表現された楽器についての調査概報-その1・弾きものまとめ-」『武蔵野音楽大学研究紀要』21　pp. 107-128
宮崎まゆみ　1990「埴輪に表現された楽器についての調査概報-その2-」『武蔵野音楽大学研究紀要』22　pp. 175-190
宮田　毅 1991　「太田市駒形神社埴輪窯跡埴輪集積場」『考古学ジャーナル』　331　pp. 16-22
村田文夫　1995「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛」『みちのく発掘－菅原文也先生還暦記念論集－』pp. 343-365
村田文夫　2000「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛・その後」『民俗と考古の世界－和田文夫先生頌寿記念献呈論文集』pp. 261-285
茂木雅博　1994『古墳時代寿陵の研究』雄山閣
茂木雅博ほか　1985『日天月天塚古墳調査概報1984年度』　茨城大学人文学部史学第6研究室
茂木雅博ほか　1986『日天月天塚古墳調査概報1985年度』　茨城大学人文学部史学第6研究室
茂木正博ほか　1998『常陸日天月天塚古墳』（茨城大学人文学部考古学研究報告第2冊）
森　浩一　1958「和泉河内窯出土の須恵器編年」『世界陶磁全集　1』　河出書房　pp. 239-246
森　浩一　1961a「形象埴輪の出土状態の再検討」『古代学研究』29　pp. 1-7
森　浩一　1961b「須恵器初期の様相と上限の問題」『日本考古学協会第27回総会研究発表要旨』日本考古学協会　pp. 13-14
森　浩一　1972「三、左側くびれ部と穿孔土器」『井辺八幡山古墳』pp. 325-329　同志社大学文学部考古学研究室
森　浩一　1993『日本神話の考古学』朝日新聞社
森浩一・石部正志　1962「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究』30　pp. 1-5

森浩一ほか　1972『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部考古学研究室
森田克行　2009「今城塚古墳の実像と埴輪群」『国宝武人ハニワ、群馬へ帰る！』　群馬県立歴史博物館　pp. 186-193
森田克行　2011a『よみがえる大王墓　今城塚古墳』新泉社
森田克行　2011b「大王の荘厳なる埴輪宇宙」『考古学ジャーナル』617　pp. 22-26
森田　悌　1995「埴輪の祭り」『風俗』122　日本風俗史学会　pp. 2-22
森本六爾 1928 「埴輪」『考古学研究』2-1　pp. 24-36
森本六爾 1930 「埴輪の製作所址及窯址」『考古学』1-4　pp. 23-27
諸星政得ほか　1978『市之代古墳群第3号墳調査報告』取手市教育委員会
八木奘三郎　1894「播磨国千壺取調報告」『東京人類学会雑誌』10-104　pp. 46-56
八木奘三郎　1895「下野国下都賀郡羽生田ノ古墳」『東京人類学会雑誌』11-116　pp. 50-62
八木奘三郎 1897 「常武両国発見の埴輪に就て」『東京人類学会雑誌』12-131　pp. 175-188
八千代町史編さん委員会 1987 『八千代町史』通史編
八千代町史編さん委員会 1988 『八千代町史』資料編Ⅰ・考古
山崎　武 1985 「埼玉県における埴輪窯跡について」『埴輪の変遷』（第6回・三県シンポジウム資料）北武蔵古代文化研究会ほか　pp. 70-94
山崎　武　1986　『鴻巣市遺跡群Ⅰ』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1987a 『鴻巣市遺跡群Ⅱ』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1987b 『鴻巣市遺跡群Ⅲ-遺構・遺物編-』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1993　「埼玉県における埴輪窯跡の調査」『古代を考える』54　pp. 32-64（討論部分含む）
山崎　武　1988　『鴻巣市遺跡群Ⅳ』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1989　『鴻巣市遺跡群Ⅴ』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1990　『鴻巣市遺跡群Ⅵ』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1991　『鴻巣市遺跡群Ⅶ』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1992　『鴻巣市遺跡群Ⅷ』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1994　『鴻巣市遺跡群Ⅲ-本文・写真図版編-』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　1995　「生出塚埴輪窯製品と供給先」『日本考古学協会1995年度大会研究発表要旨』日本考古学協会　pp. 38-39
山崎　武　1999　『生出塚遺跡（P地点）』　鴻巣市遺跡調査会
山崎　武　2000「埼玉県の円筒埴輪の編年について」『埴輪研究会誌』4　pp. 109-120
山崎　武　2001　『鴻巣市遺跡群Ⅸ』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　2002　『鴻巣市遺跡群Ⅹ』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　2004a　『鴻巣市遺跡群11』　鴻巣市教育委員会
山崎　武　2004b「埼玉県岡部町千光寺1号墳出土の埴輪について」『幸魂』北武蔵古代文化研究会　pp. 59-84
山崎　武　2005　『生出塚遺跡（35・39・45・46地点）』　鴻巣市遺跡調査会
山崎　武　2006　『鴻巣市遺跡群12（W地点）』鴻巣市教育委員会
山崎武ほか 1981 『生出塚遺跡』（鴻巣市遺跡調査会報告書　第2集）鴻巣市遺跡調査会
山田古墳群遺跡調査会　1982　『山田・宝馬古墳群』
吉川明宏ほか　1995『中台遺跡』（茨城県教育財団文化財調査報告102）茨城県教育財団
吉田恵二　1973「埴輪生産の復元」『考古学研究』19-3　pp. 30-48
吉見町史編さん委員会 1978 『吉見町史』上巻　吉見町
吉村公男　1994　「ワラビ考」『同志社大学考古学シリーズⅥ考古学と信仰』　pp. 265-272
米澤　康　1958　「土師氏に関する一考察」『芸林』9-3　pp. 46-59
米田耕之助　1976　「上総山倉１号古墳の人物埴輪」『古代』59・60合併号　早稲田大学考古学会　pp. 70-80
若狭　徹　1990　『保渡田Ⅶ遺跡』（群馬町埋蔵文化財調査報告　第27集）群馬町教育委員会
若狭　徹　1991「形象埴輪製作工人に関する一考察」『群馬考古学手帳』2　pp. 43-52
若狭　徹　2000「人物埴輪再考」『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会　pp. 485-520
若狭　徹　2010「保渡田古墳群における埴輪樹立の階層性」『近藤義雄先生卒寿記念論集』群馬県文化事業振興会　PP. 89-118

若狭徹ほか　2000『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会
若松良一　1982「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析」『法政考古学』7　pp. 13-30
若松良一　1986a「形象埴輪群の配置復原について」『瓦塚古墳』(埼玉古墳群発掘調査報告書4)埼玉県教育委員会　pp. 83-86
若松良一　1986b「人物埴輪腕の製作技法について」『瓦塚古墳』(埼玉古墳群発掘調査報告書4)埼玉県教育委員会pp. 87-88
若松良一　1987　「人物埴輪編年試論」『討論群馬・埼玉の埴輪』　あさを社　pp. 136-161
若松良一　1988　『特別展　はにわ人の世界』　埼玉県立さきたま資料館
若松良一　1989　「瓦塚古墳の円筒埴輪について」『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書7）埼玉県教育委員会　p. 73
若松良一　1992a「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究9　埴輪』雄山閣　pp. 108-150
若松良一　1992b「再生の祀りと人物埴輪」『東アジアの古代文化』72　pp. 139-158
若松良一・日高慎 1992～1994　「形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼（上～下）」『調査研究報告』5～7　埼玉県立さきたま資料館　pp. 3-20、pp. 1-12、pp. 25-46
若松良一ほか　1989　『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書7）埼玉県教育委員会
若松良一ほか 1992 『二子山古墳・瓦塚古墳』（埼玉古墳群発掘調査報告書　第８集）埼玉県教育委員会
和歌森太郎　1958　「大化前代の喪葬制について」『古墳とその時代』(2)　朝倉書店　pp. 55-81
和歌山県立紀伊風土記の丘　2008『岩橋千塚』
和歌山県立紀伊風土記の丘　2011『大王の埴輪・紀氏の埴輪』
早稲田大学考古学研究室　1961『印旛手賀』早稲田大学出版部
和田　萃　1995（初出1969）「殯の基礎的考察」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰（上）』塙書房　pp. 7-83
和田　萃　1995（初出1978）「薬狩と本草集注」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰（中）』塙書房　pp. 93-149
和田　萃　2001　「ヲワケ臣とワカタケル大王」『稲荷山古墳の鉄剣を見直す』学生社　pp. 122-131
和田晴吾　1989「葬制の変遷」『古代史復元6　古墳時代の王と民衆』講談社　pp. 105-119
和田晴吾　1996　「見瀬丸山・藤ノ木古墳と６世紀のヤマト政権」『情況』1996-5別冊　pp. 57-80
和田晴吾　2009「古墳の他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』152　pp. 247-272
和田千吉　1897「播磨国飾磨郡白国村人見塚調査報告」『人類学雑誌』12-132・134　pp. 226-234、pp. 310-326
和田千吉　1901　「下野国芳賀郡若旅村発見の埴輪土偶」『考古界』 1-5　pp. 30-31
和田千吉　1902a「古墳に於ける埴輪土偶埋没の位置」『考古界』1-9　pp. 12-15
和田千吉　1902b「埴輪円筒は果して土留なるか」『考古界』2-2　pp. 21-22
和田千吉　1903「埴輪円筒の疑問に就て」『考古界』3-1　pp. 6-8